
ファカルティ

P A T R I O T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファカルティ

【Nコード】

N43770

【作者名】

P A T R I O T

【あらすじ】

空間はある法則を発動させようとしていた・・・

とある小さな町にすむ少年・濱田悠太は、襲撃事件をキッカケに、能力に目覚める。

なぜ彼に能力が？何が起きようとしているのか？

全てを知ったとき、彼は仲間と共に戦いを決意する。

始まりは光なりき（前書き）

ご覧の通り、厨二小説ですが、どうぞよろしくおねがいします。

対象年齢を下けているため、かなり割愛しております。

私の本当の文体ではないので、本当の文体を知りたい方はマイページへどうぞ。

始まりは光なりき

かつて、大いなる力がこの地球ほしを作り出した。

この地球ほしは創造された瞬間、ある一つの法則を産んだ。太陽が地平線に沈むように、それは必然性を秘めていた。

しかし、その法則が覆されたとしたならばどうだろうか。

世界はどうなる？

濱田悠太はまだゆうたは眠気眼をこすりながらイスに座った。どういうわけか、昨日の晚一向に眠れなかったのだ。文にして表現するのは難しいのだが、頭が常に悠太の名を叫んで妨害していたような感じだ。

悠太はため息をつきながら、机に覆いかぶさるように突っ伏した。

この地域特有の気候が、悠太の体を身震いさせる。

濱田悠太はまだゆうた。十五歳。とある小さな県の、小淵沢こぶちさわと呼ばれる町に住む。陽気な中学生だ。体格は小柄である。身長は伸びているのだが、吹奏楽部という部活柄、体をあまり鍛えなかったため体型は幼い。顔にも、まだ幼さが残る。音楽のセンスが恐らくこの学年の中で一番あるのだが、披露の機会は少ない。常にクラスのムードメーカーで、彼がいるのといないのでは、クラスのムードは大きく変わる。濱田は突っ伏したその体勢のまま、顎を机上に乗せて前を向いた。十二月ともなるとやはり寒い。体が小刻みに震える。

しかし寒さより、卒業が近いことのほうが濱田にとって重要なことだった。小学五年生の時に転校してきて以来、慣れ親しんできたクラスメイトだ。卒業式のことを考えると、思わず涙腺がゆるくなる。

そんな寂しさがあってか、眠気を吹き飛ばすためなのか、悠太は前の席に座る男の背中を人差し指で突付いた。

「どうした？」

男はアクビをしながら振り返った。この男はいつも眠そうだが、今日はまた一段と眠そうである。

悠太は気だるそうに話しかけた。

「俺、昨日眠れなかったんだよねえ〜病気？ねえ、これ病気かな？」

「知らねえよ。でも、俺も眠れなかったんだよな」

そう言っつて、男はアクビをする。目の下が黒いのを見ると、本当に眠そうだ。

小田義明^{おだよしみ}。悠太の席の前に座る、やや陽気な男だ。体格は元野球部であるだけの体格だが、身長は悠太と大して変わらない。目が細く、スタンダードの顔つきでも目つきが悪い。眉毛が極端に薄いのだが、本人は剃っていないと豪語している。髪の毛が天然パーマを患っており、前髪がやや丸く反ってしまう。有刺鉄線、とニツクネームが一時期着くほど、髪が硬い。芸人のような男で、常に自分を資本としたギャグをする。確率は低いが大いに笑いを巻き起こすことがある。クラスのムードを作るタイプではないが、盛り下げないようにすることはできる。ちなみに、小説を書けるらしい。

「なんで？お前も？」

悠太が聞くと、う〜ん、と義明は細い目を更に細めた。

「ああ。何か・・・頭を変な思念が渦巻いてる感じ？それが俺に叫びかけているようであって、実はそうじゃないように感じたりして・・・なんだろうな、って感じかな。病気かな」

小説を書いているだけあって、悠太より最善の表現である。しかし、それでも表現をしきれていない。

「まあ、俺は彼女とメールしてたのもあるかな？」

悠太のお得意の冗談である。義明もさすがに慣れたようで、よかつたね、と呟く。

義明は再びアクビをすると、机上の本に手を伸ばした。

体育の授業の後、悠太は水を飲んだ。運動するとノドが渴くのは人間の法則であるからだ。

蛇口を捻り、水を出す。

「お疲れさん」

隣で同じような動作をしているのは、新海直人しんかいなおとだった。悠太は水を飲みながら、片手を挙げる。

新海直人しんかいなおと。秀才。メガネをかけており、「あれ、メガネが浮いている」と言われるほど、メガネが特徴的な男だ。声変わり前の声が聞きたいほどの低い声で、大人は感動するが、下級生は思わず笑ってしまう。言葉の選択肢を巧みに操り、的確なツツコミをすることが出来る。少々リアクションがオーバーなことでも有名だ。

直人は水を飲むと、その特徴的なメガネを中指でクイツと持ち上げた。

「濱田お前、数学の時間寝てたらしいな。小田と一緒に」

悠太は蛇口を戻して、口元拭いた。頭の中に疑問符が浮かんだが、それを片隅に追いやって直人を見る。

「何か眠れなかつたんだよ。頭が妙に冴えて」

新海は腹の底に響くような声を上げる。

「俺は頑張つて起きてるつつつのに・・・」

「え、じゃあお前も？」

新海はうなずく。

「眠れなかつた。俺も昨日の夜、妙に頭が冴えていた」

うーん、と悠太は声を上げた。

「なんでだろう。俺も小田も。新海はどうせ妄想だろうけど・・・」

そして悠太は、いやらしい手つきをした。

「やかましいい！」

いつものオーバーツツコミである。

そんな感じの、猥談のような雑談のような直人との談義を終えた

悠太は、イスに座った。先ほど飲んだ水の味が、まだ舌にこびりついている。水が舌を離れない感じた。

濱田は再び、前の席に座る男の背中を突付いた。暇つぶしのための、義明である。

「なあ小田、なんか水変じゃね？」

「何が？」

「だから、水」

小田は本を片手に首を振った。

「別に変じゃないよ。それどころか、今日は美味しいと思うぞ。運動の後だし」

ええ？と声を上げる悠太。思わず自分の味覚を疑う。では、この舌にこびりつく様な感覚はなんだろうか。

「寝不足だ、寝不足」

ヘラヘラと肩を軽く叩かれた。義明はそう結論づけて、さっさと前を向いて再び読書を開始する。

それでも尚、濱田の舌から違和感が離れることはなかった。

光と闇の産物。

影。

影は光に遮られた空間に出現するものであるが、それは決して闇ではない。だから、闇の中で影が出現することはない。闇と影は似て非なる存在である。影は、光によって誕生し、闇によって消える。のなかつたかあき野中高亮はそういう存在だった。この世に生を受けた瞬間に出現した光によって、高亮は影を得た。光あるところに、影はできるものだ。

だからといって、高亮は決して根暗な男ではなかった。むしろ光だ。高亮は悠太と同様、クラスのムードを作ることのできる男だった。

少々口の軽い男だが、陰での努力は惜しまない。スポーツも万能で、ハッキリ言えば完璧である。しかし、その性格が少しその価値

を下げています。視点を変えて言えば、それがいいのである。完璧でない方が、愛しいものだ。

そんな高亮だが、今日の心には影が渦巻いていた。

胸騒ぎを感じる。

教室の眩いほどの電灯に照らされる、シャープペンシルの影を見ながら、高亮は首をやや傾けた。

こんな日も珍しい。いや、初めてだろうか。

水ねえ。

給食中、悠太は牛乳を飲みながら呟いた。

「何？また水が変なのか？」

悠太はストローから口を離れた。

「なんか変なんだよな。味覚障害じゃなきゃいいけど」

「お前に限ってそれはねえよ」

義明は手を左右に振って否定する。

「何で？」

「だって、給食は普通に喰えんだろ？」

悠太はプラスチック製の茶碗に目を向けた。

「なんででしょうかね」

確かにそうである。悠太が違和感を感じるのは水道水だけで、食品に使われる水分には違和感を感じない。

明らかに自分だけがおかしいと、悠太は気づいた。自分だけ、何か気づいている。

マンネリとした気持ちのまま、五時間目に突入した。

悠太がこうしている間にも、法則は活動を始めていた。

始まりは光にありき。

その言葉の通り、始まりは光だった。この世界に投げられた一筋の光。その光が、全てを産み出したのだ。

この小さな国の、小さな地方の、小さな町で。

それは一筋の光だった。
ポーッと窓の外を見る濱田悠太の目に、一筋の光が映った。光の筋は、遙か遠くの上空から、地面へと降ろされる。綺麗な光の筋だ。

虹ではない。あきらかに不自然すぎる現象だ。ここまで真っ直ぐ、垂直に、光の筋が立ち昇ることはありえない。

「うわっ、なんだあれ」

悠太の性分で、この不自然で美しい現象を、広めないわけがなかった。

クラスメイト達が喜々とした声を上げながら席を立ち、窓側に寄った。先生でさえもだ。

「綺麗だね」

「虹？」

「違うでしょ」

クラスメイト達がわき始めた。悠太も立ち上がり、窓側による。パツと、光の筋が輝き、見るもの全員の顔を照らした。

「キリストでも生まれたのかね？」

悠太の右隣で高亮が呟く。

「だったら面白いのにな」

今度は左隣で、新海が反応する。

「すげえ。誰か、写真撮ろうよ写真」

悠太の背後で義明が騒ぎ立てた。

悠太の心臓は高鳴っていた。理由は分からない。謎の鼓動が、悠太の耳に何かを届けているのだ。

何だこれ。

自分だけだろうか。綺麗だとか、神々しいとかの表現が出てこない。

奇異。

あの光から、それしか感じない。

「なあ……野中、あの光、不気味に感じないのか？」

高亮は、驚いたような表情を見せた。

「え……濱田も……」

高亮の声がどういうわけか、動揺していた。

次の瞬間だった。

舞い降りる一筋の光が突然、驚くべきスピードで膨張した。爆発に似た膨張だ。

光の筋を中心として球体状に広がった光が、瞬時に悠太達を包み込んだ。

悲鳴や驚愕の音がクラス中を行き交った。

「な……なんだ……まさ」

高亮が声を上げる。

悠太は思わず、拳を握り締めた。

叫び？

しかし次の瞬間、光は消滅していた。その場に、光など存在していなかったかのように。

空虚に満ちた群青色の空が、天を覆っていた。それを見ていた全ての人は必ず、首を傾げただろう。

これが、二つの物語の始まりだった。

一つは、法則に従い消滅を受け入れた者達の物語。

もう一つは、法則に抗い続けた者達の物語。

二つの物語は、同じ時間軸を中心として同時展開されることになった。

濱田悠太の中で、何かが起き始めていた。

崩落日和（前書き）

主人公の能力がついに、覚醒します。

直人と義明はどうなるのでしょうか。

崩落日和

謎の光の筋の騒動も一段落し、授業は終わりに近づいた。濱田悠太の心臓は未だに激しい鼓動を見せていたが、クラスに何ら支障はなかった。それどころか、静かになって大いに結構。

そんな静かな教室に、電話の音が鳴り響いた。

「はい、三年A組です・・・はい・・・え？」

受話器を取った教師は困惑の声を上げた。受話器越しに思わず首を傾げる。

「は・・・はい・・・なぜですか？え・・・いや・・・その・・・はい・・・わか・・・あれ？」

教師は疑問の声を上げ、受話器を戻した。

そして、苦笑しながら言う。

「なんか切れたんだけど」

そこに、野中高亮のなかたかあきが突っ込んだ。

「何の電話でしたか？寿司の出前ですか？」

「んなわけねえだろう！どんな電話回線のコンジェスチョンだよ！」

定例である新海直人しんかいなおとのオーバーツッコミである。無駄にいい声なので、クラス中に響き渡る。

「今お前噛んだの？コンジェスチョンって」

「ちげえよ！混雑を英語で言うとななるの！」

へえ〜と一同。

「うぜ〜」

と高亮。

「なんでだよ！」

と返す直人。

「今時Google翻訳に頼りやがって」

「お前だけは言われたかねえよ・・・」

高亮はクルリと教師に姿勢を向けると、尋ねた。

「で、先生。本当になんの電話でしたか？」

無視かよ！という直人のツツコミは無視された。

教師は腕を組むと、ウーン、と唸った。

「なんだろうな、あれは。教頭先生、すごい慌ててやんの。それで、下に来るなって、叫んで、切れた」

教師のフレンドリーな口調はもう生徒に定着している。しかし、あまり調子に乗ると怖いので、生徒はフレンドリーには接しない。

悠太は密かに前の席に座る小田義明の背中おたよしあきを突付いた。

「なあ小田。下で何やってんだろ？」

義明は「知らんと」と投げやりに答えた。しかし、悠太は尚も続ける。

「ビデオの撮影でもしてんだよ。絶対」

義明は経験と感覚で、何のビデオか分かったので、深くは詮索せずは無視した。

教師はどうしようもないので、電話を掛け返すこともなく、また平常授業へと戻った。

その時だった。

轟音とも言える悲鳴が、三年生の教室のある三階に響いた。これには、さすがにヘラヘラしていた連中も体を強張らせる。

悲鳴は徐々に大きくなっていく。近づいてきているのだ。

「え？なに？」

さすがの悠太も声が震えた。

次の瞬間、大勢の生徒が教室に流れ込んできた。全員、下級生である。教師も何人が含まれている。

教団に立つ教師は困惑の顔を見せた。

「へ？なんですか？」

そんな言葉も、悲鳴によって掻き消された。その間にも、生徒

は次々となだれ込んで来る。

やがて最後尾の生徒が入場し、教室のドアに力ギが掛けられた。

「何ですか？」

教師が改めて聞く。

下級生達は震えていた。何人かは泣き叫び、失禁し、ヒステリーを起こしていた。

「怪物が！かいぶつがああああああああ！」

下級生の一人はヒステリックに叫ぶと、気を失った。

喧騒の中、悠太は一番近くで泣いている下級生に声を掛けた。

「どうしたの？怪物ってなんのこと？」

メガネを掛けた小さな男の子だった。男の子は涙で真っ赤に腫れた目を向け、震えた声で答えた。

「突然変な怪物が・・・教室に入ってきたんです・・・それで・・・何人も・・・何人も・・・喰って・・・喰って・・・」

男の子はそう言いかけたが、途中で泣き叫んでヒステリーを起こしてしまった。

悲鳴とヒステリーと恐怖によって、まさに教室は地獄絵図と化した。何も知らない悠太は、ただ困惑するしかない。

「・・・おい、弟はどうした」

前方の義明がゆっくりと立ち上がり、近くの下級生に聞いた。

義明には中学一年の弟がいる。仲は悪いが、それは時期が成せるものであって、本当は互いに長所と短所を認め合ったりしている。

「H君は・・・トイレに行きました・・・お腹が痛いとかで・・・T君を引っ張ってって」

「くそつ、つくづくアイツらしい！」

義明は叫ぶと、直人を一瞥した。

T君とは、直人の弟である。声以外はそっくりの、可愛いあどけなさの残る子である。

「新海、お前も行くか？・・・実際、俺一人で行くの怖い」

直人は髪をクシャクシャと掻いた。本人は気づいてはいないが、

本人の癖である。

「・・・俺も怖いが・・・」

じゃあ行くぞ！と、義明は意を決して直人の腕を引っ張った。

少なくとも義明と直人は、この騒ぎから何が起こっているのかを導き出していた。悠太はまだ分からない。この喧騒が一体何なのかカギを開け、義明と直人は教室を飛び出した。

「待て！」

教師の指示も聞かず、二人は走っていった。しかし、教師は追おうとしない。

教師も何が起こっているが、大体は気付いていたのだ。

「おい！何が起こってんだよ！」

悠太は我慢できずに立ち上がった。恐怖と困惑で声が震えている。怪物ってなんなんだよ！なんで一年とか二年がここに来てんだよ！」

すると高亮が立ち上がり、悠太を見た。

「・・・濱田。分かるだろ？怪物に襲われてんだよ」

「そんなチュウニモウソウみたいなの有り得るわけが・・・」

「俺もここまでとは予想してなかった！さっきの光の筋も、まさかとは思っていたが・・・」

「だからなんなんだよ！おまえ、何言っただよ！」

そう叫んだ瞬間、すぐ近くで別の悲鳴が上がった。

「・・・三年B組から・・・まさか・・・」

高亮が、教室のスライドドアに取り付けられたガラスの向こうを見た。悠太も、それに習って見る。

その時、真っ赤な液体がガラスに吹き掛けられた。

血。

悠太は改めて状況を知った。これは襲撃だ。怪物の。

「なあ、野中・・・」

何でお前、と言いかけた時、悠太は高亮が消えていることに気付いた。

「クソッ！野中・・・」

訳が分からない。なんでこんなことが。でも、なんだろうか。この胸の鼓動は。

悠太はそつと、胸に手を置いた。今にも心臓は破裂しそうだった。

義明と新海は無我夢中で走った。悲鳴が鳴り止まない中を、ただひたすら走った。

二階の廊下は、爪痕や血痕が所々に刻まれていた。壁に走る流線形の爪痕が、その場で起きたことの生なましさを感じさせる。

二人が向かう場所は、二階にある生徒用トイレである。

「頼むから、頼むから・・・」

直人はしきりに呟いていた。

義明もそう思っていたのだが、声に出せなかった。それほどの恐怖と不安で一杯だったのだ。そこから考えれば、直人は心が強かった。

男子トイレまで残り五メートルを切った時だった。

それは肉片を口元から垂らし、全身を血の赤に染めて現れた。

二人はピタリと立ち止まり、恐怖の声を上げた。

「・・・クソッ」

「小田、逃げるな。逃げれば追いかけてくる」

「あれは獣じゃない。バケモノだぞ！」

「だからこそ、早まった判断をするな」

直人の声は限りなく低く、義明の声はいつも以上に高かった。

新海直人と小田義明は一步後ずさり、怪物を凝視した。

教室のドアが破壊された。耳を劈く(つんざ)ような破壊音が鳴り響き、教室中の悲鳴は最高潮へ達した。

悠太は悟った。もう俺は死ぬ、と。

一体。たった一体の怪物が、教室に侵入した。シュー、シューと毒々しい音を立てながら、背後で先端の尖った尾を振り回している。それはまるで、エイリアンのようだった。目がない顔と、二本の長い手と、カブトムシを引っくり返した時のような胴体が目につく。その体は光沢を見せており、粘着性の存在を促していた

怪物は獲物の大群に歓喜の声を上げた。耳を塞ぎたくなるような重低音だ。

「にげるお！」

教師がやっとの声を上げる。

全ての生徒が、本能のままに窓側へと駆け寄る。なかには立ち上がることもすら不可能な者や、踏み倒される者もいるが、誰も気に留めない。この場の全員が人間味を捨て、生存本能を露わにしている。怪物は嬉しそうに頭を振りながら、ジワジワと近づいてきた。

誰も声が出ない。教室は、一気に静寂に包まれた。ほぼ半数以上の者が気絶している。

怪物は頭をしばらく左右に振っていたが、やがて、悠太に顔を向けた。目は無いが、明らかに悠太を捉えていることが分かる。

悠太の周りから、人々が遠退いていく。悠太は一人、狭いスペースに孤立することとなった。

悠太は恐怖に顔を歪めた。怪物は尚も、悠太にジワジワと近づいてくる。

『水の継承者』の物語は、この小さな国の、小さな校舎で始まった。

悠太の中で、何かが起きていた。鼓動は遂に耳の中を占領し、外界の音をシャットアウトする。

悠太は手の平を堅く握り締める。なぜだろうか、それほどの恐怖が湧いてこない。いつもの自分ならば、気絶しても相違ないはずなのに。

そう思った刹那だった。

怪物が口を大きく開き、醜い声で叫びながら向かって来た。透明の毒々しい液体を辺りに撒き散らしながら。

悠太の目が一瞬にして鋭くなる。それは、恐怖と闘志を同時に表していた。

「ウワアアアア！」

悠太の叫び声と、怪物の歓喜の叫びが重なり合うその時、

悠太は覚醒した。

右手に力を感じる。

「水」だ。

悠太は瞬時に、右手の手の平で浮遊する球体が、水であることに気付いた。

「濱田あ！放てえ！」

高亮がいつの間にか、隣にいる。しかし、そんなことに構っていない余裕はない。

悠太は怪物に球体に向け、雄叫びを上げた。

悠太と怪物の間に、青色の閃光が走る。しかしそれは光ではなく、水だ。

悠太はひっそりと笑みを浮かべ、動きが止まった怪物を見た。

崩落日和（後書き）

次回に続くよ！

題名の「崩落日和」は、「行楽日和」とかけて、皮肉っています。

それぞれの覚醒（前書き）

今回はハマとノナカがカッコよすぎる!!

それぞれの覚醒

床にのびる怪物の死体を、濱田悠太はゆっくりと見下ろした。はまだゆうた

怪物の目は生気を失い、その瞳は真つ青に染まっていた。生物学者がこの怪物を見たら、なんと言うだろうか。少なくとも、悠太はこんな怪物を今まで見たことが無い。

「・・・なあ、野中」

お前、何なんだ？

そう呟こうと隣を見たが、もう高亮はそこに存在していなかった。

「・・・またかよ」

悠太はため息混じりに呟き、かすかにうめいた。

そのうめき声がまるでスイッチかのように、教室内の空気が動き始めた。

全員の視線が悠太に注がれる。全員が口々に悠太に質問や賞賛の言葉を掛け始め、ズイズイと近寄ってくる。

悠太は聖徳太子ではない。だから、機関銃のようにぶつけられる質問を、一つ一つ返すことができなかった。というより、悠太自身にも分からないのだ。自分に何が起きているか、この学校に何が起きているか。

分かっているのは、この手に発生した水を、自由自在に操れること。それが何処から発生した水なのかは、全く分からないし、何故自分に発生したのかも分からない。

人々が投げかける言葉に、「特殊能力」という言葉があった。

そうかもしれない。自分には特殊能力があるかもしれない。悠太はそう思った。現実で起きていることを素直に飲み込んでしまえば、それは超能力であると考えることができる。

それより。

「ねえ、みんな！」

騒いでいる人々を、悠太は片手を挙げて制した。

「野中知らない？野中」

この騒ぎを抑えるための、話題提供である。悠太にとっては、そんなことは小さな疑問でしかなかった。

人々は一斉に辺りを見回し始めた。そして、同じタイミングで首を傾げる。

「あれ・・・さつきはいたのに」

「っていうか、怪物に喰われたとか・・・」

それはなかった。悠太が床を見下ろしても、死体は一人も転がっていない。踏まれた者もいるが、死に値するほどではなく、今は立ち上がってちゃんと息をしている。よく怪物に狙われなかったと、感心するほどだ。

「まあいいや。そんなことより」

悠太がそう言い掛けた時、目の前の人々は再び、悲鳴を上げた。

悠太はその悲鳴がなんであるか悟り、瞬時に振り向いた。

再び心臓が鳴り出す。

悠太の目の前に、二体の怪物が現れた。先ほど悠太を襲ったのと同じ種類だろう。

悠太は瞬時に手の平を見つめた。

また、使えるのか？さつきは突発的に飛び出したものであるような気がして、今は出ない気がする。

しかし、そんなことを心配してはどうかしようもない。先ほど出たのならば、今も出る。

悠太は手の平に再び、念をこめた。

「ちよつと下がって！」

人々はおとなしく応じる。もうここにいるのは濱田悠太ではない、救世主だ、とでも言う様に。

案の定、それは出た。小さな水である。現在で解明されている自然界のルールを根底から無視した、曰く付きの水球体だ。

「俺は・・・」

背後の人々に宣言するように、悠太は呟いた。そう呟きながらも、

水の球体をどどん肥大化させる。

怪物との間合いが、一メートルほどまで近づいた。

悠太は躊躇無く、その球体をぶつける。

「水の継承者だ！」

球体は怪物の頭部に直撃し、勢いよく破裂した。しかも悠太の絶妙なコントロールで、水しぶきが出ない。破裂のパワーは全て、怪物の頭部に集中した。

一体目の怪物が、その場に倒れこんだ。

「・・・水の継承者？」

何故、そんなことを言ったのだろうか。悠太は自分の発言を不審に感じた。

まるで、誰かが言わせたかのように。

そんな推察を邪魔するかのように、二体目の怪物が飛び掛って来る。

悠太は瞬間的に、手の平から水を放出する。

閃光のように伸びた高圧縮された水は、怪物の頭部を貫通した。

怪物の悲鳴が響き、やがて怪物は頭部から液体を放ちながら、その大きな体を横たえた。

「・・・お疲れさん、ハマ」

背後で声がして振り向くと、高亮が立っていた。

悠太は思わず目を見開く。

「・・・野中。お前さっき・・・」

そう言っつて悠太は目線を人々に向けるが、人々も信じられなさそうな顔をしている。

高亮の顔は驚くほど冷ややかだった。

「お前が見落としていたんだろ、きつと」

「いやだつて、ここみんなが探しても」

そんなことより、と野中は片手で制した。

「下の奴等が来る。第二波だ。今度は、こつでは済まされない。何百匹、つて単位だ」

悠太は顔をしかめた。

「どういうことだよ・・・お前、さつきから・・・」

「いいからいけよ！お前がいなきゃ、苦しい戦いになるのは必然的だ！あの二人じゃ厳しいんだよ！」

おい！と、悠太は間髪いれずに叫んだ。

「さつきから俺が理解できないことばかり言いやがって！だいたい、ここを離れられる訳ねえだろう！いつ怪物が襲ってくるか分からないだぞ！」

高亮は笑みを浮かべた。いつも教室で見せる、あの笑みだ。

「心配ない。俺も、能力者だ」

え、と悠太はノドから声を出す。

「・・・お前も？」

「ああ。ここは俺に任せろ。外には有刺鉄線おだよしあきとメガネ（しんかいなおと）がいるはずだ」

何が起きているんだ、と悠太は心の中で呟いた。俺以外にも能力者が？

しかし、ここで抵抗しても何もならない。ここは、一先ずおとなしく聞くことにする。

「・・・分かった。信じられないけど、小田と新海がいるんだな？」

高亮は、ゆっくりとうなずく。

その刹那、高亮は目を細めた。

「来たぞ、早く行け！」

破壊音が鳴り響いた。爆発音も、大きな足音も一緒だ。

野中の背後の人々が、また再び悲鳴を上げ出した。完全なPTSトラウマDに罹マっている。

悠太は高亮を見ながら一歩踏み出した。

「分かった・・・最後に聞く」

「最後じゃない。また、会わなければならぬ」

「いいよ！そういうウザい喋り方！んじゃあ、普通に聞くけど、お前は何の能力なんだ？」

高亮はまた笑みを浮かべ、手を腰に置いた。

「俺は影だ。お前の脳にスペースがあつたら、覚えといてくれ」

「そこまで馬鹿じゃねえよ」

悠太はそう言い残し、教室をあとにした。

正面玄関に出ると、眼下に校庭が広がった。そして、入り乱れる怪物と人影も。

新海直人だ。怪物に向かって、必死に両腕を振り回している。そして、その両腕からは絶えず閃光が発されている。

「新海！」

悠太は叫ぶと、正面玄関と校庭を繋ぐ階段を駆け下りた。

直人は戦いながら悠太を一瞥^{いちへつ}すると、再び怪物達に視線を戻して叫んだ。

「濱田！手伝え！」

頭のキれる直人だ。濱田が一体何でここにいるのか、悟ったようだ。

しかし直人は気を取られたのか、隙をとられて一体の怪物に襲われた。

地面に倒れこむ直人。そして、その体に怪物が押し掛かる（のしかかる）。

「新海！」

悠太の叫びと、直人の悲鳴が重なり合う。悠太はすぐさま手の平に意識を集中させる。

まるで獲物に群がるピラニアのように、怪物達は新海に襲いかかった。

鋭利な爪が、直人の顔のすぐそばに突き立てられる。

その瞬間、悠太の手の平から多大な量の水が勢い良く放たれた。

水は直人に群がる怪物を飲み込み、やがて怪物達を遠くへと吹き飛ばした。

「新海、大丈夫か？」

悠太はすかさず直人に駆け寄る。

直人に怪我は無かった。体はビショビショになったが、それ以外は変わったところはない。

「ありがとう、濱田。濡らさなければ尚良かったんだが・・・」

「俺も濡らしたくなかったよ。濡らすなら、おん」

「ゴルアアアアアアアアア！という直人のツッコミが悠太に直撃した。その間にも、怪物達は形成を立て直そうと立ち上がっていた。

「濱田お前、悠長な奴だな」

「いや、お前もだろ」

そうだが、と言いながら新海はメガネの位置を修正する。

「何か・・・何とかなるような気がする・・・」

「新海もか。俺もそう思う」

そう言いながら、悠太は顔を怪物達に向ける。

高亮は数百匹規模と言っていたが、目の前にいる怪物は二十匹ほどしかいなかった。これからまだ、来るのだろうか？

「なあ、小田もいるって言われたんだけど」

「誰から？」

悠太は手の平を、開いたり閉じたりした。

「野中」

直人は疑問の声を上げた。

「野中が？・・・こんな時でも、怪しい奴だな」

悠太はうなずく。

「ごもつとも」

「小田なら、今別の方向を担当している。駐輪所の方だ」

そう言っつて、直人は指先を駐輪所の方へと向けた。学校には入り口が二つある。

「小田とか、新海にも能力が・・・ねえ・・・」

直人は静かに唸った。

「俺も意外だった。まさか、こんなことで」

直人の声は、とても低かった。

「・・・新海、お前の能力は？野中は、影って言ってたんだけど」
「影？・・・アイツらしいな。まあいい。俺は、か」

そう言い掛けた瞬間、体勢を立て直した怪物達が鳴き始めた。
「続きは後だ！」

そう言つて、新海は両手を突き出した。

瞬間的に、両手から閃光が走る。

「電気？」

悠太は思わず呟いた。直人の両手の手の平からほとばしるそれは、間違いなく電撃だった。

電撃は数匹の怪物に当たった。

怪物達の悲痛な叫び声が響き渡る。それは、怪物達の最後に見せた抵抗であった。

崩れ行く仲間の姿を見て、電撃を逃れた怪物達は咆哮を上げた。

「濱田！見てるな！」

直人の声に喝かつを入れられ、悠太はハツとして動き出した。

五匹ほどの怪物が飛び掛つて来る。

悠太はその怪物達を目視すると、右手を振つて水の閃光を出現させた。

水の閃光は、五匹の怪物の頭部や腹部を綺麗に切り裂いた。

「よっしゃあ！」

悠太は喜びの声を上げ、目をギョロリと動かして別の怪物を捉とらえた。

瞬間に怪物達の掃討は終了した。

二十数匹ほどの怪物の死体を悠太と直人は見下ろし、ため息をついた。

「・・・お疲れさん」

直人はメガネを中指で持ち上げながら呟いた。

「・・・ねえ、さっきの続きだけどさ、新海は何の能力なわけ？」

「一緒に戦つて分かつただろ」

悠太は唇を尖がらせた。

「大体は分かったけどさ、まだよく分かんないんだよ。お前のロリパワーかもしれないしさ」

ピッシャブルアアアアアアアア！という直人のツツコミが再び悠太に下された。

「・・・まあいいや。俺の能力は、かみなり雷だ」

強烈なツツコミをしておいて、「まあいいや」とは・・・と悠太は思ったが、ここは黙っておく。

「正確に言つと、イカズチと呼んで欲しいけどな」

「んじゃあ、あんな風にビリビリッて、電気出せんの？」

直人のメガネのレンズが輝いた。

「その通りだ」

その時、駐輪所の方から、大きな破壊音が鳴り響いた。

「ヒイヤッフ〜！」

そして、おたよしあき小田義明の声。

マリオかテメエは！と直人は叫んだ。

「・・・新海、小田を助けなくていいのか？まだ、戦ってるみたいだけど」

直人は首を振った。

「駄目だ。今、小田はちよつとヤケクソ状態」

「何で？」

悠太が首を傾げると、直人は声を潜めた。

「・・・弟を助けられなかったんだ」

うわっ、と悠太は思わず声を出す。思わぬ展開に驚いているのだ。重い話は苦手なんだよなあ。と思いつつも、渋々話しに耳を傾ける。

「俺ら、弟を助けに行っただろう？そんで、その時・・・怪物に鉢合わせたんだ」

直人の声が一層低くなる。

「俺はそのおかげで・・・何だろうな、あれだ、そう、『覚醒』し

「ただ」

悠太は『覚醒』の意味を悟った。自分に起きたことも、直人と小田に起きたことも、全て『覚醒』と考えてもいいだろう。

「それで、なんとか怪物を倒したんだけど・・・小田の弟は死んでた。トイレで」

「何で？」

直人は悲しそうに首を振った。

「よくは分からない。でも、小田の弟は・・・俺の弟に覆いかぶさって死んでいた・・・だから・・・」

直人の声が詰まった。

「・・・庇ったってこと？」

悠太が引き継いで言った。

直人はゆっくり頷くと、駐輪所のある方へと顔を向けた。

「その時に、小田の能力が覚醒したんだ。それで最初は、怒りに身を任せて戦ってたんだけど・・・」

直人は小さく笑みを浮かべた。

「今は楽しんでるようだ。俺もそうなんだが、段々戦っているうちに、悲しみの感情を無くしていつているような気がする」

「あ、俺もそうなんだよ。なんとというか、楽観的、というか」

直人は唸った。

「何でだろうな・・・」

悠太は首を振るしかない。

「さあね・・・」

一通り会話を済ませた瞬間だった。

先ほどの怪物の鳴き声が、辺り一面に響き渡った。今回は音量が違つた。

「・・・まさか」

「また奴らだ」

高亮の言ったとおりになった。時間はずれている様だが。

「今度は数百匹規模って、野中は言ってたよ」

「この音からして、そうだろうな」

直人は腕を組んだ。

轟音は更に大きくなる。悠太と直人は思わず身構えた。

「今度は喋る暇はないぞ」

はいよ、と悠太は答え、緩んだ顔を元へと戻した。

平和な町の校庭が、修羅場と化す。

それぞれの覚醒（後書き）

次は小田君が登場するよ！

・・・するかな？

不可思議な世界で（前書き）

どうぞ

不可思議な世界で

校庭を囲むフェンスやネットを、怪物達は軽々と乗り越えた。推定約五百匹。この学校の全校生徒数を遥かに超える数だ。

この数には、さすがの悠太もたじろいだ。

「・・・まじかよ、多すぎるだろ・・・」

直人は拳を握り締めた。

「・・・大丈夫だ」

そんな直人も、声が震えている。

その時、背後で声が上がった。喜々とした、やや浮うわついたような声だ。

二人が振り返ると、そこには小田義明おだよしあきが 浮いていた。

「加勢するよ」

義明はそう呟くと、ゆつくりと地面に降り立った。制服の所々が破けているのを見ると、かなり激戦を強いられたようだ。

直人はすかさず首をふる。

「駄目だ、小田は駐輪所担当だろ」

「だって駐輪所の方、全然来ないんだぞ。暇すぎるんだ。・・・
・ハハツ、そんな顔すんなよ、大丈夫だって。駐輪所の方に来たら、そちらの迎撃に専念するからさ。ほらそんな顔するから、メガネになっちゃった」

「元々だゴルアアアアアアアアアアアア！」

直人は危うく電撃を放ちそうになったが、何とか自制した。場を理解できない悠太は首をかしげた。

「・・・え、小田は何なの？何で飛べんの？」

義明は悠太と視線を合わせた。義明は、小さく笑みを浮かべる。
「俺の能力は空気。だから飛べる」

悠太も思わず笑みを浮かべた。

「空気って・・・」

「まさに存在そのものだな」

そこに、直人が加勢する。

「うるさいよアンタら！」

今度は義明がツツコミにポジションを移動する。

そんな明るいムードだったが、敵の接近によってその幕は強制的に閉じられた。

「濱田、小田。来るぞ」

日常会話の時より低い声が唸る。

直人の声で、悠太と義明は顔を上げた。

「・・・話してる暇、なさそうだな」

義明が呟く。

「今さっき話してたところだよ」

そう言いながら、直人は一步踏み出した。

怪物達は、群れの統率を保ちながら、ジワジワと近づいて来ている。

三人は完全に囲まれた。右に行こうと左に行こうと、怪物達がそこにはいる。後ろに逃げることはできるが、花壇があるし、第一に逃げることは考えられない。校舎には一般人がいるのだ。

怪物達が動きを止めた。小さく鳴き声を上げながら、互いに見合わせ始める。

「・・・ここから喋っちゃいけないゲームね」

悠太がひっそりと言う。

「・・・言われなくても」

義明は右手の手の平を大きく広げた。

その時、一体の怪物が咆哮を上げた。恐らくリーダー格の怪物だ。高く鳴り響く咆哮を合図に、三人を囲む怪物達は動き出した。

数十体の怪物が三メートルほど跳躍し、跳びかかって来た。義明は、すかさず大きく右手を振る。

ピューという風の音が鳴り響き、怪物達は空中で制止した。

「新海！」

早速ゲームのルールを破った義明。しかし、罰ゲームをするほどの余裕はないので、そのままこの場は展開していく。

空中でもがく怪物に向かって、直人は電撃を放った。電撃は瞬時に怪物を襲い、怪物を死の淵へと叩き落す。

「ナイス！新海！」

義明がガッツポーズし、

「小田！周りを見る！」

直人がそれを叱った。

おっと、と義明は再び跳びかかって来る怪物を目視すると、今度は左手を振った。

左手から強い衝撃波が流れ出た。もちろん目には見えないが、その衝撃波は怪物の腹部を痛々しく切り裂いた。

怪物の悲鳴と共に、怪物の体液が宙を舞う。そしてその緑色の体液は、激しい戦闘を繰り広げる悠太の頭に

ベチャツ。

まるでお約束かのごとく、頭に降りかかった。

当然、悠太の悲鳴が轟くが、構ってやる余裕もない。

あとでスペイオに連れてってやる。

義明はそう思った。

粘着性の意味不明な液体をかけられ、悠太は不満の声を漏らしたが、責めようとは思わなかった。思えなかった。それだけ、悠太と怪物達の戦闘は激化していたのだ。

悠太は怪物の頭を掴むと、至近距離で水を放った。

怪物の頭が破裂する。悠太は怪物の返り血をものともせず、そのまま怪物の死体をなぎ払った。

「次！」

そう叫び、悠太は自分の体を取り巻くように水を放った。

水が円形に、空間に出現する。まるでフラフープのようだ。

悠太の一声で、その水は向かってくる怪物を襲った。怪物達は悲鳴によって抵抗するが、成す術なく命を落としていく。

悠太の全身は緑色に染まっていた。怪物の返り血だ。真っ黒な制服であるのにも関わらず、綺麗な緑色に染まっている。まるで迷彩服だ。

悠太はため息をつき、三百六十度辺りを見回した。

ここは戦場だ。日常生活では発揮されない生存本能が、存分に発揮される場だ。ここには善悪と呼ばれる道徳的思考は存在せず、生きるか死ぬかの厳格な二択しか存在しない。

すぐ近くで、義明と直人が戦っている。二人の表情には恐怖が宿っていた。同時に、狂気も。

ここでゆっくりと休めるはずなどなかった。怪物達の襲撃はとどまる事を知らない。悠太は悪態を付きながら、再び戦いに臨んでいた。

最後の一体の怪物は、義明によって殺められた。空気的能力で、切り裂いたのだ。

地面に横たわる怪物の頭を、義明は掴み、掲げた。

「・・・まだ、弟の分は残ってるからな」

義明は憎憎しげに言うと、能力を使い、怪物の頭を胴体から切り離れた。そして、その頭を空中へと放り投げる。

一瞬だった。

怪物の頭が原型を留めなくなるほど、切り裂かれたのは。

「・・・小田、もういいだろ」

直人がくぐもった声を発す。

「・・・分かった」

義明はそう呟くと、体液で緑色に染まった右手を見た。

「・・・お前の弟は、偉大な人間だと思う。人を庇うなんて、俺は物語でしかないと思ってた。お前の弟はすごいよ。感謝してる」

ありがとう。

直人はそう言うと、深く頭を下げた。
そんな直人を見て、義明は首を振った。

「俺に言わないでくれ。礼なら、弟に言ってくれ」

「・・・そうする」

新海の低い声が悠太の身に染みる。

「なあ、お前らこの後、どうするんだ？」

義明は上手く話を方向転換した。

直人はメガネを中指で押し上げ、答える。

「・・・とりあえず生存者の確認と、今後の方針だな。能力のことを説明する必要もある」

「ああ、それと、野中のこともな」

悠太が割り込んで入った。

「そうだな。野中のことも、色々聞いておく必要がある・・・今の時間は？」

「四時」

直人は小さく頷いた。

「サツさと行動を開始しよう。日が暮れる」

そこに、義明が緑色の手をスツと挙げる。

「ゴメン。俺は、別行動にしてくれ」

何かを察したのか、直人は了承した。

しかし悠太は分からないので、何で？と疑問の声を上げる。

義明は、かすかにうつむいた。

「・・・弟を弔^{ひびやく}わせてくれ」

少し、声がかすれていた。

悠太は直人と共に教室へ向かう途中、酷い不安に心を襲われた。
まるで、今までの不安を貯めたダムが崩壊したかのように。悲しみも混じっている。

思わず悠太は、壁に手を付いた。まるで運動の後のように息が苦

しくなり、自然と嗚咽おえつがこみ上げる。

「・・・悠太、お前もか」

直人が悠太の肩に手を置く。直人の呼吸も、荒れていた。

「意味わかんねえ・・・何でいきなり・・・」

「戦闘中、俺達は不気味なほど、テンションが高かった。そうは思わないか？」

悠太は小さく頷いた。

「・・・うん。なんか俺も、自分で自分が怖かった」

直人は悠太の肩から手を離すと、苦悶の表情で腕を組んだ。

「あの時の俺達は、何かがおかしかった。何かが、頭の中に流れ込んだとしか考えられない。麻薬やアドレナリンも考えたが、ここま
でなはずがないしな。とにかく、俺達の体に何かが起こっていた」
「・・・だからかなあ、上機嫌だった小田がいきなり、あそこまで
落ち込むなんて」

「そうとしか考えられない」

直人はそう呟くと、頭を抑えた。

その時、悠太の頭に記憶が襲い掛かった。

あまりに膨大な記憶で、悠太は思わず、その場にへたり込んでしまった。

戦闘の記憶だ。

自分は教室を出て、いくつもの屍しかばねを乗り越えて、校庭に出た。

そして、あのグロテスクで不気味な怪物達を相手に、自分でも信じられないほどの戦いを展開して見せた。

怪物の腕を（も）ぎ、足を引き裂き、頭部を破裂させる。なんと恐ろしい世界だろう。自分はそれを、それを、楽しんでいた。まるでそれが、一種のゲームかのように。

悠太は思わず、吐いた。直人はそれを、咎めなかった。

悠太に起きた現象は、戦場から帰還した兵士特有の症状と一致していた。

第二次世界大戦後。最前線で奮戦した兵士達は母国に戻り、その

後遺症に苦しんだという。人が人を殺めるのは、それほどのことなのだ。そのために、戦場の最前線の発砲率でさえも、一桁ひとけたのパーセントで済んだ。イラク戦争においてもそうである。戦地から帰還した兵士達も、その後遺症によって苦しめられたのだ。その影響で、ニューヨークにはホームレスが爆発的に増加した。

そこから言えば、濱田悠太や新海直人、小田義明はもう、『戦士』になってしまったのだ。

もう二度と戻れない世界に、足を踏み入れてしまったのだ。

『戦士』は三人だけではなかった。

二人はやっとのことで教室に戻った。

「・・・お疲れさん。うわ、すごいな」

そう言っつて、高亮は小さく笑う。無理も無いだろう。二人とも、全身を緑色に染めていたのだから。

悠太は教室を見渡した。床には悠太が殺めた三体の他に、五体の怪物が倒れていた。

「・・・これ全部、野中が」

「ああ。そうだよ」

怪物の死体が増えていることから考えると、高亮も戦ったのだろう。しかし、高亮の体は全く緑色に染まっていなかった。怪物の体もそうである。床に倒れる怪物は、全くの無傷で床に倒れていたのだ。

直人は野中と目を見合わせた。

「野中、お前は何を知っているんだ？教えてくれ」

高亮はいやらしい笑みを浮かべると、

「すぐに教えてやる。でもその前に、やるべきことがあるんじゃないのか？」

両手を上げて見せた。

「・・・その通りだな」

直人は渋々頷くしかなかった。

生存者数、六十三人。内、三十五人が軽傷、五人が重傷、錯乱状態の者が三人。一人が意識不明の重体。

「あの襲撃で、よくここまで生き残ったよ」

悠太のおかげで、三年A組の生徒は全員無傷だった。

直人は軽傷者の腕を包帯で巻いた。包帯は、保健室から拝借したものだ。

「先輩・・・怪物に引つ搔かれたんですけど、感染とかは・・・しませんよね？」

一年生の後輩が小さな声で聞いた。

「分からない。あの怪物事態が謎だからな」

そう言つて、直人は立ち上がった。

ゾンビに襲われた者はゾンビになる という設定はもはやありきたりな設定だ。この後輩は、それを心配しているのだろう。「問題ない」と直人は言いたかったが、なにぶん意味不明の生命体だ。何が起きるか分からない。

もし感染したら、殺すしかない。

直人はその後輩を見下ろし、ため息をついた。

「・・・新海、これからどうするんだ？処置も一通り済んだだろう？」

高亮も処置を終えたらしく、直人と同じ動作をしていた。

「どうすんだよ。電話も繋がらねえし、警察も一向にこない」

口を挟んだ悠太の声には、あきらめが混じっていた。

そうだな、と腕を組む直人。

「・・・とりあえず、小田を招集して、町を一通り見て回ってもらおう。空を飛べるのはアイツだけだし。俺達は、町に出て生存者の搜索と食料の調達だ」

さすが新海、と悠太は呟いた。直人は素晴らしいほどのリーダー

シッブを發揮する。

「新海、生存者の搜索は俺がしてやるよ。俺も割りと移動が自由だ。お前らは食料の調達と、この町の現状を見てこい」

高亮が拳手をしながら言った。

「分かった。そのお前の能力については、あとでゆっくりと聞かせてもらうからな」

もちろんだ、とOKサインを出す高亮。依然、野中高亮のなかたがあきの能力については、謎のままだ。

悠太が外に出ると、義明が花壇の前に立っていた。

花壇には深く穴が掘ってあり、義明は 遺体を抱えている。

義明の名を呼びかけた悠太は、思わず口を閉じた。そして、沈黙をそのまま保つ。

義明は大きな遺体を穴の中に優しく置いた。遺体には 片腕がなかった。

義明は能力によって、その穴を少しずつ埋めていった。どこか名残ごりお惜しそくに。

その背中には、悲哀が滲み出していた。この雰囲気、さすがの悠太も声が出ない。

大きな穴が埋まるまで、悠太は何よりも長い時間を過ごすことになった。人間が死と向き合う、混沌とした時間を。

不可思議な世界で（後書き）

次は・・・どうしようかな

眞実を見て（前書き）

ふう。勉強勉強。

真実を見て

濱田悠太、新海直人、小田義明、野中高亮の四人は、正面玄関に集結した。

高亮以外の三人は、後遺症のためか浮かない顔をしている。無理もないだろう。

「・・・小田、飛べるか」

直人は制服の襟を直しながら言った。

義明は作ったような笑みを浮かべ、首を小さく振った。

「ああ。ちよつと疲れてきたけど、多分大丈夫だ」

「そうか。じゃあ、よろしく頼むな」

「小田、えくと・・・気にするなよ」

言葉を選びながら悠太は言った。しかし、言葉の選択は間違ったようだ。悠太の兄弟も、直人の兄弟も助かっている。

「これから町に出ても、ショックは受けるなよ。それだけは言うておく」

高亮がポケットに手を突っ込みながら言った。十二月ともなると、手はかじかむ。

三人は頷いた。何が起ころうと、心の準備はできているつもりだ。「じゃあ、行ってくる」

義明はそう呟くと、身を翻し、ジャンプした。

空気を切り裂くような音が響き、次の瞬間にはもう、義明は飛びだっていた。

十数メートル上空で、義明の体が再び翻る。

「・・・いいなあ、飛べて。俺も飛びたいよ」

空へと旅立った義明を見ながら、悠太は呟いた。

「お前も出来るんじゃないか？水の勢い強めたりして」

「馬鹿、効率わりいよ」

悠太は一蹴した。しかし、何故か野中は浮かない表情している。

「・・・贅沢なこと言いやがって。お前のような奴がそんなこと言うなんて、贅沢にもほどがある。まさか、こんな奴にこんな能力があるなんて・・・お前が生徒会に入った時ぐらい憤いらだちってるよ」

悠太は顔をしかめた。

「どういうこと？」

高亮は鼻息を荒げ、首を振った。

「そのうち教えてやる。さあ、見回りに行こうか」

悠太は思わず不満の声を上げた。さつきからこんな調子である。

突然現れたと思えば、意味不明な言葉を言い放つ。間違いなく高亮は何かを知っているのだが、それを目の前で持て余されているような気がして、悠太の心は薄い黒に染まりかけていた。

「なあ野中」

歩き出そうと踏み出した高亮の肩を、直人は掴んだ。

「学校に人残してっつていいのか？もし敵に襲われたら・・・」

「大丈夫。来たら、分かるから」

高亮はそう言い放つと、校舎の影へと身を移した。

「じゃあ、また会おう」

パチン、という指の音と共に、高亮は瞬時に消えた。溶け込んだと言うべきだろう。高亮の体は、まるで影に吸い込まれるように、消えたのだ。

悠太はため息を漏らした。

「なんかもう意味わかんねえ」

「大丈夫だ。そのうち全て分かる」

直人は悠太の肩に手を置いた。

校門を出ると、目の前に惨状が広がった。

道路のコンクリートはえぐられ、その向こうにある田畑は踏み荒らされ、辺りには無数の車は横転していた。

「・・・まじかよ」

ここまでとは。悠太は思わず呟いた。この場は、破壊に満ちて

いる。

かつての小淵沢町はそこにはない。人々が住んでいるはずの団地にも、家にも、道路にも、自然にも、かつての活気や生气は存在していなかった。なんという殺風景だろうか。目の前にある物質のほとんどが、残骸だ。

隣で、直人が崩れ落ちた。ヒザを地面に着き、大きく息を吐き出す。

「・・・予想通りだったが・・・やっぱり・・・」

直人の家はここからでも目視できるほど、近い位置に存在している。

そして、

悠太がそつと目を向けた先には、直人の家は存在していなかった。存在するのは、瓦礫がれきのみ。恐らくあの瓦礫は、元々直人の家だったのだろう。

「新海・・・」

悠太はうずくまる直人を見下ろした。

「・・・大丈夫だ。予想はしていた・・・」

かつての生活の場が惨状と化せば、誰でもこうなるだろう。

恐らく、悠太の家もこうなっているはずだ。

直人はグツと涙をこらえた。悠太も同様に。

「泣いている場合じゃない。俺達は、六十三人の命を背負っているんだ」

悠太は一滴の涙を拭くと、顔を上げた。直人も喘ぎ声を上げながら、ゆっくりと立ち上がる。

「行こう。とりあえず、町の中央へ」

一つ。いや、一人の化身は 光によって産み出された。

そして、もう一人の化身は、光の産物によって生み出された。

それは産物の使命であり、産物の宿命であつた。

「踏みなれた地上は・・・もうここにはない。あるのは、残骸だ。俺達を育てたこの地にはもう、俺達を育む気は無い・・・この地はもう、運命に従つてしまつたというわけだ・・・」

新海政貴しんかいまさきは、町内を一望した。町内を見渡すことが出来る、この山の山頂からでも、町の惨状は分かつた。

新海政貴しんかいまさき。日本人とフィリピン人のハーフであるが、顔はほぼ日本人である。部活には無所属であるが、体格はプロレスラー並の体格をしている。体格の割にパソコンの技術があり、同級生は沢山の依頼をする。ネット上の掲示板を管理しており、学年の一部の間が、その掲示板を利用してゐる。性格はまさにミステリアス。時々スパルタンの兵士のように厳格だが、時々大らかな人間へと転身する。同級生はみな、敬称と愛称をこめて、『まつさん』と呼ぶ。親分的存在だ。

「まつさん・・・なんか、信じられないよな。さっきまであの学校にいたのにさ・・・」

政貴の隣に、中込宏太なかにみこうたが又ツと現れた。

「受け入れるしかないだろう。これが運命なのだからな」

「まつさん・・・度胸がありすぎだっちゅうの」

宏太はヘラヘラとしてゐるが、やはり動揺してゐるのは明確だつた。

中込宏太。政貴と同じクラスに在籍する中学三年生だ。軽い男だが、誰に対しても腰が低く、優しい。髪の毛は小田義明おたよしみと同様で、有刺鉄線の如く硬い。しかも、かなり天然のパーマだ。そんな宏太の義明と違う所は、自分の髪の毛を思うがままにさせず、その癖くせに抗つてゐる所だ。つまり、ワックスである。ちなみに、小田義明と深い親交がある。髪の毛仲間だろうか。毛がトレードマークのようなもので、『ヒゲ』や『すね毛』や『アルコールランプ』の異名を持つが、本人はその呼び名を嫌つており、周りには普通に『コウダ

イ』と呼ばせている。

「宏太。諦めようじゃないか。俺は、受け入れるしかないと思っている」

政貴は小さく笑みを浮かべた。諦めの笑いであるのか、抵抗の笑いであるのかは不明だ。

「そんなこといってもさ・・・」

宏太はそう呟くと、背後を振り向いた。

背後には、一人の男が立っていた。いつもの立ち方ではなく、仁王立ちで。

「え〜と、『スキアー』・・・だっけ？」

男は小さく頷いた。

「そうだ。そう呼んでくれると嬉しい。もう、本名は語らないでくれ。それが俺の真の名であり、役目だ」

「まさかお前が・・・ねえ」

宏太はそう呟くと、目を細めてスキアーを見た。

「なんか面白いよな。俺もそんな名前が欲しいよ。俺だったら、『ヘル』って付けるのに」

そう言いながら、スキアーの背後から川口翔馬かわぐちしょうまが現れた。

宏太はリアクションを大きくして驚いた。

「うわっ、川口驚かすなよ」

「お前が驚きすぎだよ」

そう言いながら、翔馬はポケットに手を突っ込んだ。

「まつさんの覚悟は正しいよ。俺も、頑張っつて今覚悟してんだからさ」

「川口まで・・・じゃあ俺はどうしたらいいのさ」

政貴はゆっくりと宏太を見た。

「お前も受け入れるんだ。俺達の生まれた理由だ」

「そんなの無理だっつて！今まで俺は、あそこで普通の生活を営んでいたんだぜ？」

宏太は町を指差した。

「それに、さつきから色んなこと教えられて、もう頭がパニック寸前なんだよ！どうしてアイツが『スキアー』って言うんだよ！」

「運命だ。俺は元々、スキアーという名と使命を背負って生まれてきた」

スキアーは割って入った。宏太は思わず、顔をしかめる。

「宏太。抗うな。受け入れろ。全てを知れ」

「その通りだ、宏太」

翔馬は微かに笑みを浮かべ、息を吐き出した。

かわくちしよつま川口翔馬。新海政貴、中込宏太と同じクラスに在籍する。この地

には、中学二年の時に転校してきた。宏太を上回るほどの軽い男だが、根は強い。気取り屋ではあるものの、友達には驚くほど親切で、ノリがいい。高身長でスラッとした体型だ。これまた体型とは裏腹に、絵を描くのが上手く、机を見ると落書きが増えたりしている。どちらかと言うと、女性が好きそうな絵のタイプだ。

「川口まで・・・」

宏太は呆れたように呟き、視線をスキアーに移した。

「で？俺達はこれからどうしたらいいんだ？」

「とりあえず、判断はお前達に任せる。教えるべきことは全て教えて」

スキアーは腕を組んだ。

「でも、全ては教えてないんだな？」

政貴は間髪いれずに質問する。

その言葉に、スキアーは笑みを浮かべて答えた。

「さすがまつさん。勘が鋭い」

「でも、お前をそう呼ぶのはシャクに触る」

「仕方ないさ。変化には痛みを伴う」

スキアーはそう言うと、笑みを浮かべて町を見下ろした。

「懐かしいな。よく小学生の時は、この山を登った」

スキアーは目を細めて言う。

「そうだな。懐かしいよ・・・ああ、川口は知らねえか」

宏太が川口に目を向けると、川口は首をすくめて見せた。

「ああ。知らねえよ。何やってたんだ？」

「全校登山ってやつだ。小学生のころは、学校行事でよく登っていた」

政貴も懐かしむように呟く。政貴と宏太にとってこの場所は、思い出の深い場所だ。

政貴もポケットへ手を突っ込んだ。寒さが身に染みるからだ。

「あの時はいつも曇ってて、下なんて見下ろせなかったな。でも今日は、綺麗に見下ろせる」

「嬉しいよな。何年ぶりだろ」

「・・・俺は嬉しくない。下界では、むごいことが起きてんだぞ」
政貴は足元の石ころを蹴った。

「クソッ。感動するはずなのに、感動できねえ」

お前もそうだと？と、政貴はスキーを見た。

「お前も、心の中では悲しんでいるはずだ。お前も元は、ただの人間なんだからな」

そして政貴は、重々しく口を開いてスキーの真の名を口にした。
スキーはただ、笑みを浮かべるだけだった。

「・・・さて、下では何が起きてるんだらうな」

その目には、黒い輝きがあった。

その光景を見て、悠太はただ立ち尽くすしかなかった。力が湧いてこない。湧くのは、悲壮感のみ。余りにも壮大で悲惨なそれは、見る者から生気を奪おうとしていた。

「・・・新海・・・」

悠太の右隣にいた直人も、さすがに驚きを隠せないようだ。口を力なく開けっ放しにしている。

「・・・これはすごいな・・・」

絶望を通り超え、直人の心には、興味しか存在しなかった。

それは、大きな穴になっていた。

元々そこには、駅があったのに。

悠太とも馴染みの深いあの駅は、面影も残さずに消えていた。

「あの光だ。多分、あの光が・・・これを・・・」

直人はメガネを押し上げながら呟く。

「ありえねえよ。全然音とかなかったじゃん」

「ありえないものなら、さっきから沢山見てきたろ」

直人は冷たく言い放った。ありえない、ありえないと一蹴すれば、
眞実は忘れ去られてしまうものだ。

大きな穴は、半径三百メートルほどの大きさだった。中心が一番
深く、そこから段々浅くなっている。ドリルが何かで空けた
のだろうか。それとも、爆弾が爆発したのだろうか。

「小田が見たら喜ぶんだろうな・・・超古代の叡智を使ったような
感じだし」

「そうだろうな。多分、見ていると思うぞ」

直人の返事には、力が無かった。

穴は異様な雰囲気をもし出していた。ヒンヤリとした空気が、
そこからは流れ出ている。

「・・・とりあえず、戻るか」

「え？もう戻んの？」

悠太はまだまだ探索したいようだ。自宅のこともある。

「恐らく、これが野中が見せたかったものだ」

「・・・はあ？何言ってるの？」

悠太は首を傾げるしかなかった。

渋る悠太の手を引っ張り、直人は再び学校へと向かった。

太陽はもう、沈みかけていた。

午後七時。ようやく四人は学校に集まった。

高亮は近くのスーパーマーケットから食料を調達した模様で、生

存者の食事は済んでいた。

四人も夕食をすぐに終え、職員室へ集合した。

「野中サンキユ、助かったよ」

職員室の教員のイスに座りながら、直人は言った。

「別に大丈夫だ」

高亮の返答は素っ気無い。

義明は直人の隣に座ると、ノートパソコンを立ち上げた。

「よくこの状況下で電気が通ってたよ・・・ああ、あとパソコンも職員室のパソコンのほとんどは、怪物達によって踏み潰されていたのが、二台ほど無事なのがあった。」

悠太は普段教頭が座るイスに座り、回転し出した。

「ワッホーイ、良いね、このイス」

「はしゃぐな、ガキ」

直人は呆れたように呟いた。隣で義明が苦笑している。

「ガキっていうなガキって！」

「それなら話に参加しなさい」

義明はそう反論したが、悠太は納得いかない様だ。小声で何やら言っている。

高亮は職員室の中心にイスを持っていくと、座った。

「さて。じゃあ、小田に報告をしてもらおうか」

珍しく高亮の声は低い。

義明はパソコンの画面を見ていたが、すぐに視線を上げた。

「・・・分かった。ありのままのことを話すぞ」

義明は重々しく口を開いた。

「まず空を飛んで気がついたことは、中心部が一番酷い状況になっていた、ってこと。まあ、新海とか濱田も見てたとは思っけど、あれは酷かった」

「ああ、確かに。言葉が出なかった」

「んで、一先ず思ったんだ。『何で警察とかこねえの?』ってね。それで、町内を外回りしてみたんだけど、これもまた凄かった」

「何が？」

悠太は未だにイスを回転させている。

「交通網がほぼパーセント遮断されてた。それも綺麗に。高速道路とかは橋が崩されてたし、鉄道も橋とかが。この町と他の地域を繋ぐ道には、土砂崩れとか、橋が崩れるとか、色んなことが起こってた」

「復旧作業とかは・・・」

「行われてた。でも、まだまだかかりそうだな。変な話だよ。まるで、仕組まれたようにしか思えない」

直人は表情を曇らせた。

「明らかに智能犯だ・・・でも、あの怪物達が智能を持っているとは、思えない」

「上がいるんだろうな。あの怪物の、リーダーとかが」

高亮はしれつと言う。

義明はパソコンの画面と向き合うと、インターネットのアイコンをクリックした。

「・・・その可能性は高いよ。だって、怪物が襲ったのは町内だけなんだから」

「町内だけ？」

悠太も驚いたようだ。義明は、ゆっくりとうなずいた。

「まるで凶られたように。交通網が遮断された内側は、綺麗に襲撃されてた。綺麗、って言うっちゃ駄目だろうけどさ」

それに、と義明は続ける。

「一向に復旧が進まない理由とかは、情報網のこともあるかな？」
そう言って、義明はパソコンを持ち上げ、画面を三人全員に見せた。

【インターネットに接続できません】

画面には無機質な字でそう表示されていた。

「多分、何回やっても駄目だろうな。電話も綱がらねえし」

「なんで電気は繋がるんだ？」

「知らないよ。でも、繋がってよかったよな」

まあそうだけど、と悠太。

直人は唸り声を上げた。

「・・・おかし過ぎるだろ。なんでこんな・・・」

「ああ、そうだ」

直人の苦言を、義明は遮った。

「言い忘れてたんだけど・・・」

「何だ？」

「町内の駅を中心に、円形に遮断されているんだ。綺麗に。だから、町内から少しはみ出していた様な場所も、襲撃に含まれた」

義明は目をつぶりながら言った。

「ここまでいくとさあ、なんか、魔力とかそういうのっぽいよね」

悠太は楽観的に言うが、やはり動揺の色が見える。

「確かにそうだな。怖いよ。俺も」

義明は腕を組みながら言った。

直人は急に立ち上がり、窓の外に視線を投げた。

「・・・それでも、遮断も時間が限られるはずだ。恐らく、もうすぐヘリとかが」

直人がそう言いかけた時、窓の向こうで轟音が鳴り響いた。

四人全員はとっさに窓側へ駆け寄った。

大きなヘリコプターの機体が、ゆっくりと下降してきていた。

「ほらな」

直人は低い声で呟いた。

真実を知らされて（前書き）

うわぁ・・・中途半端。

まあ、したかねえ

真実を知らされて

ヘリコプターの機体には、大きく地元テレビ局の文字が入っていた。

町内壊滅後、一番早く来たのが地元のテレビ局なことに、四人は驚きと憤りを隠せなかった。

ヘリコプターの轟音はやがて静まり、辺りには静寂が広がった。機体に集まる四人の目の前で、スライドドアが唐突に開けられた。「どうもこんにちは〜」

洗練された美声を響かせて現れたのは、小柄な女性アナウンサーだった。アナウンサーが降りると共に取材班が流れ出てくるのを見ると、やはり取材のようだ。救援ではない。そもそも、救援だったらこのような小さなヘリでこないだろう。

「こ、こんにちは〜」

義明が恐る恐るアナウンサーの顔を覗き込んだ。

「え〜と、あなた達が責任者？大人のひとかは・・・」

あくまでも、用があるのは大人である。子供に言わせれば、どんな誇大を言つてのけるか分からない。見栄え的にも言いのだろう。しかし、

「いるんですけど・・・そんな精神状態ではないんです」

直人は四十代半ば並の声で言った。アナウンサーも思わずにやける。

以外と一番ダメージが大きいのは、大人であった。教室には二人の教師がいるのだが、どちらも自分を律りしよう**と必死である。覇気がなく、食もいつもより細い。**

「だから・・・僕達が責任者ということ・・・」

悠太は一步前に踏み出しながら言った。

「そうですか・・・う〜ん」

アナウンサーが困ったのを見るなり、悠太は胸を張った。

「見栄え的には俺がいいんじゃないですか？歩くジョニーズ予備軍ですよ？」

「黙れこの野郎！と直人が叫び、義明が悠太の頭を叩く。まさに連携プレーである。」

「だから、こういうのは俺がいいだろう？歩く芸人だぞ？」

義明が自分の胸に手を置いた。

「そもそも芸人普通に歩くし！やめろ！視聴者がチクチクする！」

「誰が有刺鉄線や！」

今度は直人がツツコミをいれ、悠太が義明の頭を叩く。まさに連携プレーである。

女性アナウンサーは微妙な笑みを浮かべていた。

「あの〜すみません。そろそろいいですか？」

「すみません。と、三人は平謝り。」

「あの〜とりあえず、何が起きたのか教えて欲しいな〜」

とびつきの営業スマイルである。それでも眩しく見えるのは、洗練された顔立ちをしているからだろうか。

そんなアナウンサーを見て、直人はメガネの位置を修正した。

「・・・あちらを見てもらえば分かりますが、襲撃です」

アナウンサーは、直人の指差した方角を見た。

「・・・ヒッ」

案の定、声にならない悲鳴を上げ、その美しい顔立ちを自ら崩した。

怪物の死体の山。

戦闘後に悠太、直人、義明で積み上げたこの死体の山は、肉眼で見るとは余りにもグロテスクだった。

「・・・気付かなかったですか？」

高亮は静かに言った。少し軽蔑の意味も込められているのだろう。アナウンサーの声が出なくなっていた。目を見開いたまま、硬直している。

「・・・こりゃ駄目だ」

悠太はそう呟くと、カメラマンの方を見た。
「どうしますか？カメラマンさん。帰ります？それとも、撮るとき
ます？」

カメラマンも驚きを隠せないようだが、なんとか撮影は無事終了
した。撮影は代表者の新海直人が、事件の大まかな内容、現在の生
存者数とその状況等を報告するのみとなった。

嵐のように事は済み、ヘリコプターはまた轟音を上げながら、虚
空の彼方へと消えていったのだった。

しばらく四人は、空を見て固まっていた。四人はそれぞれ、思考
にふけているのだ。

「・・・さみっ」

最初に声を上げたのは、悠太だった。

「風呂に入りてえよ。このとおり緑一色だし」

義明が自分の制服を見下ろす。

直人はため息をつきながら言った。

「どうするんだ？風呂なんて、ないだろ」

「あるじゃねえか・・・スペイオが」

「いや、駄目だろ。さすがに。襲撃受けたんだぜ。どうせ風呂場も
血の海だぜ」

「大丈夫。俺の水の力でどうにか・・・」

義明は皮肉な笑みを浮かべた。

「死体を目の前にして、そんなこと言えんのかな？」

「大丈夫だ！・・・自信ないけど」

高亮は仕方なさそうに呟いた。

「処理はやつといてやる」

いつもなら、冷やかすようなフレーズだ。しかし、この期に及ん
で冷やかしのフレーズは湧いて出てこなかった。それだけ、野中高
亮あきは変貌していたのだ。

「どうせなら、入るなら女湯」

悠太の頭に、二つの拳が振り下ろされた。

「ま、どうせババアばっかしなんだろうけどな」

応戦するように、高亮が冷たく言い放つ。

「なんだよそのセリフ！」

新海直人十五歳。渾身のツツコミだった。

高亮の協力により、四人は入浴することができた。生存者達のこととも気にかかるが、やはり一番汚れてるのは戦った三人だ。恐らく生存者達は了承してくれることだろう。今考えてみれば、物凄い悪臭を放っていたのだから。

そして時刻は十二時を回った。

生存者の就寝は、掛け布団がないので、暖房を使うことになった。ジャンパーを持っている者がほとんどだが、やはりこの地域でジャンパーだけは困難だ。灯油の量が気になるところだが、生存者の体調の方が気になるところである。

そして再び、四人は職員室に集まった。

緑色に染まった悪臭を放つ制服はもう着ることができないので、仕方なく体育着に着替えている。

張り詰めた空気の中、四人は再び席に着く。

そして、

「さあ、野中。教えてくれ」

高亮は何気ない顔で直人を見る。

「何を？」

すると、悠太の表情が一変し、急に険しくなった。

そして、まるで水の如き聡明な声で、言い放つ。

「全てを」

世は、時が来たことを『導く』役目を、影に与えた。
光の産物であり、闇と類似する存在である、影に。

「もうこれ以上、引つ張る必要もない」

高亮は手のひらを組みながら言った。その声は、いつもの声とは違う。

まるで、何かに憑依されたようだった。

「俺がここにいるのは、お前らを導くためだ。時が来た時に」

義明は首を傾げた。

「時？何の時？」

「そう焦るな。そうだな・・・じゃあ、とりあえずこの世の誕生から、話を始めようか・・・」

高亮はまるで、暖炉の前で話す長老のように重々しく口を開いた。

「・・・世界は、無の状態から爆発的に誕生した。いわゆるビッグ・バンってやつだ。このビッグ・バンのおかげで、今の俺達はある。

そしてこの世が誕生する瞬間、この世にある法則がくっついた」

「なんだそれ？」

悠太は首を傾げた。学校で聞いたことが一度もないようなことだ。ビッグ・バンなら知っているが、法則など分かるはずもない。こういう系の話は義明が得意なのだが、義明も知らないようだ。好奇心で目をキラキラさせている。

高亮は悠太を直視した。

「『全ては無に還る』という法則だ。この世にあるものは、全て無へと還っていく。もちろん、俺らも」

「『死』ということか？」

高亮は小さく頷く。

「そうだ。人間は死を迎えると同時に、無へと還る。その抜け殻は

大地へと還り、そして無へと変化していく……」

「確かに、始まりがあるものには終わりがあるとよく言うしな……」

「そういうことだ。そして、その法則は、この世にも適応されている」

悠太、直人、義明の顔が強張った。

高亮はそんな三人を見渡すと、小さく皮肉な笑みを浮かべた。

「……どうということだよ」

悠太はついに言葉を漏らした。大体予想は着くのだが、聞かなければ気が済まない。

「率直に言わせてもらおうと、世界は終わる。再び、無へと還るのだ。宇宙誕生前の、何もない世界に……」

瞬時に空気が凍りついた。

世界は終わる。

その言葉が、頭の中に響く。この町に起きた異変は、その前兆と言っのたろうか。

「……なあ、じゃあ、あいつらの襲撃は」

「あれが、世界を終末へと導くために生み出された『怪物』だ」

「なんでそんなのがこの町を……」

悠太は立ち上がった。動揺しているのか、体が震えている。

「……この町だからだ。この世が誕生したその瞬間から、この地は破壊の象徴となるように決められたんだ」

破壊の象徴。確かに、突然町内が壊滅したというこの大事件は、破壊の象徴と言われても仕方がないのかもしれない。

高亮はさらに続けた。

「この町を皮切りに、世界は崩壊へと向かうだろう。あの光は、それを告げる光だったんだ」

つい数時間前に見た、あの奇異な光。思えばあの光から、悠太の環境は激変している。

「……で、それと俺達の能力は、何の関係があるんだよ」

直人が聞くと、高亮は「おっと、」と呟いた。

「・・・言い忘れていたな。そのことについては、時代を遡らなければならぬ」

高亮は淡々と説明し出した。

高亮の説明を要約すると、こうだ。

この世は、『四大元素』と呼ばれるものが作っただけ。それから、四大元素は派生して子供達を産み出し始め、みるみるうちに宇宙、そして地球が作り上げられていった。

子供達は『元素』と呼ばれた。元素はそれぞれに役割と力を与えられ、創生に関与した。例えば義明の『空気』の能力は、元素が空気を作り出す担当だったためだ。

しかし最初、元素たちはこの世を飛び回るただの光に過ぎなかった。

「元素たちは、四大元素に作られた『プログラム』のようなものでしかなかった。ただ、一通りのパターンしか繰り返さない無機質なものだ」

高亮は自分の手の平を見つめ、さらに続けた。

「しかしそんな時、ある異常事態がこの地球上に起こった。それは、この『世』が創世される瞬間にも、考えられていなかった事態だ」

「・・・なんだ？」

直人は小さく言った。

「・・・人間だよ。この地上に現れた不可思議でイレギュラーな生命体は、誕生と共に世界中を蹂躪していった。」

元素達は、その人間達に興味を持った。プログラムでしかない元素たちに、初めて『感情』と呼ばれるものが発生した瞬間だ。元素達は、人間に憧れたんだ。決められた命令の複合体でしかない自分達とは対照的に、人間達は無限の臨機応変な能力を持っていたからな。

そして無垢な元素達は、人間との共生を望んだ 四大元素でさえも」

高亮は顔を上げた。

「しかし、元素達は人間と共生することは出来なかった。人間には、元素たちを可視出来なかったんだ。だから」

高亮は言葉を切り、息を吸った。

「元素は、人間になることを考え、そして」

「俺達になったのか？」

悠太の声が寂しく響く。初めて話を聞かされた三人は、戸惑うしかなかった。

「まさか・・・そんなはずは・・・」

「本当の話だ。嘘だったら今言わん。本当はお前らは、何十億歳という年齢だ。とはいっても、体はまだ十五歳だかな」

「ちよつと待て」

直人は手を振って流れを制した。

「・・・どうやって生まれたんだよ？俺達は、人間じゃないってことか？」

高亮はイタズラな笑みを浮かべ、腕を組んだ。

「人間であつて、人間ではない。元素達は受精の瞬間に、その体に憑依して乗っ取ったんだ。俺達能力者は、生まれながら殺人罪を侵しているんだよ。本当なら、ここに存在するのは別の人間だ」

「そんな記憶は・・・」

「記憶がないのは当たり前だ。プログラムでしかなかった元素たちに、記憶など存在しない。今のお前達の人格は、周りの環境と、親の遺伝から生み出された人格だ」

何もかもが信じられなかった。全てを失った日に、信じられない現実を見せられ、信じられない真実を教えられた。そしてその真実は、自分達の存在さえも否定する。

「なんで今まで能力が・・・」

「あの光の柱の出現は、終末の知らせでもあり、元素達を再び目覚

めさせるための光だったんだ。いわば、スイッチのようなものだろうな。『この世界』は、法則の発動に伴い、元素　つまり俺達を、真実の姿へと戻した。そしてその『真実』の発動媒体が、この『人間の体』だったんだ」

「意味わかんねえよ！なんだよ、『この世界』って！」

「俺にもそれは分からない。四大元素を産み出した、ある絶対的な存在と、俺は教えられた。この世界の人間達は、それを『神』と呼んでいる」

「神って・・・」

直人は情報を頭で整理しているようだ。なんとか、頭を抱えずに住んでいる。

それと違って、悠太と義明は頭を抱えていた。

「・・・ぜんっぜん分かんない・・・」

「何言ってるんだかサツパリ・・・」

直人はため息をついた。

「まあ、仕方ないか。この数分間で、凄い情報量だもんな。いいよ、あとで細かく教えてやる」

「お前の頭が良くて助かったよ」

高亮は苦いような顔を見せ、更に続けた。

「話を戻そう。この世は世界を壊滅させるために、怪物を作り出した。他でもない、『イレギュラー』を抹殺させるために」

「・・・天変地異とかで抹殺させればいいんじゃないのか？」

高亮は首を振った。

「そんな力はない。だから、新たな存在を産み出して、こちらへ送り込んだんだ。しかも、もう『この世』は意識を持たない。ただ、法則に沿って動くのみだ」

悠太は不満の声を上げた。

「色々と疑問が残るんだが・・・」

「こまけえこたあいいんだよ！」

義明は悠太の肩を叩きながら笑った。

「……スマンな。もうこれ以上質問されても、俺が教えられたのはこれぐらいだ」

「……教えられたって、誰に？」

高亮は窓の外に視線を移した。

「……今頃、覚醒したころだろうな。俺の能力の母親的存在の人だよ。東京にいる」

そして、目を細めた。

悠太は困惑していた。いきなり自分が突きつけた真実に、戸惑っているのだ。

自分が自分ではない気がした。自分は『水』であり、『水』が自分となっている。

しかし、悠太はまだ知らない。

自分が、『元素』の中の、最大の存在であることに。

月夜に白雪が光り 空気は実状を知る（前書き）

川口と宏太の回だねこれは。うん。

光の速さで更新だぜい！

月夜に白雪が光り 空気は実状を知る

一通りの説明が終了し、四人は次の日の計画を立てている所だった。

「朝食はどこにある？」

「外に出してある。天然の冷蔵庫代わりになるか分からないが……」

「充分だ。……さて、どうしたい？」

テキパキとリーダーシップをとっているのは、直人だ。相変わらずのリーダーぶりに、三人は素直に従う。

「とりあえず、外の情報が欲しいな」

悠太は素直に言った。それもそのはずだ。これだけのことが小規模であるが小さい町に起きているのだ。何も無いはずがない。

直人は腕を組んで唸った。

「……どうしようか。ここからじゃテレビは見れないし」

「そのメガネで見れないの？なんかカチカチッって」

「そんなすげえのだったら今頃商品化だわ！」

疲れているとはいえ、キレのあるツツコミである。

真実を知らされた元一般人は、今まで以上に明るく振舞っていた。

「なあ、町の外に出ればテレビ見れんじやない？」

義明は拳手をしながら言う。

「……確かにそうかもしれないな。じゃあ明日の朝、携帯電話を貸すから、テレビを見て来てくれ」

「あいよ。……で、誰の携帯？」

「もちろん……」

直人は悠太を見た。義明もつられて、悠太を見る。

「え？……俺？おれえ？持ってねえよ」

「先生の携帯盗んで、ワンセグ試してたの知ってんだぞ」

直人はピンポイントで突いた。さすがである。

「じゃあ、そのポケットの中身を見せてくれよ」
義明は悠太に近づいた。

「キヤア！エッチ！変態！」

悠太は抵抗するが、直人と義明に押さえつけられてしまった。

「・・・じゃあ小田、頼むぞ」

悠太から強奪した先生の携帯を義明は受け取った。オレンジ色のおもちやのような携帯である。

「分かった。・・・じゃあ、寝ますかね」

そのまま四人は教室へ戻り、眠りに就いた。
長い長い一日が、やっと終わったのだった。

山頂。三人は炎の前で火にあたっていた。十二月の山頂にはもう雪が薄く積もっている。

「いやあ・・・暖かい。まつさんありがとう」

宏太はかじかむ手を炎にあてながら呟いた。

「まあ、今のところ俺の能力はこれぐらいしか・・・」

政貴はパンにかじりついていていた。スキーが残っていた、イチゴジャムパンである。体格の良い男がイチゴジャムパンなど、なんともアンバランスである。

「・・・まつさんは火の能力か」

「んで、俺の能力は『剛』。確か、元素って創世に関わったんだろ？剛ってなんだろうな。剛って」

「こまけえこたあいんだよ！」

政貴は手を振った。某掲示板の台詞である。

「でもさあ・・・」

「いいじゃん。細かいことは。んなカッコいい日本刀あるんだし」

「そうだよなあ！いいでしょコレ！」

翔馬のテンションがいきなり急上昇した。

翔馬は『白雪』と名付けた日本刀を抜き、ブンブン振り回した。

「確かにいいけど・・・危ないよそれ！早くしまいなさい！」

「うるせえ！斬られる！」

「なんか別人格だし！やめい！」

宏太は翔馬の手首を掴み、動きを止めようともがいた。

「うづむ、中々やるなコイツ」

「いいからしまえつて！うわ、あつぶね！」

宏太が言った刹那、二人の頭上を大きな炎の塊が通過した。

「うるせえ！黙れお前ら！」

宏太と翔馬は動きを止め、政貴の方を恐る恐る見た。

案の定、政貴の手の平には炎が宿っていた。今にも爆発しそうだ。

「・・・静かにしろ。こっちは色々と考えてる」

「だって川口が・・・」

「うるせえ」

政貴の声と共に放たれた炎は、宏太の腹に直撃した。ゴロゴロと地面を転がる宏太。

「ハッハー！宏太ダセエ！」

「うるさい！・・・クソツ、髪の毛が燃えてチリチリになっちまった」

「いや元々だし！」

翔馬がツツコミを入れたところで、政貴が翔馬の肩を掴んだ。

「・・・そんなに元気が有り余っているなら、どっかで力試ししてこい」

翔馬は顔をパツと輝かせる。

「・・・へ？いいんすかまつさん？」

「宏太の『地』、川口の『剛』。試してみたらどうだ？近々、戦うかもしれないからな」

「何と？」

「知らんけど、何かと」

政貴はそう言って、再びイチゴジャムパンにかじり付いた。

翔馬はその瞬間、政貴が何かを企んでいる、もしくは何かを考えていることを悟った。しかし、突っ込むところでもなさそうだ。

全てはまつさんが握ってもいいはずだ。何せ、まつさんは、俺達のリーダーなのだから。

「まあいいや。じゃあ、派手にやってくるぜ！」

「あんまし無理すんなよ。次の日に響く」

「ok！」

翔馬はそう言いながら、うづくまる宏太に駆け寄った。

宏太は痛そうに腹をさすっている。制服が焦げているのを見ると、ちよつとキツイお仕置きだったことが分かる。

「宏太、ちよつと俺とやらねえ？」

「・・・何を？」

「能力で、戦おうぜ。やつと俺は理想通りになったからな」

翔馬は誇らしげに、二本の二本刀・・・もとい、日本刀を取り出した。

「この老体にはキツイ・・・」

「何言ってるんだ！戦うぞ！ほら！」

翔馬は宏太の手を引っ張り、無理やり宏太を立たせた。

「・・・分かったよ、やろうか。さっきまで俺も、腕試ししたいと思ってたところだ」

「よし、じゃあ、やるか。ここを下った、あそこで」

「いいぜ」

宏太は腕まくりした。自然と力が湧いてくるのは、大地の能力を持つからであろうか。

二人は対峙した。間隔は三メートルほど。夜であるが、月明かりのために互いの顔は綺麗に見える。

「満月の夜が・・・俺のホームグラウンドだ」

「あれ？川口、そんなことスキーに説明されたっけ？」

「うるせえ！補正だ補正！その方がカッコいいだろっ？」

はいはい、と宏太は呟きながら、指の骨を鳴らした。宏太の体質は変わっていて、無限に指を鳴らすことが出来る。音は痛々しいの

だが、本人は全く痛そうにしない。

宏太は片手を差し出し、指先を曲げた。

「来い」

「うつしや、やるか」

翔馬は二本の日本刀を引き抜いた。

「日本刀の紹介をしよう。こつちの黒いのが『黒点白牙』。こつちの白いのが『白雪』。以後、覚えておくように！」

「長くて覚えられんわ！」

「ああ、君はバカだからな」

「うるせえ！サツさとその大黒天だかを構えろ！」

「大黒天じゃねえ！黒点白牙だ！」

「なんでもいいよ！」

そうは言いながらも、翔馬は二本の刀を構えた。月夜に照らされ、刃が艶しく光る。

宏太は両手を突き出すと、そのままファイティングポーズをとった。

「・・・来いよ」

宏太の挑発のポーズ。中々さまになっていない。

翔馬は二本刀を振り上げた。

「うらあ！」

『剛』の能力が発動され、翔馬は瞬く間に三メートルほどジャンプした。

剛の能力は、体の中のエネルギーを体外に数倍もの力で放出できる。直人や義明などの、空間発生系ではないものの、強力な能力だ。「させるか！」

宏太は片手を振り上げ、足元の地面から、『地』の能力を使って地柱（土で出来た柱のような物体）を発生させた。

これまた三メートルほどの地柱だ。地柱は川口を目指して突進していく。

地の能力は、地面を操って自由自在にコントロールすることがで

きる。直人や義明と同じ、空間発生系だ。

翔馬は空中で体を反転させ、地柱を避けた。その瞬間、翔馬の顔の横を、地柱が横切る。

「クソツ！身軽だアイツ！」

宏太はそう叫びながら、再び地面から地柱を発生させた。今度は三本同時発生である。

さすがに三本の地柱を止めることは、今の翔馬には不可能だった。「うえ！めんどくせ！」

翔馬はそう叫びながら、三本の地柱を二本の刀で受け止めた。鈍い衝突音が鳴り響き、翔馬は更に上へと叩き上げられた。やはり地柱三本では、さすがの翔馬も防ぎきれない。

成す術なく落下していく翔馬に、宏太は再び三本の地柱を襲撃させた。

「とどめだあ！」

宏太の雄叫びと、翔馬の悲鳴が重なった瞬間だった。

翔馬の右足が、地面に触れた。

「・・・だと思っなよ？」

翔馬は静かに笑みを浮かべた。

迫る地柱を目で捉えながら、翔馬は地面に触れた右足から能力を発生させた。

翔馬の右足から、波動が現れる。周りの砂は巻き上げられ、そして、

「甘いな、宏太！」

再びジャンプした翔馬は、地柱を軽々と避けた。

そして翔馬の体は、真っ直ぐ宏太へと向かっていった。

「死ね！宏太！」

「ぬわぁに？」

宏太は声を上げ、体勢を崩しながらも、右手を振り上げた。一瞬だった。

宏太の地柱と、翔馬の二本刀がぶつかり合ったのは、宏太と翔馬

の距離、わずか三十センチほど。一步遅ければ、宏太の負けであった。

「クソッ！なんかうやむやで終わっちまったよ！」

「いいよ、キリがよかつたし」

「俺はよくねえし！」

翔馬は『白雪』と『黒点白牙』を鞘さやに戻し、ため息をついた。

「・・・それにしても、いいよなあ。俺、こんな能力が使えるなんて嬉しいよ」

「だよな」

翔馬は座り込んだ。せつかくの制服も、汚れてしまった。茶色に「・・・だから、俺は彼女を助けに行く」

翔馬は宏太を見た。その瞳には、炎が宿っている。

「頑張れ。多分、能力なんか使わなくてもいいと思うけど」

「いや、恐らく使うはずだあ！」

「うるせえよお前！」

『地』の笑い声、『剛』の呆れ声が、山中に響いた。

早朝、悠太が起きると、隣に寝ていたはずの義明がいなかった。

「・・・ああ、アイツ・・・テレビを・・・」

空を飛べるのは、羨ましいものである。無いものねだりのように感じるが、やはり羨ましい。

悠太は視線を直人に移した。

直人の目の下が、真っ赤に腫れている。泣き腫らしたようだった。

「・・・新海」

夜、泣いたのだろう。ずっと、絶望を胸にしまい続けていたのだ。

表向きは頼れるリーダーでも、やはりただの純粋な十五歳である。
メガネでも。

「そんなに人の顔が面白いか？」

背後から声がして、悠太は振り返った。

のなかつかあき

野中高亮である。昨日のあの光の時から、やはり高亮は何かが違う。

「ここまで存在感がない人間なはずがないのだ。やはり、『影』としての役割を果たそうとしているのか。」

「別に。そんなんじゃないよ。」

「お前はお気楽だな。まあ、それが水っぱいんだろっがな。」

「なんだよ、その水っぱい性格って。」

「サツとしてんだよ。切り替えが早くて、心を水平に保とうとする。水って、どんな入れ物に入れても水平になるだろっ？」

「説教っばいな。」

「説教だもん。」

悠太は思わず笑ってしまった。

やはり、高亮は昔の野中高亮のなかつかあきの部分を持っているのだろう。

生存者全員への食料を配り終えたところで、義明が帰ってきた。

「お〜い、開けてくれよお。」

義明が窓ガラスをバンバン叩いた。

「何でベランダからなんだよ。」

悠太はダルそうに窓際に歩み寄った。

「近いじゃん！」

「目立ちたいからだろ？」

直人が再びウィークポイントを突くと、義明はうめいた。

「はい、そうです。すみません。」

「よろしい。」

窓は開けられた。

再び四人は職員室へ召集された。

教室で話してもいいが、精神が不安定な生存者達は、いつヒステリーを起こすか分からない。よって、四人は職員室で話し合うことになった。これは、高亮の案である。

「はい、携帯」

義明は悠太に携帯を渡すと、回転イスに座った。

「で？どうだった？」

義明は指先でokサインを見せた。

「もう完璧。最高の解像度だったね。町からちよつと離れたただけで普通に映ったもん」

「そうか・・・なんで・・・」

直人が再び考え出したが、悠太はそれを遮った。

「もういいよ。それより、報告してくれねえか？」

もちろん、と義明は言うのと、腕を組んだ。

「信じられないかもしれないけど、今日の夜十時に、自衛隊が救出に向かってくる」

「マジで？なんで自衛隊？」

悠太が身を乗り出したが、義明はその悠太の頭を抑えた。

「焦るな、今話すから。色々と政治のアレとかがゴチャゴチャしてんだけだよ・・・」

「大丈夫だ。俺と新海は理解する」

高亮は足を組んでいる。完全に聴講体制だ。

「ええ？俺は？」

某人気家庭アニメの夫役の真似をした悠太を、直人は「黙れ」で黙らせた。

義明はフツツと小さく笑うと、口を開いた。

「町の壊滅はもう、その日のうちに警察に知れ渡ってた。で、警察は色々調べたかったらしいんだけど、凶悪で大規模な事件の可能性があるって、本庁に電話したんだとさ。そしたら、本庁は慌てちゃってさ。『これは国家間に渡る問題の可能性がある』って勝手に決めて、自衛隊に全てを委託しちゃったわけ」

義明が半笑いなのは、警察の対応にだろう。

「へえ、じゃあ警察が来なかったのも……」

「そういう理由。まあ、よく壊滅状態って分かったよな」

「おい、続ける」

高亮は未だに聴講体勢だ。しかも、かなり上から目線の。

「んでそこに、昨日のテレビ局のニュースだよ。国も世間も大慌て。まあ、当たり前だよな。未確認生物の襲撃に、すぐに壊滅した町に、中学生の責任者だぜ？」

「テレビで『カッコよすぎる美男中学生被害者』とかで紹介された？」

「ああ、それはない」

悠太の言葉を義明は一蹴し、更に続けた。

「そしたら防衛省がそのニュース映像を見て、『国際的テロの可能性がある』とか言っちゃってさ。もう大慌て。速報流れっぱなし。

ニュースのコメンテーターも『隣国の襲撃かも』とかいい加減な発言しちゃうし。もう駄目だね、アレ」

直人は声を静めて言った。

「……それじゃあ、救出という名の連行だな」

「ああ、そういうことになる」

その通り。まさに連行である。テロに加担したかもしれない生存者達を、簡単に救出し、解放するのは無謀というものである。

「ええ？そんなことしたら、人権が……」

「濱田いちいちうるさいよ。人権なんてねえよ、『近隣住民の人権を守るため』とか何だとかくつつちゃえば、それで収まっちゃうんだから」

義明は呆れたように言い放った。

「そう、それが日本語のいけないトコであり、便利のところだよな」

「そうそう。小説書いてて思うもん。『日本語めんどくせえ』って」

「お前がそれ言うたらアカンやる！」

「スマン！ぶっちゃけてもうた！」

とつさに悠太は直人と義明の間に割って入った。

「なんでアンタら関西の言葉つこうてるねん！」

「いやお前も！」

二人の言葉が綺麗にハーモニーした。これほど綺麗なツッコミもないだろう。

その間にも、この襲撃は『小淵沢襲撃事件』と名付けられ、全国を沸かせていた。

某掲示板は祭り状態。世論は『早く助けろ』の一点張り。政府は『テロの可能性が・・・』と繰り返し言い、日本中が混乱の渦に巻き込まれていた。

水と火の出会い（前書き）

ふう・・・プシー・デイズも読んでね

水と火の出会い

新海政貴は山頂から、下を見下ろしていた。しかし、今日は曇りだ。下界は見えず、雲海がだけが政貴の眼下に映る。

政貴は白い息を吐いた。徒勞で白くなったのではない、気温のためである。

「スキアー・・・その話、本当なんだな」

政貴はそう言い、背後を振り返った。

背後には、スキアーと宏太、そして川口が立っている。

「本当だ・・・ククク、運命とは皮肉なものだ」

「・・・俺はこれからどうしたらいい？」

スキアーは片頬で笑った。

「俺の責務は果たした。あとの行動は、お前達で決めろ」

「・・・そうか」

政貴は拳を握り締め、雲海を見つめた。

なんとも綺麗な雲海だ。まるで、ここが黄泉の国だと錯覚させような、現実世界とを寸断する雲達。

「俺は・・・法則に従っていきたい」

「この世界が無に還るのか？ まっさん、正気かよ！」

宏太は一步踏み出して叫んだ。

政貴は、そんな宏太を冷やかな目で見た。

「どう足掻いても、俺達は法則に勝つことは出来ない。それに、

人間はどうせ死ぬものだろうか？ 俺達元素はどうなるかは知らんが、死は平等に訪れる。 そうだとしたら」

政貴はスキアーに視線を移した。

スキアーはずっと無表情だ。一昨日の表情豊かな顔は、どこへ言ったのだろうか。

「・・・俺は、世界の滅亡を受け入れる。元々、俺とアイツを含めた四つが、この世界を創世したんだろ？・・・その創世の時に、

このルールが決められたのだとしたら、俺は、自分で作ったであろうそのルールを、順守じゆんしゆしたい」

スキアーは笑っているだけだった。

「とりあえず、道理は通っているな・・・しかしお前は今や、創世時の『火』ではないんだぞ。『火』の能力を持っているだけの、別の個体だ」

政貴はスキアーを睨んだ。その眼力に、宏太は一步退く。

「そうかもな。でも、俺の中の何かが、俺に呼びかけているような気がする。俺であつて、俺ではない感じ・・・」

政貴は、笑っていた。諦めの嘲笑なのか、自信からの笑いなのかは、きつと誰にも分からない。

「だから、俺は、この世界と運命を共にする」

「ご苦労さん」

スキアーも、笑っていた。しかし、目が笑ってないのは一目瞭然だ。

「・・・俺が、創世時の『火』ではないことは認めよう。それでもいい。だから・・・」

政貴は自分の胸に手を置き、スキアー、宏太、翔馬の三人を見た。その目には、確かに炎が宿っていた。

「俺は、『火の継承者』になる」

この日から、新海政貴は『火の継承者』と名乗り、名乗られるようになった。

宏太は政貴の肩に手を置いた。

「・・・まつさん。俺・・・まつさんに着いて行くよ。確かにまつさんの言ったことは正論だ」

「俺もまつさんに着いて行く。まつさん、お前の意思を・・・俺と共有してくれ」

翔馬も政貴の肩に手を置いた。さすが『火』の力を持つ者だ。肩からも熱気が伝わる。

政貴は振り返り、宏太と翔馬を順番に見た。

政貴の瞳の中の炎は、今後絶えないものとなる。

「・・・お前ら、ありがとよ」

そんな三人を見て、スキアーは小さく笑みを浮かべた。

この時のスキアーが何を思ったか、それは謎である。

「・・・で、どうするんだ？これから」

政貴は真つ赤な目でスキアーを見た。

「・・・俺は、世界の終わりを見たい。・・・そのためには、邪魔者も排除する。これから各地で元素達の覚醒が始まるんだろ？」

「・・・どうなるかは俺にもまだよく分からない。しかし、お前やアイツが覚醒を果たした時点で、そうなることは必至であり、必然でもある」

「そうか・・・」

政貴は手の平に炎を点火させ、その炎を揺らした。

政貴の『火』の能力。空間に火を発生させ、思うがままに操ることができる。ただの炎ではない。神聖なる炎だ。

「とりあえず、アイツに会おう。そして、運命を共にする。起源として」

スキアーは笑った。

「好きにしる。あとは、お前次第だ」

時刻は夜九時を回った。崩壊後の町はまさに闇と呼ぶにふさわしく、ただならぬ冷気と恐怖を作り出していた。

そんな町に、十台の装甲車と貨物車が入った。戦車やミサイルな

どは一切配備されてないが、陸上自衛隊正式採用である89式小銃だけは配備されている。これが防衛省の出来る限りで出発させた軍力である。戦車やミサイルまで配備させたら、世論に不安を与えかねない。

十台の装甲車は、北富士駐屯地ちゅうとんちからだ。この町と一番近いのが主な理由である。

装甲車は、荒れ果てた町を難なく乗り越え、ひたすら生存者の居る中学校校舎へと向かう。

そんな装甲車団を、義明は肉眼で空中より確認した。

「うわあ〜ものものしい〜」

義明は空中で身を翻すと、眼下を走る装甲車団を見ながら、最高速度で飛んだ。

目的地はもちろん、中学校校舎である。

「おい！来たぞ！」

義明は教室に入るなり叫んだ。作業中だった直人も、思わず手を止める。

「おいマジか」

寝転がっていた悠太は状態を瞬時に起こし、義明を凝視した。

「ああ。あともう少して駅とか通過すんじゃないか？」

「そうか。それなら、生存者全員を校庭に出すか。時間短縮のためにも」

「そうだな」

直人の言うとおり、時間短縮が必要な者は四分の一を占めていた。やはり体調の不良だ。未知の事件に遭い、未知の怪物に出会い、暖房があるといえど環境の悪い極寒の地で一日を過ごせば、体調不良者が出るのも仕方が無い。

「はい、みんな、動いて動いて〜」

悠太がいち早く生存者達に呼びかける。

生存者達はダルそうにしていたのだが、自衛隊の救出と聞いただ

けで、反応が早くなった。アドレナリンでも出たのだろう。

生存者達は、心なしに嬉しそうな表情である。いくら悲惨な事件に遭ったといえ、やはり命が助けられるのは誰でも嬉しい。

しかし、生存者達は知らないのだろうか。それが、救出という名の連行であることに。

「テロの可能性が浮上すれば、犯罪組織が生存者に含まれていても、おかしくない・・・防衛省はそう考えるだろうな。まあ、当然だが」
直人の説である。

「しかも、今回は未知の生物というオマケ付きだ。恐らく生存者から怪物の動きとか聞いて、詳しく調べるんじゃないかな？」

義明がその説に付け加えた。

どちらにしろ、生存者達は二週間ほど、自由を与えられずにいることは考えられる。どんなにその生存者達が、利用できない、と判断されても。

そして、そんな中出てきた意見は、『覚醒した俺達はどうする？』である。

四人は間違いなく、正気を保っているのだ。そして、未知の能力を手に行っている。そんな四人はこれから、どうするべきだろう。逃亡か？それとも、能力を打ち明け、証明するべきか。

意見は一向にまとまらなかった。当たり前だ。一個人でさえも、その意見をどうするか判断に迷いがあるからだ。

やがて、生存者全員が校庭に集められた。

来た。

悠太がそう呟いた時、一筋の光が真っ暗な闇の中に現れた。

まるで、昨日のあの巨大な光の筋のようだ。しかし、それはあまりにも小さく、あまりにも無機質だった。

装甲車のライトである。

「おーい、こっちこっち！」

悠太がパタパタと手を振った。自衛隊の人間に対してこれなら、

アメリカのCIAにもこんな感じでいきそうだ。

装甲車から、自衛隊が降りてきた。そして、装甲車の後ろの貨物車の扉が開かれる。

ライトに照らされながら、自衛隊の隊員が向かってきた。優しそうな人相をした男性だ。

「え〜と、この中に重傷者は？」

「五人います。片腕を失ったり、足を失ったり」

隊員は平然としていた。想定内ということだ。

「分かりました。では、その五人はこちらへ運びます。え〜と、そうしましたら残りの方々は貨物車へお願いします」

自衛隊は三台の貨物者を指した。

生存者達は列を作って、貨物車に乗り込んでいった。

四人はそれを、黙って見ていた。心を埋めるのは安堵のみ。ではなかったが。

不意に、自衛隊隊員が四人に話し掛けた。

「どうしたの？乗らないの？」

「いえ、あの人たちが乗り込んだら、僕たちも乗りますんで、直人が即答した。

隊員は小さく笑みを浮かべた。

「あ〜君達、ニュースに出てた代表の人か〜」

どうやらこの隊員、ニュースを見ていたようだ。

「ああ、そんなとこです」

「よく頑張ってくれたね。色々あったはずなのに」

子供だと軽んじて見ず、同等な目線で話してくれる隊員を四人は驚きの表情で見ている。

やがて、生存者達が全員貨物車に乗り終えた。

「じゃあ、君達の乗りな」

そう言って、自衛隊隊員が手を振った。

その時だった。

闇と化していた空に突如、真つ赤な球体が出現した。一瞬太陽だと勘違いするが、その大きさと色の違いによって、太陽ではないと気付く。

悠太は目をこらした。

真つ赤な球体は 炎の球体だった。

炎は燦々（さんさん）と、校庭を照らした。思わず全員が顔をしかめ、その眩い光まはゆに目をつむる。ただ一人、濱田悠太を除いて。

悠太は炎の球体を睨むと、叫んだ。

「逃げろお！」

今までに聞いたことのない叫びだ。切実に、逃げろと叫んでいる。悠太は全神経を手の平に集中させた。集められるだけの水の力を、手の平に集める。

「濱田あ！」

義明の声だ。ようやくその眩しさに慣れたらしい。

悠太は手の平を天空に向けると、再び叫んだ。

「逃げろお！」

「なんでだよ、はま」

義明の反論が聞こえた、

その瞬間だった。

大きな炎の球体は、悠太を目指して落下した 襲った、とも言っべきか。

悠太は雄叫びを上げ、自らの手の平から特大の水の球体を作り出した。

真つ青で、澄んだ色をした球体だ。

そしてその直後に、真つ赤な球体と、澄んだ青の球体が強く衝突した。すさまじい衝撃波だ。その衝撃波は、半径百メートルのもの全てを襲う。それはまるで、ビッグ・バンを思わせた。

「うわあああああああ！」

衝撃の波の中で、悠太の雄叫びだけが響いた。

これが二つの物語の、一回目の交錯である。

融合する物語（前書き）

じいじい > >

融合する物語

二つの衝突する球体は悲鳴のような甲高い音を立てた。落下する真つ赤な球体に抵抗する、濱田悠太の青の球体は、徐々に押されていた。

「は……はまだあ！」

義明は叫ぶと、悠太の元へ駆け寄ろうと一歩踏み出した。しかしその肩を、直人がガツシリと掴む。

「なんだよ！」

「もう間に合わない！恐らく濱田は大丈夫だから、生存者や自衛隊を守れ！」

「どうやって！」と義明が怒声混じりで聞く前に、直人はサツさとして行動を始めていた。

直人は電撃でバリアを作ったのだ。生存者のトラックや、自衛隊の装甲車、そして足元に転がっている自衛隊隊員を、直人の電撃のバリアが覆った。

「二重にするぞ！早く！」

直人の指示通り、義明は空気のバリアを張った。電撃の上に空気の力が覆われ、幻想的な色合いを発する。

「……濱田あ！」

義明は瞬時に悠太へ視線を向けた。冬なのにも関わらず、義明の髪の毛から汗の玉が弾け飛ぶ。頭上に小太陽があるせいで、温度が急上昇しているのだ。

悠太は歯を喰いしばって球体を抑えていた。恐らくすさまじい圧力なのだろう、姿勢を前かがみにして、まるで重いものを持つかのように抑えている。

義明は悠太に向かって一歩踏み出した。

するとその瞬間、悠太の顔がこちらに向けられた。必死そうな表情で、義明の目をジッと睨む。

「・・・もう駄目だ！逃げ」

その瞬間だった。

二つの衝突する球体が、うなりを上げて大爆発した。赤と青の色が一拳に混ざり合い、不潔感の漂う紫色が発生する。

紫色の衝撃波は学校の敷地内全域を襲った。余りの衝撃波に、直人と義明の二重のバリアも吹き飛ばされ、校舎の窓ガラスはほとんど割られた。直人や義明自身も吹き飛ばされる。

そして爆発の中心地で衝撃波を浴びた悠太は、校庭の地面にめり込んでいた。土に埋もれて。

そしてはるか上空では、満足げな笑みを浮かべる存在があった。

砂ぼこりが舞い上がる中、直人と義明は互いを支えあって立ち上がった。体中に激痛がはしる。二人の体の所々が、擦り切れていた。

「お・・・おい、ハマ！」

直人を支えていたのも忘れて、義明は悠太に駆け寄る。衝撃波が直撃した悠太の体は、義明どころの傷ではすまされなかった。

悠太の腕は真っ赤に染まっていた。そう、血である。球体を支えていた腕は傷だらけで、ヤケドのような跡もあった。

「・・・手当てだ！新海！」

「分かってる！え〜と、野中！」

直人は高亮の名を呼んだが、返事が返ってくることはなかった。

「アイツ・・・なんで居なくなっただよ」

「そんな奴ってこった。・・・いい。救急セットは、俺が取ってくる」

直人はそう言い、立ち上がった。立ち上がった途端、硝煙しょうえんの臭いが鼻を突く。

「・・・大丈夫か、濱田」

聞きなれた声が、頭上からした。悠太の周りの二人は、瞬時に頭上を見上げた。

二人の目線の先には 見慣れた存在であり、頼れる男の姿があった。その姿は、かつての柔らかい風貌ではなく、確固たる信念を持った男の、固くて強い風貌であった。

「ま・・・まつさん！」

新海政貴が、頭上に浮かんでいた。足から、炎を噴出させながら。「よお、小田。そして新海」

政貴は地面に降り立った。足からあれほどの炎を噴出しているのにも関わらず、何故接近に気付かなかつたのだらうか。考えられるのは、校舎からジャンプした、ということだ。

「ま・・・まつさん、なんでこんなところに」

政貴はいつもの笑みを浮かべた。しかし、そのいつもの笑みが、今になっては恐怖に感じる。

「・・・へえ、お前らが能力者だったのか」

「・・・どういうことだ？」

「いやあ、意外ってこつたよ。まさかお前らがな」

政貴は温和な笑い声を上げ、歩み寄ってきた。

直人と義明は思わず身構えた。謎の恐怖が、政貴の体の周りを渦巻いていた。

「ハハハ・・・そんなに怖がるなよ」

直人は満身創痍の悠太の前に立ちはだかった。その手は、震えている。

「何なんだ・・・まつさん、アンタは本当に・・・新海政貴なのか？」

「何言ってるんだ・・・真正正銘の本人だ」

義明も立ち上がり、政貴を睨んだ。

「あの襲撃の中で、何で生き残った？校舎の中にも……いなかっただのに」

「色々あってな、とにかく俺は生き残った。……ああ、俺達、と
いうべきだろうな」

義明の表情が険しくなった。直人も同時に。

「……俺達？」

『達』という言葉は、複数のものがその場にあることを指す。

つまり、

「まつさん以外にも生存者が？……それで、そいつらも……能力者？」

政貴は笑みを浮かべた。

「そうだ。その通りだ」

そう言い放ち、そのままこちらへ近づいてくる。その足取りはとても力強かった。

「……来るな！」

「なぜだ？そこに倒れる、同志を心配してるんだぞ」

政貴の大きな体は義明と直人の間に割り込んだ。直人と義明は思わず身を引いた。なんだろうか、この奇妙な感じは。まるで、新海政貴ではないものが居るといふ矛盾が渦巻いていた。

政貴はしゃがみ込むと、仰向けに倒れる悠太の顔を直視した。

そして、笑みを浮かべる。

「おい、濱田悠太」

そう言い放ち、悠太の目の前で炎を揺らがせる。

「起きろ」

そう言っつて、悠太の額に手の平を押し付けた。

そしてそのまま、数秒。

「あ……あつちい！」

悠太は跳ね起きた。満身創痍だというのにも関わらずに、その痛々しい体を持ち上げる。

悠太と政貴は、必然的に顔を見合わせた。

そして、数秒の間を空ける。

「まつさん・・・何でこんなところに？」

「ああ〜繰り返しか。え〜っと、俺は色々あつて生き残ったんだ。

そして、俺は真正正銘の新海政貴だ」

政貴がそう言った瞬間、悠太は身を翻して政貴から離れた。

「さっきの火の玉は・・・」

その表情は、恐々としていた。

政貴はためらわずに、その口を開く。

「ああ。俺が、お前を目指して放ったものだ。スマンな。何分、

力加減がまだよく分からないものでな」

「・・・なんで、そんなのを俺に・・・」

悠太が聞くと、政貴の表情が急に真顔へと変貌した。その奇異と呼べるほどの変貌に、悠太は更に身を引く。

「お前を試すためだ。お前が本当に、俺と同格なのかを知るために」

「・・・はあ？同格？・・・何のことだ」

「・・・聞かされてないようだな」

政貴は立ち上がり、悠太を見下ろした。

「・・・だから、何のことだよ！」

「・・・世界が終末へと向かうことは知っているか」

「・・・ああ。知ってる」

「なら話は早い」

政貴が笑みを浮かべ、白い歯を見せた。イチゴジャムが気になるところだが。

「その世界を、一緒に見届けようじゃないか」

そう言つて、手を差し伸べる。傷だらけの、大きな手を。

悠太は顔をしかめ、政貴の顔を見た。

「・・・いみわかんねえよ。なんでいきなりそんなこと・・・」

「分からなくてもいい。じきに知ることになる」

そして、悠太の手を無理やり引っ掴み、力づくで立たせた。

「お前は、四大元素の一つなんだからな」

悠太は首を傾げた。四大元素の話は聞かされたが、そんなことを聞かされたのは初めてだ。

「四大・・・元素の・・・一つ・・・？」

まさか、俺が？悠太はそう思った。聞かされていたものの、驚きを隠せない。

「そうだ。この世を誕生させた四つの元素は、時間・空間・火・水の四つだ。この四つから派生して、様々な元素が生み出された。例えば、そこに居る小田 いや、『空気』の元素は、俺とお前の派生系の融合体だ」

悠太はうつむいた。様々な思考が、頭の中を行き交う。

悠太は確実に、政貴の言っている全体像を理解した。

悠太は更に飛びのいた。間合いは、三メートルほどまでに伸びる。

「もう一度言おう。俺と一緒に、終末を見届けないか？」

悠太は首を振った。

「・・・嫌だ」

「何故だ？四大元素ならば」

「だから！嫌だ！つってんだよ！俺は、どちらかと言えば、抵抗をする人間なんだよ！」

悠太は叫び、政貴の腕を振り払った。

「・・・その通りだ、まつさん。俺達は、ただ見届けるのは嫌だ」
直人の低い声が、脇の方から響く。

「まつさんが何者になったのかはよく分からない。でも、分かるんだ。まつさんに着いて行くのは、ちよつと抵抗あるって」

義明は直人の意見に賛同した。

政貴は両手を上げてため息をついた。

「……そうか。悲しいものだな。とりあえず、俺の能力を教えておこう。俺は」

四大元素の一つ、『火』の能力を持つ者だ。

悠太は声を詰まらせた。

もし悠太が四大元素の一つ、『水』の元素だとしたら。

この場所には、頂点に立つ元素が二つも存在していることになる。

悠太はとつさに水の力を政貴にぶつけた。

「……濱田！」

義明が思わず大声を上げる。

政貴は水の当たった右頬をさすり、その右頬から流れ出る血を確認した。

「まいったな。そうくるか」

政貴は全く堪えていないようだ。その表情はすましている。

悠太は危機感を感じていた。

もし、政貴の意見に同調したのだとしたら、頂点に立つ元素が二つ合わさることになる。そうなったとしたのならば。

確実に世界は崩壊する。

悠太はそう、危機感を感じていたのだ。それに、悠太は世界を終わへ向かわせたくなかった。

そして、政貴へのこの攻撃こそが、

『火』への意思表示だった。

「ならば、俺は然るべき処置をしなければならぬ。癌は取り除く。肥大化する前にな。それに、元素なら尚更だ」

政貴はそう呟き、手の平から炎を出現させた。

「……スマンが、実力行使ということだ」

「政貴は脅迫している。しかし、悠太の表情は不動だった。」「・・・いいよ、来いよ！」

火と水が、ぶつかり合う。

融合する物語（後書き）

次回・・・激突！

衝突する派閥（前書き）

ここで人物まとめ

濱田悠太^{はまだゆうた}・・・『水』の能力・元素者。世界の終末を食い止めようとする【抵抗派】のリーダー。元素である『水』は世界を創世した『四大元素』の一つ。

新海直人^{しんかいなおと}・・・『雷』の能力・元素者。悠太率いる【抵抗派】に属する。リーダーシップを執る、頭脳派の天才。

小田義明^{おたよしあき}・・・『空気』の能力。元素者。悠太率いる【抵抗派】に属する。空気は読めないが、場を盛り上げることが出来る。

新海政貴^{しんかいまさき}・・・『火』の能力・元素者。世界の終末を促進させようと目論む【保守派】のリーダー。元素である『火』は、世界を創世した『四大元素』の一つ。

川口翔馬^{かわぐちしょうま}・・・『剛』の能力・元素者。政貴率いる【保守派】に属する。二本の日本刀を操る戦士。チャライ。

中込宏太^{なかくみこうた}・・・『地』の能力・元素者。政貴率いる【保守派】に属する。優しい反面、少しバカなところも。小田との会話になると、戦闘シーンだというのに、なんだか緊張感がなくなる。

衝突する派閥

最初に攻撃を繰り出したのは、政貴だった。政貴はその大きな手の平から、炎の塊を出し、瞬時に悠太の懐へと入り込む。

「んな！・・・」

悠太がそう言い掛けた時にはもう、遅かった。政貴の手の平は悠太の腹部に押し付けられたのだ。

悠太は五メートルほど吹き飛んだ。服が燃え、気が動転する中悠太は地面を転がる。

一瞬の出来事だった。政貴の体格からは予想もつかないほどの俊敏さである。

「これでもまだ・・・抵抗する気か？力で解決しようとは思わないが・・・状況が状況だけに、手段はいとわないぞ」

悠太は腹部を押さえたまま、立ち上がった。腹部は恐らくヤケドを負っているだろう。見て確認するのも気が引けるほどに。あまりに早すぎて、些細な防護でさえも出来なかったのだ。水で応急処置をしようとするが、染みるので一瞬にして作業の手は止まる。

それでもまだ、悠太の心は揺らがなかった。

「・・・それは、こっちの台詞だ！」

悠太はそう言い捨てると、地面を強く蹴り、高く跳躍した。同時に、手の平に水の球体を作り出す。そしてそのまま、悠太はその球体を政貴に投げつけた。

政貴は片手でその球体を、楽々と打ち消した。笑みまで浮かべている。

「甘いよー！」

悠太は息を詰まらせた。やはり『火』の能力者だ。これぐらいで、堪えるはずが無い。

悠太が地面に降りるなり、政貴は拳を振り上げて襲ってきた。拳にはもちろん、炎をまとっている。

「・・・させねえよ！」

悠太は手の平から、帯状の水を発生させ、政貴に向けた。

水の帯と炎の拳はぶつかり合った。

火花と水しぶきを飛ばしあいながら、両者は同時に地面を踏みしめる。両者はどちらとも、歯を喰いしばっている。

ここで、悠太と政貴はようやく目を合わせた。どちらも日常生活では見せるはずの無い、必死な形相である。

「・・・まだ覚醒して間もないものの、よく使いこなせているな」
炎の赤を通して見ているため、政貴の顔は当然赤い。その赤さが、まるで赤鬼を彷彿させる。

「・・・それは、まっさんも一緒だろ」

悠太の青い顔はそう答えた。真っ青な顔は、青鬼を彷彿させない。

二つの大きな力は、互角の力を見せていた がしかし、

「・・・やはりお前だな」

政貴は笑みを浮かべた。その笑みに、悠太は思わず顔をしかめる。次の瞬間、政貴の拳の炎の威力は瞬時に倍増し、悠太を空中へと叩き上げた。悠太はされるがままに、空中へと打ちあがる。

政貴のジャンプ音と、悠太のうめき声が、重なり合った。

空中を回転する悠太に、更なる追撃がされた。政貴の炎の玉が、数発も当てられたのだ。

悠太は衝撃で飛ばされるしかなかった。ただ、力なくその体は地面に転がる。

「濱田あ！」

義明は叫び、駆け寄ろうと一歩踏み出した。

「来るな！」

政貴の一喝と共に、義明の足元が燃えた。

「・・・な」

歴然とした力の差を感じた義明は、目を見開いて政貴を見た。

「これは、俺と濱田の話だ。お前らは介入するな」

「・・・そんなわけねえだろ！俺も元素だ！」

「しかし・・・お前はただの元素だ。俺と濱田のような、起源ではない」

義明は唇を固く結んだ。道理は通っている。その通りだ。政貴と悠太は、義明や直人を遥かに超えた存在だ。

「・・・それなら・・・」

それでも、と義明は悠太を信じていた。

「それなら・・・悠太あ！立ち上がれえ！立ち上がるんだあ！」

義明の声は異様に響いた。崩壊して無音がステータスとなった町のおかげだ。

「フ・・・神頼みならぬ、と友頼みか。プライドの欠片も・・・」

そう言い掛けた時、傷だらけのわりかし小さな手が、政貴の襟首を掴んだ。

「黙れ」

悠太は吐き捨てるように呟き、手の平を政貴の頭に押し付けた。

「俺とお前だけの話？・・・そんな訳ねえだろ」

破裂音とも、爆発音とも取れる音が響いた。義明の笑い声も。

政貴の体は遥か遠く、校庭の端まで吹き飛んだ。悠太は更に、政貴に追い討ちをかける。政貴に受けたように、悠太も水の球体を何発も喰らわせたのだ。

そして、悠太は政貴を見下ろした。水の能力ではあるものの、やはり威力は強いらしく、体の所々から血が流れ出ている。ウォーターカッターの存在と便利さも頷ける。

そんな満身創痍な、悠太と同じような体なのにも関わらず、政貴は笑っていた。

「ククク・・・これを・・・これを待ってたんだ。血が沸いて、肉が踊るようなこの感覚・・・これが俺の待っていた・・・感覚だ！」

政貴は言い終える前に悠太の手首を掴み、そして 投げた。

悠太は叫び声と共に、校舎の隣の森へと投げられた。すさまじい力である。常人には到底できない。

悠太の姿が森に消えると同時に、政貴も森へと消えたいった。

「ヤバイ！助けに」

義明は今に飛んで行きそうだったが、直人がそれを制した。

「やめろ。俺が行く」

当然、義明は直人の手を振り払った。

「なんでお前なんだよ！俺だって」

「三人の中で一番ケガが軽いのは、俺だろ？お前は、ここで生存者と自衛隊を守ってくれ」

大爆発の衝撃で、義明も多少傷を負っていた。悠太に比べれば軽い方なのだが、日常生活と比べるとどうしても重い方になってしま

う。

義明は自分の肩から流れ出る血を見ると、ゆっくりとうなずいた。

「・・・分かったよ。行け」

直人はメガネの位置を中指で修正した。お決まりの動作である。

「メガネ」と呼ばれる由縁はここにあると言っても、過言ではない。「任せろ」

直人は走り出した。能力の如く、『稲妻のような速さ』で。

生い茂る木々の中での戦闘は、悠太に不利を与えた。ある程度の範囲をとる悠太の攻撃は、制限されてしまうのだ。

代わって政貴は、炎の如き俊敏さで悠太を追い詰めていった。何百発と撃たれた炎の球体は、ジリジリと森を焼いていき、悠太を取り囲む。

「お前とこれ以上戦う気はない。感じただろう？『水』と『火』では、力の差があるのは当然なんだよ」

悠太は膝をついた。過剰に体力を使ったので、それが今になって堪える。

二人を取り囲んでいるのは、木々ではなく炎だった。三百六十度全てを、悠太は炎に取り囲まれている。

あえぎ声を上げ、悠太は政貴を見る。それでも、揺らぎは起きな

い。

「・・・俺は・・・悟ったんだ・・・お前のおかげでな・・・だから・・・お前とは・・・」

そう言い、重い体を鞭打って再び立ち上がる。

そして、その手の平には水の球体がある。

「お前に着いて行く気はない！」

悠太が手を払うと、巨大な水の帯が現れ、二人の能力者を取り囲んだ。

政貴は水の帯を見つめ、笑みを浮かべた。

「・・・何のつもりだ」

「決まってるだろ。やられてるだけじゃねえってとこ・・・見せてやる！」

その声と共に、水の帯が巨大化した。

水の帯はそのまま、二人を取り囲む炎を次々に消化していく。

一瞬にして、辺りには静けさが戻った。硝煙の臭いはどうしても消すことができないが。

「・・・そういうことだったのか。よく力を溜めておけたな」

「俺でもビツクリだよ」

そう言って、悠太は自分の手の平を見つめる。能力に秘められた可能性については、能力者自身が一番良く知っている。

政貴は自分の体の二つの拳を突きあわせた。

「さあて、仕切りなおすといくか」

悠太はゆっくりと身構える。

「望むところだよ！」

悠太は政貴に飛び掛った。拳に水をまとっているのは、政貴のマネだ。

政貴の炎の拳と、悠太の水の拳がぶつかりあった。タイミングでは、政貴の方が優勢であった。力でも、恐らく政貴の方が強いだろう。しかし、

優勢を信じた政貴の目に、真つ青な拳が映った。

間に合わない！

もう一本の悠太の拳が、政貴の顔面に直撃した。ボクシングの技で言う、ライトクロスのようなものだ。

政貴は叫び声を上げ、その場に倒れこんだ。

「・・・んなあ・・・」

『火』は俊敏だ。しかも、冬の乾燥する季節ほどの俊敏である。しかし、スピードで上を行くのは、悠太の『水』だった。

政貴の右頬は腫れあがっていた。当然である。あれほどの威力の攻撃を受けたのだから。

その時、悠太の目の端に、森の中を走ってくる直人が映った。

「濱田あ！」

まさにナイスタイミングだった。救援を借りるのはプライドが許さないが、強敵の前でそれは言ってられない。

「新海！こつちだこつち！」

悠太が手招きをすると、直人の走る速度はより一層早くなった。あれ、アイツあんなに早かったっけ？

しかしその時、弾丸のように早い真つ黒な影が、直人にぶつかつた。案の定、直人の体は宙を舞う。そして、影は直人の体を掴み、どこかに消えていった。

一瞬の出来事だった。

「・・・直人あ！」

応答はない。あまりに一瞬すぎて、悠太は状況を上手く把握できない。

その時、悠太の肩に政貴の手が置かれた。
「相手は俺だ」

コンクリートの硬い地面を、直人は転がった。土の地面と違って、衝撃は丸々直人に跳ね返って来る。恐らく、ここは校庭の隣の道なのだろう。

「フハハハハ！ぶざまだなあ！」

喜々とした声が響く。それが妙に聞きなれた声なので、直人はとっさに立ち上がり、声の主を探した。

「・・・か、川口・・・」

目の前には、日本刀を携えた川口翔馬かわぐちしょうまが居た。日常生活で立たせられている髪の毛は、今はペツタリと寝ている。そのせいか、少し髪が伸びているような気がする。

「わああ。やっぱりお前だったのかよ・・・ウツケル」

政貴のように、さほどキヤラは変わっていないようだ。胸を撫で下ろす反面、お前こそ一番キヤラ変われよ、と思ってしまう。

「川口・・・お前も・・・能力者・・・なのか？」

「ああ。そうだぜえ」

尚も嬉しそうに言う川口は、日本刀をブンブン振り回す。

直人の脳内を、瞬時に考えが駆け巡った。様々な憶測が、次々と浮かんでくる。

川口翔馬は、中学二年生の時に転校してきた。ありがちな転校だ。別に気にかけるほどでもなかった。しかし、その転校も、今となれば不思議が渦巻く。

能力者　つまり元素達は、この町に集合するようになっていたのだろうか？この地が、何かのスイッチにでもなっているのだろうか？

「新海！」

川口の声で、直人は現実に戻された。直人は慌てて体勢を直し、川口を見る。

「お前は・・・悠太の仲間なのか？悠太の考えに、お前は着いて行くのか？」

川口はそう言うと、刀を構えた。

「返答によっては・・・殺す」

その言葉には、明確な殺意が込められていた。もしかしたら、ハツタリの殺意かもしれない。それでも、直人はその殺意を、脅威とした。

脅威とはしたものの、直人は笑みを浮かべた。

「俺は・・・悠太に着いて行くんじゃない」

直人はメガネの位置を再び修正する。思えば、よくあの転倒でメガネが倒れなかったものだ。

「俺と悠太・・・そして小田は、一緒に行くんだ」

川口の表情は一瞬複雑になったが、すぐに元に戻った。

「そうか・・・ならば、まっさんの言うとおり・・・然るべき処置をとる必要があるな」

直人は身構えた。不恰好な身構えだ。

「・・・俺を・・・殺すのか？」

「そうだ。まあ、俺も戦うことに快感を感じたものでな」

そして、二本の日本刀の先端を直人に向ける。

「あまり力というのは・・・感心できない」

「感心しないでもいい。ただ、逆らう者は滅びるだけなんだからな・・・

・お前達は言わば、反逆者だ」

直人はフツ、と小さく笑った。

「その通りかもな」

肩の出血は思ったより酷かった。ただ地面を転がっただけだと思っていたが、やはりあの爆発はすさまじい威力だったようだ。すさまじ過ぎて、感覚が麻痺するほどに。

怪物との戦闘で制服は緑色になったが、今度は自分の血によって、青い体操着が赤く染まりそうだった。

大丈夫さ。出血ならもう、慣れてる。

義明はそう呟きながら、気絶する自衛隊隊員の男の傍まで歩み寄った。やはり、鍛えられた人間と言えど、あの衝撃は耐えられないようだ。この分だと、輸送車の中の生存者はほとんど気絶しているのだらう。出てこないのを見る限り、絶対そうだった。

義明は地面に座り込んだ。遠くから激闘の音がしているというの

に、義明はこの場を動けない。

「クソツ・・・新海と代わってもらえればよかった」

戦いの快感は、ギャグが滑ることの快感と似ていた。また、次も。そう思う。

仲間二人が激闘を強いられているのに、こんな場所で そんな罪悪感が、義明にはあった。

その時、ゴソゴソという、何やら衣擦れのような音が、義明の耳に飛び込んだ。

「なんだ？」

義明はコツソリと立ち上がり、辺りを見回した。

輸送車の方からだ。

そして、衣擦れ音は更に大きくなった。そして、扉に手をかけたような金属音も聞こえる。

「誰だ！」

義明は能力を発動させ、瞬時に輸送車の裏側へ廻った。

「・・・アツ！小田！」

なかみこうだい中込宏太だった。宏太は扉に手をかけ、今にも開けようとしている。

「・・・何でお前がこんなところに？」

宏太は慌てていた。何故目の前にこの男がいるのか、義明には分からない。

「お・・・俺は・・・俺は彼女を助けに来たんだよ！」

バカか、と義明は宏太の頭を叩く。

「生存者は自衛隊に救出されんの。救出されるのを救出してどうすんだよ？それにお前がやったらただの誘拐でしょうに」

「だって、救出という名の連行だろ？」

ウツ、と義明は言葉を詰まらせた。何処からその情報を仕入れたか分からないが、正解だ。何せ、世間的には生存者全員が、テロ主犯者の可能性があるということになっているのだから。

「いや・・・そうだけど」

「だから、俺が助けるんだ！」

「・・・で、お前は彼女を助けた後、どうするつもりだ？」

「え〜と・・・その・・・一緒に世界の終わりを見ようと・・・」
カオス。その一言しか浮かばなかった。彼女と世界の終わりを見ようなど、どこの映画の主人公も言わないことだろう。

「ああ〜お前も、まつさん側の人間なのか」

「そうだけど・・・ハッ、お前は・・・」

「悪いが俺は濱田の同志だ」

宏太は顔をしかめて頭を掻いた。

「ん〜そうか・・・それなら・・・予定変更」

そして、宏太はサツと身構え、指の骨を鳴らす。

「え〜まさか、お前と・・・」

「いや〜まつさんの指令なんだよね。ゴメンゴメン・・・でもまあ、俺、闘いたいからさ」

義明は笑みを浮かべ、拳を固めた。

お互いは鋭く見合わせ、笑みを浮かべた。

「勝負だ、宏太」

「望むところっすよ」

運命に決められたかのように、それぞれの闘いは始まる。

なお、題名（前書き）

長いから一部にしました

さあ、闘おう

直人の目の前を、刀の刃が一閃した。

直人はあえぎ、その場から飛び退いた。翔馬の攻撃は速かった。かつ、力がある。

翔馬は日本刀を満足げに振った。煌く刃先が、いやに目立つ。ツー。

生暖かい感触が、直人の頬ほおを伝った。血だ。わずかなタイミン
グで避けきれたと思っていたのだが、痛覚を感じさせぬほどに、直
人を襲っていたらしい。

「・・・クツ・・・いてえ」

後になって、痛みが湧き上がる。傷口であろう右目の下は、ジン
ジンと熱い。

「・・・スピードなら俺がピカイチなんだよ、メガネ」

翔馬はそう呟くと、日本刀を振り上げた。

「・・・悪いけど、これくらいで堪えているようじゃ、俺に勝てな
いよ?」

直人は傷口を押さえたまま、ゆっくりと立ち上がった。その口元
には、笑みを含んでいる。

「・・・堪える?」

直人は鼻で笑い、右手の手の平を翔馬に向けた。

「堪えるはずねえだろ」

一筋の電撃が翔馬を襲った。正面からではなく、背後から。不
意を突かれた翔馬は、悲痛な声を上げながらその場に倒れた。

「・・・ハハツ、やられちゃった」

翔馬は背中を痛そうに押さえて立ち上がった。足取りはおぼつか
無い。クリティカルヒットだっただけに、回復は時間がかかりそう
だ。しかし、外傷が無い分、治りは早いはずだ。

「腰痛ぐらいは治ったんじゃないか?」

「そうかもな」

電気治療にしては、少し強引過ぎる。

翔馬は日本刀を再び振り上げ、直人を見た。

直人はその刀を、ジツトリと見つめる。

「・・・俺の能力は、『剛』・・・確か、世界の文明に表れた英雄達の、力の元・・・だったかな？まあ、そんなところだよ」

「あいまいだな。まあいいや。・・・俺の能力、つうか元素は、『雷』。世界も色々必要だったんじゃないかな？」

「お前もあいまいだな」

直人は小さく笑った。

「実のところ、俺もよくは分からない。まだ」

「そうだよな。・・・でも、俺は早く知りたいんだ。・・・だから、そのためには・・・」

翔馬の目つきが鋭くなった。

「戦うしかない」

翔馬が銃弾のような音を鳴らしながら、二メートルほど上空へとジャンプした。直人はとっさに体を身構える。

「戦いで見出そうってか・・・」

答えを求める方法の一つとしては、アリだ。その代わり、求められない確立の方が遥かに高い。世界は二度も大きな戦争を勃発させて、何か大きな答えを見つけたというのか？

次の瞬間には、翔馬の刀の刃は目の前にあつた。すさまじいスピードだ。直人はとっさに、電気のシールドを発生させる。

二本の刃と、電撃が衝突した。バチバチと音を立て、不可思議な薄い青色の色を発生させる。

体勢は完全に、翔馬の方が優勢だった。直人は背中を反らして、なんとか日本刀を防いでいる。

そして、直人と翔馬には、力の差があつた。

翔馬が更に力を加えると、電気のシールドはガラスのように破壊した。そしてそのまま、直人は地面に仰向けのまま倒れた。ゴスッ、

という鈍い音共に。

衝撃のあまり、強く頭を打ち付けた。コンクリートの路面は土の地面を軽く超えるほどの硬度で、直人は思わず悲痛な叫びを上げた。二本の日本刀を携え、風によってなびく髪の毛の姿。それをシルエットで見れば、まるで死神のようであった。少なくとも、新海^{しんかい}直人はそう感じた。某人気ジエンブ漫画に登場するような、黒装束の戦士。翔馬はそれを感じさせるほどの殺気を持っていた。

「・・・どうしたんだ。俺とお前は・・・役割が一緒のはずだろ？」
翔馬はそう言うと、しゃがみ込んで直人の顔を覗きこんだ。大きな瞳が、直人の瞳をレンズ越しに捉える。

「・・・どういうことだ」
返答には、苦痛が混じっていた。無理もないだろう。直人は重い脳震盪に陥っていた。

翔馬は立ち上がると、刀のミネを肩にのせ、言った。

「俺とお前は・・・言ってみれば『破壊』のために生まれたんだ。小田と中込が『創造』のために生まれた元素ならば、俺達は逆を行く」

「・・・つまり？」
「俺達は破壊者つてことだ。お前は自然の中で発生し、時には環境に、時には文明に、大きなダメージを与えた。俺は革命者や時の英雄に力を与え、常人には不可能なほどの行動力と知識力を与え、文明や王国、政治にダメージを与えた」

翔馬の話しを聞きながら、直人は頭を抑えて立ち上がった。足元がおぼつかないのは、さきほどの翔馬と同じである。

直人は笑っていた。

「そうだよな・・・俺とお前は破壊者だ」
素晴らしい話だ、と直人は吐き捨てた。

破壊が破壊を破壊する。破壊が破壊と破壊し合う。混沌としたものだ。破壊同士が正面衝突をしたならば、そこに宇宙の法則は発生するのであるうか？答えは分からない。

「俺達が戦わないとな」

直人はそう言い放つと、目を細めた。

翔馬は笑みを浮かべ、直人を歓迎するように見つめる。

「とりあえず・・・やりますかね」

直人は拳を固めた。

「そうだな」

翔馬は刀を煌かせた。

直人は雄叫びを上げ、翔馬に向かって突進した。体中から電気を発生させながら、もうスピードで突っ込む。力でお圧すより、それを崩すことを考えていた今までの戦闘方法でなく、真っ向から力で攻める戦い方だ。

翔馬は声を上げた。長い日本刀は取り回しが不便なうえ、二本もある。だから、猛スピードで突っ込む直人に対応し切れなかったのだ。剣術も、翔馬による見よう見まねだ。

直人の拳と、翔馬の刃が衝突し、綺麗な火花を散らした。

今度は、翔馬の体勢が不利だった。手の関節があらぬ方向に曲がろうとしている。

翔馬は悲痛な叫びを上げた。痛い。

翔馬は二本の刀を同時に手放した。当然、それは直人の攻撃を受けるといことになる。流れるように直人の拳が翔馬の腹に突き刺さり、翔馬は喘いだ。

しかし同時に、直人の体勢はガラ空きとなる。

翔馬は歯を喰いしばった。あまりの力に、奥歯が聞いたこともないような音を立てるが、それを我慢し、翔馬は地面に落ちていく刀へと手を伸ばした。

そして、掴んだ。

翔馬は力を込めて日本刀を、それは振り回したと言うに相応ふさわしかった。とにかく翔馬はヤミクモに振り回した。

刃は直人の顔面に向かっていった。直人は必死に電撃で防護するが、その衝撃波だけは防ぎきれない。

二人の肉体は、ほぼ同じタイミングで吹き飛んだ。そして、二人は同じように地面を転がる。直人のメガネが地面に落ち、翔馬の日本刀が地面に落ちたのも、ほぼ同じタイミングだった。

二人が衝突した場所には、大きく焼け焦げたような跡が残っていた。

校庭のど真ん中。何故ど真ん中かというと、小田義明いわく、「雰囲気が出るから」。中込宏太もそれを軽く承知し、二人でテケテケと校庭のど真ん中へと歩いて向かったのだ。

「そんなことより小田、ピーセウオーカーいつ返すんだ？」

ピーセウオーカーとは、PSPの人気ソフトのことだ。

「え〜と、全クリが難しいんだよね〜」

「いいから返せよ！もう俺も禁断症状が出るわよ！」

「世界が終わするのにピーセウオーカーかよ！」

「当たり前だろ！俺の心の抑止力がもうもたへんのや！」

と、ここで義明が仕切り直す。

「……あの、趣旨変わってませんか？」

「……うああ、そうでした。すみません」

「もう〜すっかりしてくださいよ〜」

「ゴメ〜ン……ってお前のせいだよ！」

宏太のとび蹴りを、義明はヒラリとかわした。

「……それで？お前は何の元素だった？」

突然すまし顔で、義明は宏太を見る。宏太は一瞬驚いていたが、すぐに自分も立て直す。

「『地』だった。お前は？」

義明は手の平を見て答えた。

「『空気』だとき。なんや、お前と俺同じような能力やんけ」

「そつだな。フハハ、やっぱり運命かなんかでしょうかね？」

「そつかもな」

『地』と『空気』どちらも地球の誕生に必要な不可欠なものだった。どちらも『世』が予期していなかったイレギュラーを発展させたものだ。この繋がりをも、運命と感じない方がおかしい。

「・・・で？まっさんの指示は・・・」

「反逆者は始末しろ、ってことだよ。んで、濱田がその反逆者と認定されたら、その仲間であるお前らを、俺は始末しなければいけない」

義明は笑みを浮かべた。

「・・・つまり、俺を？」

宏太も笑みを浮かべる。

「そういうこと」

宏太が指を打ち鳴らすのと同時に、二人は間合いをとった。二メートルほどの間合いだ。お互いの顔は、よく確認できる。

「じゃあ、やるか。いつちよ、腕試し」

「オーケー。俺も、全然戦ってないんだよね。川口ぐらいしか」

そう言っつて、宏太は首の骨を鳴らし、更に指の骨を鳴らす。

義明も真似て首の骨を鳴らそうと試みるが、無音に終わる。

「お前ダツセエ」

「うるせえ！お前みたいなオッサンじゃないから、鳴らないんだよ！」

確かに宏太はやや渋い感じがするが、首が鳴る、鳴らないとは関係ない。

義明は目を細めると、宏太に手の平を見せた。

宏太は身構えず、その手の平をジッと見つめる。

「・・・いいのか？お前、今銃口向けられてるのと一緒にだぞ」

宏太は尚も、不動だった。大仏の如く。鎌倉ではなく、奈良の。

「だって、俺も今、銃口向けてるもん」

宏太の不気味な笑いを、義明は疑念をこめて見た。

次の瞬間だった。

宏太が手を振り上げたと思うと、足元が瞬時に盛り上がり、気付

いた時には、義明は上空へと叩き上げられていた。

義明は改めて宏太の能力を悟った。宏太の能力は『地』。宏太にとって、この校庭はまさにホームグラウンド いや、世界中が宏太のホームグラウンドなのだ。

背中 of 痛み に耐えながら、義明は空中で身を翻し、宏太と対峙した。

「そうか・・・銃口つてのは、このことだったのか」

「そうだよ。全く・・・まんまと引つかかるとは・・・お父さんは悲しいよ！」

「うるせえよ！今背中 of 痛み に耐えてんだからボケるなよ！」

義明は背中をさすった。これは、シップものの腫れあがりだ。

世界中が宏太のホームグラウンド。しかしそれは、義明にも適用することだった。世界中に大陸があるように、世界中に空気は存在する。

歡喜の声と共に、宏太の眼前から、義明の姿が消え去った。宏太はとっさに息を詰まらせ、辺りを見回したが、何処にもその姿はない。

次の瞬間、宏太は義明のアップパーを喰らった。義明の筋力に、スピードという付加能力が加わり、力は更に倍増する。宏太の口元から放たれる悲痛な声と、義明の声が重なる。

宏太はその場にヒザをついた。脳震盪を起こしているのだろう。あれほどのアップパーが直撃したのだから。

「・・・おい、大丈夫か宏太」

「うん・・・大丈夫」

義明は笑みを浮かべた。

「ちよつとやりすぎたなあ。まあ、俺の背中 of 痛み に比べれば、痛くないって」

デスマッチにあるまじき会話の光景である。普通、こんな殺し合いのような時には、ののしり合いをするのが定例なのだが。

「でも、お前は俺を、抹殺しようとしているからなあ・・・俺がお

前を殺しても、正当防衛だよなあ」

「恐ろしいこと言うなよなあ」

宏太はアゴを抑えながらうめく。割れたらどうしよう、などと仕切りに呟きながら。

いや、お前がさつき抹殺とか言ってたじゃん。

義明は心の中で言ったが、それは宏太には聞こえない。

「じゃあ、やり直しな。もうこれからは、恨みっこなしで」

義明は手をパン、と叩きながら言った。

「まあ、死んだらお前に憑り付くけどな」

「だからそれを恨みっこって言うんだよ！」

義明がツツコムが、宏太は至って真面目な顔だ。

「・・・俺は・・・まだ遣り残したことがあるからな」

「彼女の救出か？」

「それもだけど・・・っていうか、それが一番だけど・・・とにかく遣り残したことがあんだよ！だから、今俺が死んだら、俺はお前を呪う！」

義明は一步後ずさり、高笑いした。夜の闇に、その声が響く。

「・・・じゃあ、俺を殺すんだな」

宏太は立ち上がると、拳を固めた。

「もちろん。抵抗はあるんだけどな」

「いや、人ならそれは当然」

「ですよ〜」

義明は高々とジャンプすると、上空で浮いた。そして、手招きをする。

挑発だ。

宏太は雄叫びを上げながら、拳を義明に向けた。

「いくぞお！」

宏太の声と共に、十本ほどの地柱が地面から突き出され、義明に向かっていった。

力で地柱に勝つことは難しい。義明は十本の地柱をヒョイヒョイ

と避けると、空気で作った球体を次々に宏太に向けて投げた。

宏太はその球体を、地柱を出現させて防ぎ、更に五本の地柱で義明を襲った。義明は瞬時にそれを避け、右手を振って空気の波を作り出して宏太に攻撃した。

空気の波は地柱を何本も斬った。そしてその分割された地柱は、宏太に向かって落下していく。

宏太は落下してくる地柱をなぎ払うと、再び地柱を発生させた。

しかし、今度の地柱は義明を外して突き出る。

「どうした！ 疲れたか？ 宏太？」

空中に浮き、地柱を眺めながら、義明は叫んだ。宏太の荒い息遣いが聞こえる。宏太はかなり疲れているようだ。

「だい・大丈夫だ！」

宏太の声が響く。やはり疲労は隠し切れないようだ。さすがにこれだけの数の地柱を発生させれば、無理もない。

何を強がって・・・。

義明がそう心の中で呟いた瞬間だった。

二十本ほどの地柱が、やはり義明を外して地面より突き出た。

そして、義明はそこで気付く。

「か・・・囲まれた」

義明の頭上以外、完全に土の柱は、壁となって義明を外界と遮断していた。

そして、頭上には宏太が居る。

畏だ。宏太はワザと外していたのだ。それによって、義明の行動範囲をグンと狭めていた。疲労を見せたのも、恐らく半分は嘘だ。

「かかったなあ！ オダア！」

宏太が両手を広げ、勝利を宣言した。宏太の背中から、大きな土の塊が生まれる。巨大な土の塊だ。優に五メートルは超える。

義明は舌打ちをすると、両手の手の平を重ね、空気をそこに集約させた。パワーで宏太に勝てる気がしないが、今は力で対抗するしかない。せつかくのスピードも、行動範囲の制約によって失われて

いるのだから。

両者は雄叫びを上げた。

義明の空気と、宏太の土の塊は衝突した。恐ろしいほどに強い衝撃波が巻き起こり、二人の周囲にある物を次々と粉碎していく。当然、地柱も。

視界が開けた。大きな暗闇の空に、ちっばけな宏太の姿が、義明の瞳に映る。

義明の周囲の空気が竜巻状に回転する。砂ぼこりを巻き上げ、それも宏太を襲う。

しかし、どんなに小細工をしても、宏太の力には勝てそうも無かった。義明の腕はもう、限界を迎えている。筋肉が今にも、破裂しそうな勢いだ。

こうなったら、賭けに出るしかない。

義明は歯を喰いしばった。土の塊はグングンと義明に向かってくる。吹き荒れる強風は義明を襲い始め、義明は更に力の差を思い知った。

賭け。それは直前まで土の塊を引き寄せて、突然そのエネルギーの働く方向を変えろという荒業である。失敗すれば、更に威力を増大させた土の塊に、義明は襲われることになる。それはつまり、死を意味する。

宏太の眼差しが真剣になった。友の死を、覚悟しているのだ。人はこうも、残酷になれるものなのだ。

強風の中でも、宏太の咆哮が聞こえた。獣のような咆哮だ。そして更に、土の塊は義明に差し迫る。

二メートル・・・メートル・・・と、その距離は縮まっていった。そして今、土の塊はもう眼前にある。そのデコボコとした表面が、義明の目に飛び込む。

義明は力を加えるタイミングを謀っていた。一步間違えれば、死ぬからだ。

一息の元に、義明は覚悟をした。両手で支えていたものを右手一

本にし、自由になった左腕に空気の塊を作り出す。

右腕の骨が妙な音を発し、義明は痛みにも絶叫した。しかし、今更両手に戻すのは遅すぎる。

ついに土の塊と義明を隔てる壁は、空気の薄い層一枚きりとなった。もう、髪の毛の一部が塊に付着している。

駄目かもしれない・・・でも。

「いやだあああああ！」

義明は絶叫をしながら、左手の手の平を振った。濃縮された空気の弾が放たれ、土の塊の側面に当たる。

まるで関節を折られるかのように、巨大な土の塊のエネルギーの向きは変化した。塊は義明のすぐ隣に激突し、衝撃波を生む。

さすがに、その衝撃波には耐え切れなかった。義明は波に乗り、されるがままに、身をあずけた。

義明は地上に仰向けになった倒れていた。体中が悲鳴を上げている。立とうとも思えない。

そして、宏太も一緒だった。全身全霊を込めて放った攻撃は、容易く回避されてしまったのだから。宏太も、かなりの無理をしていたようだ。

「うわあ、お前、つええ」

義明は仰向けのまま呟く。砂ぼこりのせいで、ノドがイガイガする。

「いやあ、惜しかった。まさかあんな器用なことを、不器用な小田にされるとはねえ・・・」

心なしか、宏太は楽しそうだ。義明は微笑み混じりに、少し笑う。

本音を言わせてもらうと、楽しかった。友との本気のぶつかり合いは。

二人は一緒に笑った。

同じトーンで、同じスピードで、同じ音量で。

始まり

息を荒げながら、悠太はヒザをついた。体中が悲鳴を上げている。重傷の火傷こそないものの、常人ならば火だるまになるほどの炎なら浴びている。体中がジンジンと熱かった。

「・・・もう、悪あがきはよしたらどうだ？俺は、四大元素の一つであるお前を、逃したくは無い」

「悪かったな・・・俺は、人類に惚れられてるんだよ・・・お前と違って」

火の玉が幾つも浴びせられた。悠太は必死になってガードするが、やはりその威力に負けてしまう。

そして、悠太は仰向けに倒れた。彼を生かしているのは、人間の器官ではなく、元素そのものだろう。

「・・・減らず口を叩く余裕が、よくあるな」
「実力が、お前より上だからかな？」

よくそんな虚勢を、と政責は吐き捨てた。客観的に見ても、悠太に策があるとは考えられるはずもなく、それはただの強がりとしか感じなかった。

「・・・それで？お前は・・・いいのかよ。世界が終わっても」
フシュー、フシューと呼吸器の音を上げながら、悠太は小さく言った。

「何言ってるんだよ・・・当たり前じゃねえか」
「全ての者が、崩れ落ちるんだぞ。何十億という長い歴史と、その中の俺達人間が作り上げてきた、何万年という文明と技術と記憶も、全て崩れ落ちるんだぞ」

政責はせせら笑った。

「人間はイレギュラーな存在だ。それなら、滅してしまっても構わないだろう」

悠太は手を付き、ふら付きながら立ち上がった。目の前がグラグ

ラとゆれるが、何とか抑える。

「・・・俺は・・・守りたい・・・この・・・」

「もういい。お前には失望した」

そう言つて、政貴は悠太の頭を掴んだ。すさまじい握力が悠太を襲い、悠太は思わず顔をしかめ、苦痛な声を上げた。

「・・・やめろ！」

「このまま・・・握り潰しても、構わないはずだ」

握力はジワジワと力強くなる。人間にここまでのがが出せるのか、と悠太の頭を駆け巡ったのだが、すぐに苦痛で掻き消される。

「やめろ・・・やめろお！」

悠太は必死にもがくが、政貴の強力の前には、歯が立たない。

ついに、悠太は死を覚悟した。こんな痛みを感じるぐらいなら、死んだほうがましだ。

しかしその瞬間、悠太の中で、何かのスイッチが押された。拘束具が外されるような、開放的な音だ。

悠太は叫んでいた。そして、力任せに無我夢中でもがく。体中に力が湧き上がり、それは湯水の如く流れ出る。

「うわああああ！」

気がつくと、目の前で政貴が倒れていた。額から血を流し、苦痛の悲鳴を上げている。

悠太は一瞬、何が起きたのか分からなかった。目を伏せていたために、その光景の原因の一部始終でさえも分からない。

「・・・ま・・・まさか・・・完全なる・・・覚醒・・・だと？」

政貴は額を押さえたままうめいた。ノドからやつと、声を絞り出しているようだ。よほどの激痛らしい。

「まだ力を隠していたとは・・・ありえない」

水は落差があるほど、強い力を発揮するものだ。滝の下にある岩は、その力で削られていく。

「・・・俺も・・・ビククリだよ」

悠太は改めて自分の手の平を見た。いつも感じられなかった力が、

今は感じる。強く、大きな力だ。自然と体が震える。

うずくまる政貴の手を悠太は掴み、強引に立たせた。政貴は一瞬フラつくが、すぐに体勢を立て直す。

「・・・まっさん。もう一回だ、もう一回・・・五分でカタをつけようぜ。お互いもこれだけ傷だらけなんだから・・・フェアだろ？」
政貴は額から手を離すと、笑みを浮かべたままうなずいた。

「・・・いいだろう。五分だな・・・なら、五分でカタをつけてやる」

止めどなく流れていく血液が、政貴の頬を伝い、一滴、二滴と地面に落ちていく。そんな悲惨な状況なのにも関わらず、その表情は爽やかだった。政貴は、戦いを楽しんでいるのだ。

「さあ・・・最高の五分間にしよう！」

二人は臨戦態勢に突入した。

スキアーは上空を見上げると、笑みを浮かべた。星達の輝きが、今は墓標のように見える。

今、世界には思いもよらぬ緊急事態が発生している。運命を創り、運命に従うべき四大元素の一つが、反逆を始めているのだ。世界が思いもしなかった、異例の事態。この世界は一体これから、どうするのだというのか。

「・・・イレギュラーの成せる業・・・か」

そう言い、スキアーは皮肉な笑みを浮かべる。

命令を実行するだけの存在 元素が、人間という容器を手に入れた所為だ。地球上のどの生物にも成し遂げられなかったことを、人間は簡単に成し遂げ、誕生からわずかな年月で、生態系ピラミッドの頂点へと上り詰めた。

その人間の可能性が 元素を変えた。

スキアーはポケットに手をつ込み、星空を見上げた。

使命は与えられたものだ。でも、それは元素自体に与えられた

ものだ。

でも、俺は人間だ。意思と目的をもって、自分の道を作ることができる。

ならば俺は、自分の道を作る。

スキアーは目線を町へと向けた。真っ赤な炎が見えるということは、恐らく戦闘も激化したところだろう。

多大なエネルギーの集合体は、強烈な力でぶつかり合った。強烈な衝撃波が発生し、赤と青の閃光が飛び散る。

そして二つの力は当然、爆発した。赤と青は綺麗な光となって混じり合いながら、虚空へと消えていく。

悠太はひるまずに、水の玉を繰り出して更に追撃した。無数の青の球体は、次々と政貴を襲っていく。

「おらぁ！来て見るよ！」

数十発撃って、気がついた。悠太は悠太自身の撃った水の力、そしてそれに舞い上げられた土ぼこりによって、目の前の視界が完全にシャットアウトされていたのだ。

思わず、一歩退いた。恐怖、とはまさにこのことだ。悠太の周り三百六十度全てを、土ぼこりは囲んでいる。

「・・・や、やっちまった・・・」

すかさず体の周りをバリアで覆うが、もう遅かった。

政貴はもう、頭上に来ていた。

政貴の炎をまとった拳が、悠太を襲った。悠太は反応しきれずに、その攻撃を浴びる。

悠太は悲痛な叫び声を上げながら、負けじとウォーターカッターを繰り出した。しかし、ウォーターカッターは政貴の遙か頭上をかすめただけだった。残ったのは、悠太の背中の痛みのみだ。

「相手の動きを封じ込めようとするのは勉強になった。だが・・・後先考えないのは感心しない」

政貴は炎を手に帯びた。炎はまるで蛇のように手の周りを這う。まるで、蛇使いのようだ。

「・・・そろそろ三分立つ・・・カップラーメンがのびちまう」

政貴は拳を振りかざし、悠太に襲いかかった。悠太はすかさずその拳を両手で受け止め、その反動を利用して政貴の腹部を蹴り上げた。

まさに一進一退の攻防だった。

悠太の蹴りが政貴の腹部に直撃したと思えば、政貴はひるまずにガラ空きとなった悠太のボディにパンチを与え、悠太はそのパンチで倒れながらも、政貴のアゴを蹴り飛ばす。攻撃をすれば、そのまま帰ってくる。二人の体にはもう、限界が来ていた。

やがて二人は取っ組み合いを終え、飛び退いた。二人の間合いは、三メートルほどとなる。

「四分か・・・」

政貴は笑みを浮かべ、炎を全身に発生させた。夜空の元、政貴の体は真つ赤に輝く。

「そうだな・・・じゃあ・・・」

悠太も笑みを浮かべると、手の平に全神経を集中させた。

大きな力が、二人の間に竜巻のように発生した。二人の力ではない。二人の力がぶつかり合って発生した、全くの別物だ。

「・・・これで・・・」

悠太は構えた。政貴も同時に構える。

「終わりだあ！」

悠太の手から、大きな水の壁が放たれた。轟音を放ちながら、一心に政貴に向かっていく。そして、

二つの力は、衝突した。

硝煙の臭いが漂う中を、政貴は歩いている。そして、立ち止まって一点を見つめ、ニヤリと笑う。

「・・・五分だ。勝敗はつかなかったな」

政貴の目の前では、悠太が腰を抜かして地面に座っている。その表情には、疲労の色が出ていた。

「クソッ・・・よくいうぜ・・・もう少しで俺を・・・俺をやれたクセに」

「それはこっちの台詞だった可能性もある。力と力の競り合いは、力が互角な限り、勝敗は神しか分からないからな」

政貴は悠太を立たせた。

「いいのか・・・そんな・・・助けて」

「約束は約束だ。それに・・・すぐに世界は終わらないしな」

政貴は悠太に背を向けた。その大きくガツシリとした体格が、悠太の目に映る。

「まつさん・・・」

でも、と政貴は言い放ち、背後を振り向いた。

その目には、戦闘時の炎が宿っていた。

「いづれまた、俺たちは会うはずだ。・・・その時は」

「ああ。その時まで、修行しとく」

政貴は笑みをこぼしながら、手を振った。

「そうか・・・頑張れよ」

政貴の言葉いつまでも悠太の頭の中に響いた。そして、かつてのような無邪気な手の振りをして、政貴はその場を去る。

悠太はその後姿を、ただジッと見つめていた。

悠太がグランドに来る頃には、義明と直人はもうそこに居た。

「お疲れ〜ハマ」

義明はそう言って迎えた。直人も素直に出迎え、ようやく悠太は安心感に包まれた。

「え〜つと、まつさんは？」

「川口と宏太を連れてどっか行っちゃった」

悠太はため息をついた。

「・・・まさか、川口と翔馬が？」

「おい、宏太忘れてるぞ」

直人が素早くツツコミを入れた。

「まさかアイツらも能力者なんてな・・・」

「俺もビックリだったよ。宏太、何気にすんげえ強いし」

義明は傷だらけの手を見つめながら言った。

「そうだな。俺も川口と戦ったが・・・まさか、あそこまでとは」

一対一でそれぞれ戦ったわけか、と悠太は確信した。そんなことより、二人がどんな闘いを繰り広げたのが気になる。

「それより、濱田」

考えにふけるうとした悠太を、義明はすかさず妨害した。

義明は目線を動かし、自衛隊の車両に目をやる。

「さつき空飛んでたら、自衛隊の車両が向かって来てた。へりも何台か。しかも、今度は戦車とか来てたぞ」

悠太は驚いて目を見開いた。

「ハッ？なんで？」

直人はやれやれ、と首を振る。

「当然だろ。予定時刻よりも完璧に過ぎているはずだしな。しかも、通信がとれないとなると、何かに襲撃されたとしか考えられないし

な。キツチリやる自衛隊だけに」

「やばいじゃん。じゃあ、早く自衛隊の人を起こさないと・・・」

悠太が動き出そうとしたその時、

「もう起きてますよ」

声と共に、肩を掴まれた。悠太は驚いて、思わず悲鳴を上げる。

義明と直人も驚いていた。だれも、その存在に気付かなかつたのだ。もしかすると、彼も能力者かもしれない。

「すぐに出発します。上官に怒られたくないですしね」

そう言つて、自衛隊隊員は車両へと向かう。強い爆風を浴びていたが、軍用車両はなんとか無事だった。

ふと、自衛隊隊員は足を止めた。

「・・・あの・・・あなたたちは・・・」

振り返りざまに言い、奇異の目で三人の能力者を見る。

悠太は焦りながらも、歯切れよく答えた。

「すみません・・・俺達は、死んだことにしてもらっても・・・いいですか？」

やるべきことがあるので、と悠太は言い足し、真っ直ぐに自衛隊員を見つめる。

自衛隊員はしばらく三人を見渡していたが、やがてニツコリと微笑む。

「頑張ってください」

目の前で、あれだけのが起こつたのだ。これで真実じゃないと思うのも、無理がありすぎる。隊員は、何かを悟つたのだろう。

悠太は素早く頭を下げた。つられて、両脇の二人も頭を下げる。

「あ、ありがとうございます!」

他の隊員の説得も終わり、軍用車両の群れは北富士駐屯地に向かって走り出した。隊員の説得は、他の隊員もあの光景を見ていただけに、簡単だったようだ。

三人はただ立ったまま、去っていく車両を見続けていた。

冷たい風が、三人を襲う。十二月だ。やはり、寒い。そろそろ雪が降ってもおかしくない。

「・・・なあ、小田、新海」

悠太の両脇にいる二人は、同時に悠太を見た。

「・・・俺・・・世界が終わるの・・・嫌だ」

直人は、小さく笑う。

「俺もだよ。そんなの、誰だって嫌に決まってる」

「俺も。小説まだ完結してねえし」

悠太は拳をグツと握り締めた。

「・・・俺は・・・まっさんの言うとおり、反逆者になる。四大元素の一つである俺なら・・・俺なら、法則の発動を止めることも出来ると思うんだ」

義明は悠太の肩に手を置いた。

「俺もそのつもりだ」

直人も悠太の肩に手を置く。

「・・・俺もだ。お前なら、出来る」

悠太は二人の顔を順番に見た。

「・・・サンキュ」

自然と、お礼の言葉が湧き上がる。当然だろう。

寒空の下に居るのにも関わらず、悠太の体は温かかった。

こうして反逆者達は、世界という名の強大な敵に、闘いを挑むのだった。

光が降り注いだあの日。世界の全ての歯車が、動き出したのだった。

始まり(後書き)

次回、ノンストップの第二部開始!

遠い日の歌（前書き）

第二部開始です

遠い日の歌

突如として発生した生命体、人類は、急速に発展し、世界を牛耳る存在へと上り詰めた。その力は、自らが生かされている宇宙の法則にまで 手を伸ばせるほどに。

そんな人類の叡智によって成された場所。

東京。

日本の中心であるこの都市は、丑三つ時特有の空気に覆われていた。重々しく、ヒツソリとしたあの空気。

深夜の街灯が織り成す、無機質で美しい色彩美の中を、

四つの影が疾走していた。

「クソッ！いつまで追ってくるんだアイツら！」

おたよしあき
小田義明は悪態をつきながら後ろを振り返る。

「やつらも能力者だ・・・当たり前だろうな」

はまだゆうた
新海直人は走っているにも関わらず、平然とした面持ちだ。

「もういいってアイツら！しつこいんだよ！」

はまだゆうた
濱田悠太の呼吸は荒い。

「ハマ、お前大丈夫か？」

のなかたかあき
野中高亮が心配そうに声を掛けるが、悠太は走ることに精一杯ら

しく、返事をしない。当然だ。いくら四大元素という存在でも、所

詮は人間。吹奏楽部だった悠太に、他の三人ほどの運動能力はない。

必死に走る四人の背後からは、怪物ではない 人間が追っ

ていた。

殺意を剥き出しにした人間達。その殺意の原因は、恐らく この

四人なのだろう。

「チクショー！なんで警察とかこねえんだよ！」

「深夜だしな」

そんな会話を繰り返している間にも、四人の背後からはゾンビのように人間達は追ってくる。総勢二十名ほどだろう。戦うには申し分ない程度の数だが、敵の戦力の判断もつかないし、第一こんな街中で戦ったら大事だ。警察どころか機動隊が来てしまう。

「サツさと振り切るぞ！」

高亮は呆れたように言う。

「どうやってだよ！」

悠太の空しい声が響いた。

ファカルティ

十二月の悪夢 小淵沢に起きた不可解な襲撃事件は、その町名から『小淵沢襲撃事件』と記録された。

多くの謎が残され、多大な被害が残ったこの事件は、『今世紀最大の惨劇』として、日本国民を恐怖のどん底へと叩き落した。突然、その町は一瞬にして壊滅したのだ。政府を叩こうにも、叩ききれない現実だった。

寸断された交通網、予兆のない虐殺行為、救出へ向かった自衛隊の予定よりも五時間遅れての帰還、精神不安定な状態で救出された生存者達。そして、謎の戦闘跡。現在の科学で証明できることは、一つもなかった。突如来日したアメリカの調査隊も頭を抱え、遂には捜査を断念。日本の国際世論は当然厳しいものとなった。

小淵沢町は直ちに閉鎖。自衛隊の管理下に置かれた厳重な警戒態勢のもと、復興もせずに現場保存されている。

そして国民を更に不安にさせたのが、政府の『情報非公開』。壊滅現場で発見された謎の『怪物』について、政府はその情報を全て明かさなかったのだ。

そしてもう一つ、捜査を迷走させていたのは、『インタビューの学生達』。地方局が行ったインタビュー映像に映った学生達が、生存者の中に居なかったのだ。自衛隊員は『死んでいた』と証言しているが、遺体は今現在発見されていない。

こうして、今世紀最大のミステリーは未だに、日本中を震撼させている。

しかし、これはまだ破壊の序章に過ぎない。

『光が降り注いだ日』から、世界は急激に変化し始めたのだ。

マーベリック。

日本語で、『異端児』という意味だ。

『光が降り注いだ日』以降、世界中で能力者の覚醒が始まった。世界の終末に向けて、各地で元素達が本当の姿を取り戻しているのだ。しかし、容器は人間。急激な覚醒に適応の出来なかった能力者たちは、次々と精神を崩壊させていった。精神が崩壊した能力者達は皆、破壊の衝動に駆られ快感を覚えるようになり、ついには破壊者となった。

それが、マーベリック。まさに『異端児』であろう。突如として現れたマーベリックは、世界中を震撼させた。世界各地で破壊行為を行い、遂には軍隊を出動させるほどにまで及んだ。国々は武装を余儀なくされた。日本も早急に武装に着手し、今では日本各地の首都圏に自衛隊が配備されている。

そして時は、『光が降り注いだ日』から一ヶ月経ち、一月。

水の能力者・濱田悠太。

雷の能力者・新海直人。

空気の能力者・小田義明。

影の能力者・野中高亮。

の四人は、新年の喜びを迎えぬまま故郷を離れ、東京を訪れた。目的は、終末を『知る者』に会い、聞くため。

しかし道中、四人は突如謎の集団に襲われた。

現在、四人は逃走中なのである。

やはり冬場ともなると、冷え切った空気が肺に突き刺さる。吐き出される白い息がまるで、硝煙のようだ。

「濱田あ！走れ！」

限界の近づいた悠太の背中を、直人はグイッと押す。この一ヶ月

間、濱田は徹底的に体を鍛えたのだが、やはり直人や義明には勝てない。直人や義明の三年もの体力トレーニングをわずか一ヶ月で超えるのには、差が大きすぎていた。

「そろそろ応戦を考えようか」

義明は息を弾ませながら高亮を見た。

「ああ、そうだな」

義明と高亮は、移動が自由自在に出来る方だ。義明は空を飛べるし、高亮は影の中を移動できる。夜の闇は、まさに高亮の主戦場でもある。

高亮は背後を振り返った。

この人数に太刀打ちできるほどの実力は持ち合わせているつもりだ。しかし、地の利が利いて、思わない展開になる可能性もある。闘いには、極端な意外性がつきまとうものだ。

「・・・しかし、小田・・・」

直人は心配げに言うが、義明は首を振る。

「一番必要なのは、濱田だ。濱田さえ守れば、それでいい」

「その通りだ。数百万人ほどの死亡では人類にさほど影響が出ないが、濱田一人・・・つまり元素の死亡は、世界にとって大きな損失だ」

悠太は鼻で笑った。

「随分舐められたものだな、俺も」

強がってはいるものの、息は荒い。

分岐点が現れた。一方が暗闇へ、一方は明るい街中へと続いている。

「右だ！」

直人はそう叫び、分岐点の右側の道を指差した。不気味な暗闇のある道だ。騒ぎを起こしたくなければ、ひとけ人気のないところへ行くのが当たり前だ。

しかしその選択が、四人を窮地へと叩き落したのだ。

四人は思わず足を止めた。四人は同時に目を見開き、目の前の光

景に愕然とする。冬にも関わらず吹き出した大量の汗が、地面へと

「……どうする」

目の前は壁で覆われていた。まるで四人を襲うかのように、雄々しく立ちほだかり、完全に行く手を阻んでいる。

悠太は舌打ちをした。

「……クソオ！」

「どうしようもない……こうなったら、戦うしかないだろう」

高亮は静かに言い放ち、背後を振り向いた。そして、目をゆっくりと細める。

総勢二十名ほどのマーベリックが、四人を取り囲んだ。それぞれが目をぎらつかせ、肉に飢えている。破壊に快感を感じてしまつた者の、最終形態だ。

悠太は息を整えながら、マーベリック達を見回した。

「じゃあ、新海、小田、野中。頼んだよ」

高亮は静かにならずき、指の骨を鳴らした。

「……任せる」

高亮が一步踏み出した。それに続いて、他の三人も一步踏み出す。襲い掛かる鋭い眼光の中で、四人は静かに身構えた。

月のない夜。クリスマスの日の晩も、そうだった。俺達はただ、あの漆黒の空を、見続けていたな。

白い息を吐きながら、政貴は上空を見上げる。長くボサボサの髪が目にかかるが、彼は気にしない。

年も越え、一月。今頃俺達は 受験シーズンだ。

それが今、こんな場所において、あの頃とは違う規模の重荷を背負っている。

「皮肉なもんだ……」

長い年月をかけて積んできたものが、一瞬にして崩壊した。あ

の日から。日常に特別な思いがあったわけではないが、やはり冷静に考えてみると、虚しさがこみ上げる。

どんなに金を溜めようと、己の欲望を満たそうと、知能を上げようと、世界が終わればそれは消える。なら、最後にこの手に残るのは何なのだろうか。

政貴は手の平をしばらく見つめていたが、やがて視線を下ろし、静かに振り返った。

残るのは、コイツらかもな。

目の前にいる二人の戦友は、若干頼りないが、それでも政貴の心の支えになっていた。

見届けようか。最後まで。

政貴は笑みを浮かべて目を閉じた。

大人数との戦闘は、彼らにとって初めてだった。大量の怪物達や、強大な能力者との戦いは経験しているが、大人数の能力者との戦いはしたことがない。おかげで、苦戦を強いられた。

なぎ払っても、なぎ払っても、マーベリックは更に襲い掛かってくる。怪物と違い、人間故の『優しさ』がある四人には、とどめを指すのは躊躇があった。

高亮は襲い掛かってくる拳を掴み、ひねり上げた。マーベリックが悲鳴を上げるが、高亮は構わず腕の関節を外し、更にわき腹へと追撃を加える。そして一瞬フラつくのを見計らい、影の形を変える。

ボキッ。

痛々しい音が響く中、マーベリックは力無く崩れ落ちた。

「はまだあ！」

義明は叫びながら、近くのマーベリックを蹴り飛ばした。悠太は義明の言葉を聞くなり、水の帯を出現させ、マーベリックの大群を襲った。

「クソッ！ やってもやっても湧いてきやがる！ なんてやつらだ！」

直人は悪態をつきながら電撃を放った。『光が降り注いだ日』から一ヶ月、少々気性が荒くなった様だ。当然といえば、当然だが。まるでゾンビだ。映画で見えるように、醜く、残酷だ。人間自体がイレギュラーだけに、起きる現象もイレギュラーだ。悠太や義明や直人、高亮はマーベリックにならなかつたが、それは奇跡といえるかもしれない。それこそ、悠太がマーベリックと化したら日本は崩壊する。

「止まれえ！」

頭上から、低く野太い声が響いた。四人を取り囲むマーベリックは戦いの手を止め、瞬時に引き下がった。

悠太は頭上を見上げた。

頭上には、男が一人、宙に浮いていた。暗くて顔がよく確認できないが、声からは相当の男前が連想できる。

「待っていたぞ」

短いようで、長い三日間の戦いが始まる。

マイバレード

「探したぞ・・・元素よ」

悠太はたじろいだ。目の前の男が、喜びながら言っているのだ。

「い・・・意味わかんねえ！なんなんだよ、アンタ！」

男は笑みを浮かべ、地面に降り立った。違う、降り立ったのではない、降ろされたのだ。

男は、何者かに担^{かつ}がれていたのだ。身長を優に二メートルは超えるであろう、その巨体に。

「もういいぞブロック、下がれ」

男は背後の大男に向かつて言うと、悠太の方に向きなおった。

やっと、悠太は男の顔を確認した。ホリの深い、凜々しい顔をした男だ。その眼光は鋭く、暗闇の中でも、彼の目の鋭さが際立った。

「探したよ。この一ヶ月、世界中を探し回ったからな。・・・それでやっと見つけたと思えば、結局居たのは日本だ。しかも、こんな幼い子供と来た」

「い・・・いきなりなんだよ！お前！何者だ！」

俺？と闇は鼻で笑い、ポケットに手を入れた。

「世界に必要とされないもの・・・しかし、必然的に現れてしまうもの・・・全てと対極の関係・・・」

男は空を見上げた。

「俺は、闇だ」

そう言って、悠太を再び見つめる。

「お前を探していた。俺は、お前が必要なんだ。計画の実行のために」

「・・・計画の実行？コイツらもその一コマつてののか？」

悠太は四人を取り囲むマーベリックを指差す。

「彼らは、同志だ。共に世界を変えようと思う者達だ」

「意味わかんねえ！計画って、なんのことだよ！何をする気だよ！」
男は拳をゆつくりと突き出した。

「世界を変えることだ。そのために、四大の元素が必要になる」

四大の元素とは、悠太や政貴などの、世界を創造した元素のことだ。悠太は水の元素を持ち、政貴は火の元素を持っている。

「・・・俺を利用して、何をするつもりだ」

「一仕事してもらっただけだ。それだけで、世界は変わる」

悠太は首を振った。余りにも不気味な口調に、思わず体が震える。
「断る。頼むんだったら、もっと上手く頼むんだっとな・・・」

そう言い放った瞬間だった。

マーベリック達が一斉に、身構えた。再び殺気を放ちだし、今にも悠太に襲い掛かりそうだ。目の前にいるのがどんな敵でも、マーベリックは快楽を求めて飛び掛るだろう。目の前にいるのが、四大元素であろうと。

「・・・この男以外は、どうしたっていい。焼くなり、煮るなり、好きにしろ」

男は片手を挙げた。そして、体中の空気を一気に吸い込む。

「・・・やれ！」

マーベリック達が雄たけびを上げ、一斉に四人に向かって飛び掛った。

四人は歯を喰いしぼり、来るべき地獄を待ち受けた。

その瞬間、

「待ちなさい！」

女性の怒号と共に、直径一メートルほどの光の球が上空へと打ち上げられた。太陽のように眩いそれは、一瞬にして、その場の全ての者を平等に照らす。

その眩い光のシャワーの中で、悠太は何者かに片腕を掴まれた。

小さな手の平だ。今にも砕けそうな、か弱い小さな手。

そして、鼻腔を突くフローラルな香り。そして、カナリヤのように美しく高い声。

「目を伏せなさい」

一瞬状況が把握出来なかったが、悠太は言われるがままに目を伏せた。周辺の新海、小田、野中もその女性の声を聞き、目を伏せる。女性が片手を振り上げ、何かを叫んだ。悠太はその声を聞き、より一層、目を固く閉じる。

次の瞬間、上空へ打ち上げられた光の球は、眩すぎるほどの光を放ちながら爆発した。その爆発はまるで、『光が降り注いだ日』を彷彿させるほどのものだった。

「コツチよ！」

グイツと手を強い力で引つ張られ、悠太は目を開けた。さきほどまでの昼のような明るさはそこにはなく、通常の漆黒の闇が広がっている。

声の方に目を向けると、そこには二十代後半であろう若い女性が居た。長い髪を後ろで縛り、シャツにジーンズという、簡単なファッションをしている。

「早くして！」

女性に引つ張られ、悠太は取り囲むマーベリックの大群から抜け出した。意外なほどにすんなりと。

マーベリック達は、目を押さえてうずくまっていた。さきほどの光だ。あれが、マーベリック達の目を襲った。覚醒してから、極限まで高まった彼らの『目』を。そしてその光は、あの男でさえも襲っていたのだ。

大群を抜けた悠太に続いて、直人、義明、高亮も続いた。

「コイツらを止められる時間は、短いんだろ？」

走り出した女性の背中に、義明は言った。

「ええ・・・そうね。もって十五秒、つとどこかしら」

幾らあれほどの強い光量でも、人間を足止め出来るのは数秒ほど

だ。特殊部隊が使う閃光弾も、光だけではなく煙も噴射される。

走り出した悠太の背中を義明は一瞥すると、立ち止まった。

「新海、野中・・・後から追いつく」

直人と高亮の背中に語りかけると、直人と高亮は無言でうなずいた。こうなることは分かっていたのだろう。敵の足止めは、比較的移動速度が速い義明が適材だった。

そして、その足止めにはリスクが伴う。

「小田、死ぬなよ」

「当たり前だ。すぐに飛んでいくからさ」

直人と高亮は、悠太の背中を追うように走り出した。二人のスピードはグングン上がって行き、すぐに悠太と女性に追いついた。

義明は拳を手の平で包み込み、深呼吸した。目の前の獰猛な異端児達は、光のシヨックから立ち直り始めていた。

「オダア！」

背後から、悲鳴に近い悠太の声が聞こえた。振り返るな、と義明は自分に言い聞かせ、目を細めた。

悠太は抗ったが、直人と高亮の強い力によって抑えられた。どんなに抗っても、義明の背中ではドンドン小さくなっていく。成す術もないまま、悠太はただ義明の名を呼ぶだけだった。

はまだゆった
濱田悠太の身体を最優先に。

それが旅路で直人と義明、高亮によって交わされたルールだった。結局、鍵となるのは悠太なのだ。悠太の損失は、世界を救うわずかな可能性を失うのと同様だった。

「大丈夫だ。小田は来る。どうせアイツは飛べんだから」

直人は悠太の肩に手を置いた。

「何言ってるんだよ！あんな・・・あんな大群で・・・」

「ぼやく悠太を、高亮が一喝した。」

「大丈夫だって、言ってるだろ。小田の力を・・・」

「それでも、アイツを裏切ったことにならないだろ！」

裏切った。

その言葉が、直人の心に突き刺さる。濱田の身体を最優先に、というルールは悠太には知られていないものの、やはり何も知らない悠太からはそう思えるのだろうか。全ては世界のため。キレイごとだ。

「クソツ・・・あの時力を解放」

ぼやく悠太を、高亮が一喝した。

「黙れ！お前は、自分がどんな存在か知らねえのか！小田がどんな思いで足止め役を引き受けたのか、それを考える！」

「なんでそんな・・・」

「お前は、四大元素の一つなんだ！お前の損失は、日本全人口一億の損失より大きい！世界を救いたいんだろっが！それなら、ちっぽけなただの元素など、捨てちまえ！」

悠太は歯を喰いしばった。怒りが沸々と体中を駆け巡るが、それはすぐに泡となって消える。今ここで怒りに身を任せても、何も変わらない。高亮の言うことは正論であり、狂論でもあった。

「その通りよ。今のあなたの使命は、全てを知ること。そして私の使命は、あなたに知識を授けること」

女性は静かに言い放った。さきほどから走り続けているにも関わらず、女性は全く息切れしていない。走行時のフォームの美しさから見て、彼女は陸上部だった可能性もある。

女性は大きな瞳で悠太を捉えた。

「もう少しよ。そこに行けば、安全だから」

東京のとある山。新海政貴、川口翔馬、中込宏太は空を見上げながら、白い息を吐いていた。寒さによる白い息もあったが、燃焼に

よって発生した煙もあつた。

「ブハツ！息を吹きかけんな！気持ち悪い！」

宏太はわめきながら両手を振り、襲い掛かる煙を分散させた。

「うるしええ！吸わせるや！」

「集団行動考えろよ！こつちはタバコのせいで色々集中できねんだよ！」

宏太は咳き込んだ。

翔馬はタバコを地面に押し当て、グリグリと動かして火を消した。

「お前集中つて、ゲームじゃねえか！いい加減全クリしろよ！ピーセウオーカー！」

「やり込みが肝心なんだよ！このゲームは！火縄銃を手に入れるの！」

「うるせえよ！自販機の電気借りて充電する方が迷惑だろうが！」

「うるせえ！タバコの方が迷惑だよお！」

「お前の見た目の方が」

ついに二人は取っ組み合った。中学三年生の取っ組み合いともなると、微笑ましく見えないほど激しい。

しかし、そんな二人の襟首を掴んだ者がいた。

「やめろ！」

新海政貴である。

政貴は二人を強力で引き離し、二人とも投げ飛ばした。

「川口！そもそもタバコは未成年が吸うものじゃねえだろ！そして宏太！ゲームをするのはいいが、自販機の電源を奪うな！そしてヒゲをそれ！」

すいませんでした、と翔馬と宏太は同時に頭を下げた。

宏太は若干、腑ふに落ちないようだ。

「ヒゲはワイルドなのに……」

「そこ気にしてんのかよ！つてかお前がヒゲを剃らなかつたらただのキウイフルーツだよ！鏡か水面見て来い！」

翔馬はタバコの入った箱を握り潰しながらツッコんだ。

相変わらず、気の抜けた野郎共だ。

政貴は小さな微笑を浮かべながら、翔馬と宏太を見た。若干見えて暑苦しいが、良き仲間である。

世界の終末を見届ける旅をしてから、もう一ヶ月である。そのわずかな一ヶ月という間に世界は大きく変化し、着実に終末へと向かっていっていた。惨いものを目の前で見せられたことも幾度となくあった。

「・・・さて、次はどこに行こうかな」

政貴はそう呟き、見渡す限りの木々を見た。雪が積もり真っ白にデコレーションされた木々は、街からの灯りによって煌いていた。

さて、次は何処で終末を待つかな？

常識人が聞いたら腰を抜かすような言葉だ。しかし政貴はそれを簡単に言うことが出来る。何せ、彼は世界に従っているのだから。

「まっさん、次はスカイウッド見に行こうぜ！」

「いいな。タワーよりでかいんだろうな・・・」

政貴は小さく笑い、上空を見上げた。

広い空は、微動だにせず三人を見下ろしている。

そしてその広い空に、一筋の影が通り抜けた。

静寂は瞬時に破られ、その場は血に染まることとなった。

ニキ口は走っただろうか。悠太は息も絶え絶えになりながらコンクリートの地面に座り込んだ。冷気が悠太の火照った体を襲う。

「・・・よく走ったわね」

女性の息は全く荒れていなかった。それが逆に奇怪でならなく、悠太は恐怖さえ覚えた。

「懐かしいな・・・」

高亮が息を整えながら言った。そして、懐かしそうに建物を見渡す。

「そうね。何年ぶりかしらね？」

悠太は会話する二人を見ながら立ち上がり、咳き込んだ。冷え切った空気が悠太の肺を刺激するからだ。

しばらくして、悠太は息を整えた。

「・・・なあ、小田は？」

「そういえば遅いな・・・」

直人は辺りを見回して義明を探すが、それらしいものはない。

女性もそれにつられて辺りを見回すが、やがてため息をついた。

「まあ、当然といえば、当然ね」

余りにも冷徹な一言だった。

そしてその一言が、悠太を激怒させた。

「よく抜けぬけとそんなことが言え」

「当然だろうが」

悠太の背後で、高亮が言い放った。トーンがいつもより低い。

「あの敵の中で戦って、仮に逃げ出したとして、逃げ切れるとでも思っているのか？」

「な 野中」

「それに、陽も居た。あれじゃあ、勝てるはずはないわ」

女性も野中の援護をする。

悠太は息を震わせながら、今まで走ってきた道を振り返った。

「無駄よ。もう、遅い」

女性はさらに追撃する。悠太は思わず歯を喰いしぼり、拳を固く握り締めた。

月が出た。今晚は、満月だ。

マイバラード（後書き）

どうなるんでしょうか

終末はまるで汽車のように

今にも崩れ落ちそうな悠太を見て、女性は微笑みを浮かべた。天使のような笑みだが、直人にとってそれは、悪魔の笑みにしか見えなかった。

「大丈夫。安心しなさい」

その言葉が悠太の耳に届いた瞬間、悠太の顔が歪んだ。

「安心なんて出来るかよ！小田は」

「彼は死なない。いや、死ねないのよ」

女性は冷たく言った。その澄んだ瞳は、全てを見透かす光のように、悠太を捉える。

「・・・どういうことだよ」

悠太はうめき声と共に言った。声帯が今にも破壊されそうだ。

「あの男の狙いは、あなた。恐らくその小田君とやらを人質に捕るはずよ」

「・・・大体そんなことだろうと思ったよ」

直人が小さく呟いた。いくら能のないマーベリックとはいえ、目的が濱田なのだから、快樂を得る殺しより目的の達成を選ぶだろう。「だから、安心しなさい。死にはしないのよ・・・その代わり、地獄のような苦痛を受けるけどね。あの男は極度のサディズム。他人の苦しみを何よりも喜ぶ」

人質なのだから、それは当たり前だった。恐らく義明は死を超える苦痛を与えられるだろう。

「死ぬことよりも辛い拷問・・・彼に耐えられるかしら。舌を噛み切って死ぬことだって出来る。追い詰められた人間にとって、それは容易なこと。あなたが小田君の仲間なら、どっちが良いと考えるの？死を最上級と考えるの？それとも、『死を超える拷問』を最上級と考えるの？」

それはまるで、医者が親族に対して言っているかのようだった。

癌が末期になった時、あなたはどうしますか？このまま薬を投与して、延命させますか？それとも、薬の服用をやめて、残りの短い人生を過ごさせますか？

答えに親族は悩むだろう。医者も患者の治療を選択する権利がない。どちらにしろ、患者は死ぬ。問題は、その最期の過ごし方だ。死ぬまで病院のベッドの上、薬の副作用も死ぬまで受け続け、それでも残りの余命を少しでも伸ばすか。それとも、閉鎖されないアウトサイドの世界へ飛び出して、残りの短い余命を家族や友人と過ごすか。

もちろん、悠太には選択できない。

「・・・こうなったのは、あなたのせいじゃない。あの男のせいよ。あの男は、最初からあなたが手に入るとは思っていない。これは、あなたを手に入れるための前段階よ」

「前段階・・・」

「彼は強い。私はそう思う。悠太の身代わりになる、って申し出た時のあの顔は、もう覚悟をしていた」

そして、それを知っていた直人や高亮の表情も、覚悟をしていた。

「あなたは私から真実を聞かなければならない。そのために、小田君は身代わりになったのだから」

さあ、と女性は手招きをする。

「着いておいで」

女性の家は、ビルの三階に存在していた。一階と二階にはそれぞれ金融子会社が存在しており、正に裏社会の片隅のようだ。しかし、ここなら誰からも目立つことなく生活することができるだろう。何せ、女性はかなりの美人だった。

「私の名前は、高崎明^{たかさきあかり}。『光』の能力者、そして、あなた達に『教授する』役目がある」

白を基調とした簡素なりビングに招待され、来訪した能力者達は木製のイスに座らされた。

そして今、明は自己紹介をしながら紅茶を来訪者の前に差し出した。「ウエルガモットの紅茶よ。熱いから気をつけて」

明の出した紅茶のカップを、悠太はしげしげと見つめた。

たかさぎあかり高崎明。三十二歳。紅茶好きの紅茶コレクターで、普段はゴース

トライターで生計を立てている。かなりの美人であるが、本人は男性に興味がないらしく、『私の恋人は光』と豪語する。とにかく浮世離れたような感覚を持っており、まるで妖精のようだ。

「・・・悪いが、俺は飲む気になれない」

直人は紅茶のカップを遠ざけた。そして、悠太に目で合図をする。「・・・俺も。怪しすぎるよ、アンタ」

女性は目を瞬かせた。そのはずである。先ほどまで得体の知れない者達と死闘を繰り広げたのだ。目の前にいるこの高崎明と名乗る女性も、その一味であったとするならば、この紅茶でさえも信用できない。

「まあ・・・そうなるわよね・・・いいわ。身元なら、この子が保証してくれる」

明は高亮に視線を移した。高亮は習性なのか、静かにうなづく。

「ああ・・・俺が保障する。この人は俺達の敵ではない・・・味方でもないけど」

「その通り。私はこの世のことに興味はないの。どうせイレギュラーな存在だし・・・楽しむなら、来世を楽しみにしておくわ」

高亮は紅茶のカップを再び直人に寄せた。直人は思わず、顔をしかめて高亮を見る。

「飲めよ。何にも悪いものは入ってない」

悠太が直人より早くカップを掴んだ。素早くカップを掴み、口元に引き寄せる。

味に問題はない。

「・・・で？教えてくださいよ」

悠太は腕を組みながら呟いた。

「何を？」

明が悪戯な笑みを浮かべる。

「あなたが知っている全てを」

悠太もつられて微笑んだ。

マグロの刺身に、生クリームを付けて食べることはない。食べ物には、合うものと合わないものがある。

政貴達が刺身ならば、それはまさに、生クリームだった。

「何のようだ・・・こんなところで」

政貴は立ち上がり、目の前の謎の軍団に向かって大声で言った。目の前には、三十人ほどの人間 いや、マーベリックだ。目の輝きが、明らかに理性を持っている人間のものではない。そして、明らかに別のオーラを放っている男が一人。恐らくそいつがリーダーだ。

「用？・・・まあ、用はあるな。しかし・・・お前だけだ」

男の顔は驚くほど白かった。まるで色素がない。

「何だ・・・お前」

男は笑みを浮かべた。顔は白い割りに、歯は黄色くクスマミがかかっている。

「俺の名は・・・ルナー。『氷』の能力者だ」

「じゃあ、聞く。ルナー、何のようだ？」

ルナーはただ笑みを浮かべただけだった。まるで氷の微笑だ。

ルナーは空を見上げ、笑みを浮かべた。

「お前に用がある。まあ、すぐにお前を手に入れることは・・・難しそうだがな。向こうも苦勞してるはずだ」

「向こう？なんのことだ？」

「俺の仲間さ。まあ、お前には関係ないことだ」

そう言っつて、ルナーは片手を挙げる。

するとその瞬間、背後のマーベリック達が一斉に動き出した。

「さあ・・・反撃してみるんだな！」

政貴の瞳に、獰猛なるマーベリック達の姿が映った。

明がキャンドルに火を付けた。良い香りがするのは、アロマキャンドルだからだろう。

「・・・まず、私と高亮の関係について、教えるわね。私と高亮は、『元素の親子関係』なの。『光』から生まれるのが、『影』だもの。天は私達親子に、ある使命を与えた」

直人は眉を寄せた。

「野中は導き、あなたは『教え与える』？」

「そう、理由は分からない。でも、私達親子はそのため・・・生かされている」

悠太率いる『抵抗派』をここまで連れて来たのが、高亮だ。高亮は小淵沢脱出後、先頭に立って無知の三人を引率した。

高亮は紅茶をすすりながら、目を細めた。

「・・・懐かしい。確か、出会いは東京だったな。俺が電気店に入る時、アンタが炊飯器を買っていた」

「あら、珍しく懐かしい話をするのね」

「目が合った瞬間、アンタがイソイソと近寄ってきた。その当時は驚いた・・・美人だったし」

「お世辞？フフ、嬉しいわ。でも、あの時近寄ったのは、体になんか・・・電撃が走ったからよ」

「俺もそうだった」

「明も紅茶をすすった。」

「・・・その電撃で、私はいつの間にか動いていた。恐らく、私達はそういう運命だったのね」

「やめろ。まるで恋人同士だ」

「照れちゃだめよ」

「照れてねえよ！」

まるで本物の親子の会話だ。悠太は思わず笑みを浮かべ、直人も引きつつっていた表情を元に戻した。

「さて・・・話を元に戻しましょうか」

明は紅茶のカップを机に置いた。

「高亮に教えていなかった・・・真実の更なる真実・・・それを、あなたに教える」

真実の更なる真実。

野中から教えられた真実だけで、もう悠太は腹が一杯だった。もうこれ以上、自分のいる世界の視点を変えたくない。それが、悠太の本当の気持ちだった。

「・・・止めないから、手短かに頼む」

悠太は紅茶を飲み干し、机に勢いよく置いた。今に割りそうな勢いだ。

明はため息をつく、悠太の目を覗き込んだ。黒く輝く瞳が、まるで悠太の全てを見透かそうとするかのように、悠太の中に入り込んでいく。

まるでそれは、光だ。

「終末はもう始まっている。世界中で元素達が真の姿に戻され、次々と覚醒していつている。

マーベリックの存在は、世さえも予期していなかった事態。でも、そのマーベリックの存在も、終末への手助けを創めている。

宇宙年表から見れば、終末はもう一瞬後よ。次期に、世界は怪物の爆発的な出現で終わる。

ええ。そうよ。爆発的な出現。宇宙が誕生する時に行われたあのビック・バンが、今度は地球の大地の上で行われる。もう一つの世界と、この世界が・・・一つになる。

怪物の世界よ。終末のために用意されたもう一つの世界。天変地異を起こせないと知った世は、怪物の世界も創造したの・・・その世界に時間は存在しない・・・ただ、血と破壊の快楽に飢えた怪物がのさばる世界。ええ、そう。生命の爆発よ。怪物の世界と、この世界が結合すれば、起きるのは『無』という状態だけよ。

今、確実にビック・バンの用意は進んでいる。あなたは見たでしょうねあの『降り注ぐ光』をあれが、ビック・バンの種のようなもの。

私はそのビック・バンを、『アナザー』と呼んでいる。
そう、アナザーはあの場所・・・小淵沢で行われる。

見積もって二十日。あと二十日で、アナザーは行われる」

あと二十日。

その言葉を聞いた時、悠太は愕然とした。思わず脱力して首をもたげる。

「あと・・・あと二十日で・・・」

悠太は直人に視線を移した。

「世界が救えるか？」

直人はうめき声を上げた。

策が浮かばない。決められたストーリーは、変えられないのかもしれない。

無に還る。

もし無に還ったら、どうなるのだろうか。

悠太は絶望に頭を下げながら、うるむ右目をこすった。

虹

政貴の左肩を、氷のツララがかすめる。政貴は身をひるがえ翻して炎を身にまとうと、襲い掛かる無数のツララを防いだ。

「何が目的だ！答える！」

「・・・お前が俺たちの仲間になることだ」

大量のツララと、巨大な炎が入り乱れた。その光景はまさにハリウッド映画のCGを超えるものであり、幻想的だった。

政貴は地面に降り立つと、前を見たまま叫んだ。

「川口！大丈夫か！」

翔馬は現在、大量のマーベリックと交戦中である。ランダムに聞こえてくる激しい戦闘音から、苦戦であることが分かる。

「大丈夫だ！ただ・・・」

政貴は振り返った。

「なんだ！」

その瞬間、耳をつんざくような轟音が響いた。

高亮と明の紅茶は二杯目だ。しかし、悠太と直人の紅茶は、減ることを知らない。

「・・・あの男はいつたいなんなんだ？」

まだ更なる真実を教えられたシヨックが和らがないまま、悠太は別の質問をした。それは苦難ともいえるものだった。

「あの男の名は、鬼塚陽おにづかひょう。マーベリックの集い、『見放された愛国者達』のリーダー。私と同一年の、冷酷非道な男よ・・・」

「あいつが？・・・何の能力を・・・」

「闇。まさに私と対極の元素。全てを照らす私と違って、アイツは全てを不明確にする」

明はカップを覗き込んだ。

「・・・鬼塚陽の目的は、マーベリックを利用した世界の統治・・・まあ、平たく言えば世界を支配しようとしているのよ」

直人はため息をついた。

「かなりの大人が・・・なんて考えを。くだらなすぎる」

「ええ。くだらないわ。でも、陽はそのくだらなさを、自らの終着点と定めたの。マーベリックと自分の存在を利用すれば、世界を支配できる。そう思ったの」

突然一般人が多大な力を手に入れたら、どうなるのか？それは人それぞれのはずである。怯えて引きこもるか、世界の平和に利用するか。それとも、心の悪を開放するか。

イレギュラーな存在になり、イレギュラーな事態が起きれば、事態は様々なものに变化する。

「でも、陽はマーベリックじゃない。彼は、意思を持っている」

「意思を持つて・・・世界の統治を？」

「ええ。かなりの危険思想だわ。でも、それが容易に出来てしまうことは事実」

直人のメガネのレンズが、キラリと光る。

「・・・それで、陽 いや、『見放された愛国者達』は何をする気なんだ？」

「分かるはずよ。世界の統治を理想として掲げたのに、今、世界は終末へと向かっている。だから、まずは終末を防がなければならぬ」

「・・・そのために、悠太の力が？」

悠太の持つ能力 元素『水』は、この世の創造を成し遂げた四大元素の一つである。

明は静かにうなずいた。

「ええ。恐らく陽の狙いは四大元素の集結。そして、終末の阻止よ。悠太は静かに笑った。

「それは・・・無理だな。政貴がいる」

新海政貴は、世界の終末を受け入れ、世界に従うと決めた『保守

派』である。その新海政貴が、陽の言う事を容易く受け入れる訳がない。いや、受け入れないだろう。確実に。」

「いえ。簡単よ。肝心なのは力・・・」

「四大元素の力を、『闇』が超えるのか？」

「ええ。あなた達は覚醒したばかり。まだ、完璧に力を解放していない。そうね・・・^{たと}喻えるなら、機能が多すぎるパソコンね。力があるために、起動が遅い」

悠太は机を叩いた。

「じゃあ、どうしたらいいんだ！」

義明が捕らえられ、四大元素はねじ伏せられる可能性があり・・・悠太達の進退は八方ふさがりだった。

そんな状況下であるのも関わらず、明は笑っていた。クスミのないうキレイな歯を煌かせながら、紅茶を飲み干し、残って底に溜まる葉を覗き込む。悠太と直人は、ただただ不信感を感じるしかなかった。

「面白いわね・・・人間って。言ってみれば、陽はあなたの仲間なのに・・・」

「仲間なんかじゃ」

「言い方が悪かったわね。あなた達と陽は、同志よ」

直人がうなりを上げた。悠太も力なくため息をつく。

「同志・・・」

どうしよう、と言っている場合はない。

世界を守る、終末を阻止するという志においては、悠太と陽は同じ『抵抗派』としてカテゴライズされる。違いといえば、危険思想の持ち主か、ただの純粋な心か ということだけだ。

「面白いわね・・・あなたと同志のはずなのに、あなたは陽に敵意を抱いた・・・」

「俺は悪に染まるつもりはない！」

悠太は叫び、机を勢いよく叩いた。紅茶のカップが一瞬間に浮き、液体を飛び散らす。

女性は、結果論を言っている。結果的に世界を救おうという気持ちが一緒なのに、何故あなたは敵意を表すの？ そういうことだ。しかし、悠太は方法論を見ていた。どんなに目指すものが一緒だとしても、その目標の達成に使う手段は気にくわない。

二人の着眼点の違いだ。

「・・・悪に染まるつもりはない・・・か」

高亮が静かに笑い出した。ようやく口を開いたと思えば、これである。

「自覚しろ・・・濱田達がやろうとしているのは、立派な反逆だ。罪だ。暴虐だ・・・お前は、この世から見れば、立派な悪なんだよ。何処を見ているんだ？」

「それはこの世の視点だ！俺は・・・人間の視点から見ている」

「あくまでお前はそこに居続ける気か・・・神がお嘆きになるだろうな」

高亮はそう言い放つと、席を立ててそそくさと何処かへ行ってしまった。

明はそんな高亮の後ろ姿一瞥し、めんどくさそうに首を振った。

「もう今日は遅いわ・・・寝なさい。ベッド貸すから」

「小田の救出の方が先」

わめく悠太の口を、明は押さえた。

「すぐに行動しても、小田君が助かるとでも思ってるの？ガムシヤラに動くのは危険だわ・・・ちゃんと計画をしてから、動くのよ」

「何が計画的だよ！今にも」

「早く寝なさい！」

光の球が、悠太に投げつけられた。

悠太はその日、失意の念に襲われながら、床に就いた。

水滴が垂れる音、扉がキシむ音、重苦しい足音、笑い声、衝撃音、発生音、そして、自分の悲痛な叫び。

義明は叫び声を共に目を覚ました。体中が激痛に襲われる。

義明は上半身裸体で、イスにくくり付けられていた。縄ではなく、謎の黒い物体で。そして義明とイスは、白に覆われた無機質な閉鎖空間の中に置かれている。狭い小部屋だ。義明の勉強部屋の方が、まだ広い気がする。

「起きたか」

顔を上げると、あの男が立っていた。男は笑みを浮かべたまま、首を回してコキコキと音を鳴らす。

「起きたんじゃねえよ、起こされたんだ・・・カスが」

男の手の平から、漆黒の球体が発生した。

「へらず口を叩く余裕が・・・よくお前にあるな」

「どうも。こつ見えてしぶといんだ」

球体が義明の体に押しつけられた。その焼けるような痛みに、義明は悲鳴を上げる。

男の口が、義明の耳元に寄せられる。

「面白い・・・なら、いたぶりがいがあるというものだ」

義明は再び叫び声を上げた。

閉鎖された空間に、叫び声と笑い声だけが響く。

「お前はただの生贄のようなものだ。目的が来るまで、お前はただ、使い捨てのように雑に扱われる・・・お前らのリーダーならやりそうなことだ」

「うるせえ！・・・よく言っぜ」

「悲しいものだな。お前は、簡単に差し出されるんだ。重要な者のために、簡単にその命は、弄ばれる」

「そんなじゃない！」

そうは叫ぶが、段々義明の心は見えない恐怖に襲われた。

これは相手の心理作戦だ。そう考えていても、やはり心は揺らぐ。

濱田・・・お前は、助けに来てくれるのか？

義明は心の中で、力なく呟いた。

「十分いたぶってやる・・・死なない程度にな。死を超える苦痛を、味あわせてやる」

そして男は、何度も義明を謎の球体で打ち付けた。激しく、何度も、義明が泣き叫ぼうが、男は絶え間なく打ち続けた。

やがて気が済んだのか、男は打ち付ける手を止めた。

「・・・これ以上やったら、死ぬかもな」

そう言い放ち、義明の顔を蹴り飛ばす。

義明は声も出なかった。顔はあまり傷つけられていないものの、体中はアザだらけだ。もう、痛覚も残っていないかもしれない。

「アンノ、面倒みとけ」

男は振り返りながら言うと、閉鎖空間の扉が放たれた。

男とすれ違いざまに入ってきたのは、十二、三歳ほどの幼い子供だった。

「アンノ、飯を与えてやれ。そこらへんのカビの生えたようなパンで十分だ」

アンノと呼ばれる小さな男の子は、静かにうなずき、ポケットからパンを取り出した。小さく、食べかけのようなパンだ。恐らく、無味。

「おい、アンノ・・・それは・・・」

「・・・だって、可愛そうなんですもん・・・だから・・・」
「好きにする」

男は片手で空を払い、部屋から出て行った。

アンノは小さいパンを小さい手で握り締め、義明の口元に近づけた。

「これ・・・僕の食べかけですけど・・・良かったら、どうぞ・・・」

「
義明の視界はボヤけていたが、目の前にいるのは子供な事は分かった。」

「・・・アンノ・・・くん？」

どうみても日本人だ。それなのに、アンノとは変わった名前だ。ハーフなのか。

「・・・お兄さん、大丈夫ですか？」

義明は力なく微笑んだ。

「これを見て、大丈夫だと・・・思う？」

「・・・ごめんなさい」

いいよ、君は謝らなくて。

義明の声に生気はこもってなかった。

それを見て心配に思ったのか、アンノはパンを小さくちぎり始めた。

「・・・口、開けてください」

空腹が最高潮に達し、疲労と絶望が頂点に達していた義明は、口を開かないはずがなかった。

「あいよ・・・」

義明が口を開くと、アンノは次々とパンを口の中に放り込んでいった。小さい手が小さくちぎったパンは、考えられないほど小さい。

パンを無くなるまで食べるのには、時間がかかった。

「アンノくん・・・だっけ？なんでこんなところに、君みたいな子が？」

アンノは義明と目を合わせた。

「・・・あんまり言っちゃいけないかもしれないですけど・・・陽さんがいないので、言います」

アンノは声を潜めた。

「僕、捨て子だったんです。それを、陽さんが拾ってくれた・・・僕は、あの人に恩があるんです・・・アンノ、って名前は、陽さんが付けてくれました。アンノーンから来ているらしいです」

アンノーン 未知、という意味だ。略して、アンノ。

「そうか・・・じゃあ、この縄は、解いてくれなさそうだね」

義明が縄を見ながら言った。 正確には、縄ではない。何かのエネルギーの帯だ。

「そ、それは僕にも外せません。陽さんの能力で創られたものなので・・・」

能力で空間に発生させたものをここまで持続させるのは、至難の業である。それを簡単にやっている陽は、かなりの実力者だ。

「・・・君、可愛いな・・・」

「え？・・・何を言ってるんですか」

義明は笑みを浮かべてため息をついた。

もう、まぶたが重い。視界のボヤけも、最大だ。何も見えない。

脳が、もうだめだ、と義明自身を諭している。

「俺の弟も・・・君と同じくらい・・・歳だった・・・んだ・・・」

もう、息も絶え絶えである。

それを察したのか、アンノは慌てながら言い出す。

「えっと、飲み物取って来ます！待っててください！」

アンノは部屋を飛び出していった。義明はその後姿を見ながら、再び小さく微笑む。

くそっ、背中が弟に見える。

義明はゆっくりと目を閉じた。

「くそおおおお！」

川口は地面を拳で殴りつけた。その叫び声は、どこまでも響き渡る。

政貴もそんな川口の背中を見て、ため息を漏らした。

ここまで暴れても、阻止は出来ない。政貴の破壊を、アイスの破壊は超えたのだ。

辺り一面火の海だ。政貴は其中で、雄たけびを上げた。

悲痛な叫びを。

地面に突き刺さる氷のツララが、政貴の炎によってプリズム現象を起こし、綺麗に煌く。

皮肉にも虹色の光が、地面に表されたのだった。

旅立ちの日に

爆発音がして、悠太は目を覚ました。かけていた羽毛布団を払い捨て、そのまま立ち上がり、状況を確認する。

「濱田、気をつける！」

隣で直人も立ち上がり、キョロキョロと辺りを見回していた。

謎の爆発音だった。何か遠くで爆発したような音。

「新海・・・外だよ、多分」

悠太は窓の外に目を向けた。窓の外に映るビル街の中心から、炎が上がっている。

「もう知ってる」

「行くぞ！」

走り出した悠太の右腕を、直人はつかんだ。

「駄目だ！あれは、罠だ！お前をおびき寄せてるんだよ！」

「上等だ！あいつらの所には、次期に行くつもりだったからな！」

悠太は直人の手を振り払い、一目散に駆け出した。

「待てよ！・・・くそっ」

直人も追うように走り出した。

ビル街の中心の大手電気店からは、ドス黒い煙が出ていた。逃げ惑う人々は半狂乱の状態で、我先にと走っている。

「マーベリックだ！」

何処かで男性の悲鳴が聞こえた。この惨状から見ると、覚醒したマーベリックであることは確かだった。そして、罠である可能性も否定できない。

「新海、行くぞ！」

「もちろんだ」

不気味に立ち込める黒煙の中に、二人は身を投じた。

視界が一瞬にして失われる。悠太はそれを能力を使ってどうにか防ぐが、煙の量が多すぎて間に合わない。

「辺りに意識を集中しろ。何処から襲ってくるか分からない」
新海の声が、背後でした。どうやら悠太と直人は背中合わせになって、三百六十度どの襲撃でも対応できるようになっているようだ。これほどの黒煙の中だ。生存者は居ないかもしれない。第一、爆発の原因も分かっていない。

その時、ノドを潰したような叫びが、悠太の耳を襲った。

「濱田！気を」

直人の声が一瞬にしてかき消された。悠太は目を見開いて振り返り、直人を手探りで探した。

「新海！」

そう叫んでも返事は来ず、悠太はますます不安になった。

一瞬だ。直人は、連れ去られたのか？それとも自ら何処が行ったのか？それさえも分からない。

悠太が思わず舌打ちをした瞬間、黒煙の中から突然、拳が襲ってきた。大きな拳だ。

拳は悠太の顔面にヒットした。悠太は衝撃で仰け反り、うめき声を上げる。

「濱田あ！」

直人の声がどこからか聞こえた。その声には、苦痛が混じっている。

「新海！お前」

悠太は必死に声を絞り出すが、直人の返事はない。

そして、煙の中から、その巨体は現れた。

体中は傷だらけだ。内出血が酷く、所々が紫色に変色している。それでも、義明が痛みを感じることはない。痛覚など当の昔に忘れたようだ。

朦朧とした意識。無音に包まれながら、精神を壊すこともできない。

そんな静寂を破ったのは、ドアが開く音だった。

「早く入れ」

陽は縄を引っ張り、その体を部屋に押し込んだ。

アンノンが陽の背後から又ツと現れたかと思うと、手際よくイスを義明の背後に置いた。そして陽がそのイスに、縄で縛られた男をくくりつける。男は衰弱していた。義明と同じように、虐待を受けたのだろう。

「おとなしくしてな。そのうち、助かるからよ」

義明は目を見開いた。

義明と背中合わせにイスにくくり付けられたその男は、義明が忘れもしない人物だった。

中込宏太。

何故こんなところに。

そんな疑念しか浮かんでこなかった。

二メートルは超えるであろうその巨体は、肩幅も桁違いだった。

薄れつつある煙の中で、悠太はその巨体を凝視した。

「・・・くそ、お前か」

昨晚、悠太達の前に立ちはだかった『見放された愛国者達』のメンバーの一人だ。確か、リーダーの陽からは『ブロック』と呼ばれていた。

「俺を誘拐しようつてか？」

悠太はブロックを軽蔑の眼差しで見つめた。そうでもしなければ、巨体から流れ出るオーラに屈しそうだからだ。

ブロックは首を振った。

「・・・別に、お前を連れて行く気は・・・ない・・・」

巨体から想像通りの口調だった。スローリーで、声はくぐもっている。

「伝えに・・・来たのだ」

ブロックのじれったい口調が、悠太に頭に響く。

「何をだ？」

「・・・空気の能力者の、居る場所だ」

義明の居場所だ。

悠太は目を見開いた。

「早く教える！出なきゃ」

「浅草の港に、廃工場が・・・一つある」

廃工場。いかにも悪人が隠しそうな、ポピュラーな場所だ。廃工場じゃなければ、地価基地というのも有り得る。恐らく不況の波に襲われて閉鎖された廃工場だ。

その時、一筋の電撃が現れ、ブロックを直撃した。

直人だ。

「濱田！油断するな！敵が何をするか分からない！」

直人が悠太の隣に降り立った。その眼光は、いつもより数段鋭い。

悠太はブロックに向き直った。

ブロックは体を仰け反らせている。しかし、目立った外傷はない。

「・・・お前・・・許さない」

ブロックのくぐもった声が怒りに染まった。悠太と直人は急いで臨戦態勢に突入するが、もう遅い。

その巨体からは想像もつかないような早さで、大きな拳が二人を襲った。

二人は叫び声と共に弾き飛ばされた。ブロックに比べて軽々しい体が、宙を舞う。

悠太はパソコン売り場に突っ込んだ。日ごろできないような事が出来る清々しさがあるが、それを今思う時ではない。痛みがそれを

超える。

「濱田あ！逃げ」

直人の声が途中で遮られ、入れ替わるように殴打音が響く。怒りの原因である直人が、対象であるようだ。

「新海！」

悠太は叫び、ブロックに髪を掴まれる直人に向かっていった。

悠太はブロックの腕に向かって、水の閃光を放った。

閃光はブロックに直撃し、切り裂くような音を放つ。まるでウォーターカッターだ。

ブロックの悲鳴が響く。ブロックは痛みには耐えられずに直人の体を落とし、両腕を抱え込んだ。

「新海！逃げるぞ！」

立場が逆転した。今度は、悠太が直人をかばっている。

直人の顔は見事に腫れ上がっていた。目の下には痛々しい傷もある。

悠太は直人を抱え込み、最期にブロックに向かって最期の一発を放つと、そのままその場を後にした。

無音の部屋で、義明の声だけが響いた。

「宏太・・・まさかお前も、捕まるなんてな」

義明の背後で、宏太の背中が震えた。背中合わせに繋がれているため、嫌でもお互いの鼓動が聞こえる。

「ああ・・・俺には意味がわかんねえ」

「・・・俺も最初はそうだった。でも、今では薄っすらと分かる」

義明は自分の太ももを見ながら呟いた。ズボンが所々に破け、オマケに皮膚も破かれ、真っ赤なモノが見え隠れしている。

「何だ？」

「・・・人質だ。あの男・・・陽と言っただけか。陽は、四大元素をこの場に集結させようとしている」

中込宏太の属する『保守派』のリーダー、火の元素・新海政貴。
小田義明の属する『抵抗派』のリーダー、水の元素・浜田悠太。

この二人のリーダーは、共に正義感が強く、仲間思いだと踏んだのだろう。都合の良いことに、二大の元素がこれで集結することになる。

「……でも……あとの二つは……」

「そこら辺は知らない。知りたくもないね」

残された、四大元素のうちの二つ。

『空間』

『時間』

その二つの元素は、この場に集結するのだろうか。

「……小田、俺らは捨て駒ってわけか。手段を適えるための、一つの捨て駒」

「そう。頂点を適えるために、俺らは土台にならないといけない。そのために、痛みにも耐えなければならぬ」

少しでも動かせば激痛が走る体だ。この痛みは、今後生涯で経験することはないだろう。生きていたら、の話だが。

「損な役回り……俺」

宏太が自らを嘲笑する。そんな宏太に義明はフオローも出来ない。

「そうだな……でも、いつかいい夢見れるさ」

「夢……か」

「ああ」

宏太の涙ぐむ声が聞こえた。やはり、宏太も辛いのだ。軍隊を持たない平和な国である日本に住む以上、こんな拷問を受けることはないかもしれないのに、義明と宏太はそれを受けている。

二人の溜まっていたものが噴出したのだろう。家族を失い、故郷を離れ、自らの肉体は死をも超える苦痛を受けている。

何よりも、悲しみだ。悠太や政貴は使命を胸に秘めることで悲しみを免れ、直人や川口は未来を見据えることで紛らわせたが、義明と宏太は直面するしかなかった。一人で大号泣した夜もあった。

静かにすすり泣く声が、二重にも重なって部屋に響いた。お互い、手を動かせないため、涙や鼻水はそのままの状態だ。

「・・・小田あ・・・」

「何だ？」

二人とも、もう声が聞きぐるしい。

宏太は、やがて口を小さく開いた。

「早くピーセウォーカー返せ」

政貴は地面に拳を叩き付けた。

「クソオ！・・・宏太」

「してやられた、って感じだな。まつさんと俺が戦っている間、宏太は誰よりも苦戦を強いられていた」

翔馬はため息を着いて空を見上げた。

「案ずることはないさ」

二人の背後から、聞きなれた声が出た。二人が一斉に振り向くと、そこには スキアーが立っていた。

「スキアー・・・どういうことだ・・・お前がやったのか？」

政貴の目が怒りの色に染まるが、スキアーはそれを笑いながら否定する。

「それはない。だが、分かることは分かる・・・奴らの目的は、宏太じゃない」

「俺か？」

スキアーは小さく頷いた。

「奴らの目的は、四大元素の集結だ。その裏づけに、小田も捕まった」

「小田も……か。今回ばかりは、『派』関係なく戦ったほうがよさそうだな」

政貴は拳を固めた。

「奴らは何処だ？」

スキアーは目を細め、遠くを見た。

「……浅草の港の、廃工場だ」

その言葉を聞くなり、政貴と翔馬は動き出していた。

直人の治療をしながら、明はため息を着いた。

「随分過激派になったのね、『見放された愛国者達』は。大手電気店を襲撃するなんて……」

「明さん、俺達、行こうと思います。やつらの目的がどうであれ、義明の救出は絶対です」

悠太が言つと、明は小さく笑みを浮かべた。

「……自ら敵の陣地へと向かうのね……あなたらしいわ。止めはしない。でも……戦いに確実なものって、無いのよ。どうなるか分からない。あなたが勝つかもしれないし、陽が勝つかもしれない。『極端な意外性』……それを忘れないで」

「明の曇った瞳を、悠太は一瞥すると、そのまま視線を外に投げた。……新海、行けそうか」

「直人は頬に張られたシップをさすりながら、グーのサインを出す。バツチリだ」

水と雷が今、戦いを決意した。

「襲撃は今日の深夜十一時……頼むぞ」

く。 義明奪還をかけた戦いはやがて、世界を変える戦いに変貌してい

I w a n t m e e t m y m o t h e r (前書き)

ふう・・・大変だあ。

I want meet my mother

アンノが口に放り込んだパンを食べながら、宏太は天を仰いだ。そこに青空は存在せず、ただ真っ白な天井だけが存在する。

「ありがとね、アンノ。ここまでしてくれる人も中々いないよ」
誘拐されたのは初めてだが、それでも言える。

「そんなことないですよ」

アンノは照れ隠しに否定するが、満更でもないようだ。

「本当だよ。それに・・・怪我の手当ても」

義明は足に巻かれた包帯を見た。不器用に巻かれ、傷口の一部が飛び出しているような巻き方だが、それでも助かる。

「じゃあ、僕は行きますので・・・どうか、元気で居てください」

「おう」

アンノはそう言い残して、退室した。やはり長居すると、陽に怪しまれるからだろう。アンノは必要以上に食料を人質に提供している。

義明は深呼吸をすると、うなだれた。

「いつこんなことが終わるんだよ・・・もう死にそうだ」

いくら食料が十分にあるとはいえ、一月の気温の中に上半身裸だ。身も拘束されていて自由が利かないし、寒さが傷口を襲う。

「そうだな・・・もう、俺も死にそうだ。ああ、家が懐かしい」

今は無き自宅を、二人は思い浮かべていた。この地獄とは対極に、天国とはまさにあの時を言うのだろう。

再び部屋は静寂に襲われた。

二人はそれぞれ、思い出を振り返ったり、これからのことを考えている。

「なあ、小田」

そんな静寂を、宏太が破った。

「なんだ？」

「・・・この一ヶ月、俺らと離れて、何やってた？」
「なんでもいいだろ」

幾ら仲が良くても、今の時点だけだ。二人の立場は、旧友という位置づけが成される。二人は、敵同士なのだ。宏太は世界の滅亡を願ひ、義明は世界の滅亡を拒否している。

「・・・そうだよな、教えられないよな」

「・・・ゴメンな」

再び腹わって離せるのは、来世だな。

義明は心の中で呟いた。

再び、静寂が流れようと

その時だった。

二人の鼓膜を、大音量の轟音が襲った。二人は思わず、うめきながら頭を下げる。

「何がおきたんだ!?!」

宏太が焦るなか、義明は目を細めた。

「爆発だ・・・何かの」

「何かの?」

部屋の外から、悲鳴が上がった。

そつと、義明は口の端を歪める。

「遅いよ、ハマ」

思ったよりも早い到着だった。

濱田悠太と新海直人の前には、廃工場の門が立ちはだかっている。数年前まである企業の電子部品を量産していた工場だ。その企業が不況の波に飲まれて倒産したあと、工場は買い手もおらずそのままだ。工場の面積は広大で、東京ドーム三個分という敷地面積を誇る。

そして二人は、広大な工場の北門に立っていた。

「・・・早く行こう。小田が死んじゃう」

直人は門をくぐろうと足を踏み出しながら、言った。

悠太は不安げにうなずいた。

「新海、大丈夫か？その怪我で」

「心配するな・・・このくらいなら大丈夫だ」

そんな傷だらけの顔をして、よく言う。

そう葉っぱをかけようとしたが、悠太はノドで押しとどめた。直人の熱意が、それをせき止めているのだ。

「・・・分かった。早く行こう」

直人の怪我を心配する悠太だが、本当は自分自身を一番心配していた。

陽に勝てる自信がないのだ。

あの時、わずかな時間しか同じ空間に居なかったがそれでも、彼の力の強大さは肌で感じた。まるで、覚醒を遂げた新海政貴に会ったときのような、身が震える感覚。

しかし、不安を感じている場合ではない。

今から自分は、敵の罠にかかろうとしているのだ。

「・・・行こう」

悠太は改めて表情を変え、廃れた工場を睨んだ。

「いっちょ、暴れようか」

直人が骨を鳴らす。

そして、悠太も首の骨を。

二人はもう、戦意に包まれていた。

「いっくぞおおおお！」

雄叫びと共に、死闘は始まった。

「敵襲！」

工場の敷地に突入するなり、マーベリック達の叫び声が響いた。わずか突入後、三十秒ほどで、マーベリック達の応戦が始まった。奴らは、廃工場から次々と現れる。まるで、予期していたかのよう迅速だ。

先日悠太を追ったマーベリックの大群を優に超える数のマーベリックが、悠太達を襲った。推定六十。これほどのマーベリックをよく集めたものだ。

戦闘を重ねるにつれ、悠太と直人はあることに気がついた。

『見放された愛国者達』の規模が、世界にまで浸透していることに。

マーベリックは世界中から集められたようだ。青い瞳や黒い肌、金色の髪の毛の特徴を持つ人間が、次々と襲ってきたからだ。そして外国のマーベリックは、やはり強い。

悠太は一番手前の白人を殴りつけると、そのまま水の力で吹き飛ばした。白人の男の巨体は、そのまま五人ほどを巻き込んで吹き飛んでいく。

さらに悠太は水の帯を発生させ、自分を取り囲むマーベリックを一掃した。そしてそれでも尚襲ってくる獰猛な奴らには、特大の水の弾丸を浴びせる。

「新海！」

悠太が直人の名を呼ぶと、直人も死闘の途中だった。

襲ってくるマーベリックを電撃で次々となぎ倒していくのはいつものことであるが、今回の戦い方はいつもどおりではない。

顔を庇う様に、前のめりになって戦っているのだ。やはり、直人の怪我は生やさしいものではない。普通に触られただけでも痛みに喘いでいたのだ。殴られたら失神どころじゃないだろう。

「新海！」

悠太は再び直人の名を呼ぶ。しかし、
「来るな！早く目の前の敵を対処しろ！」

『光が降り注いだ日』から初めて見た、直人の強がりだった。三人の前では見せなかつた心の奥の強情さを初めて、悠太に見せたのだ。

これが、直人の決意だ。

悠太は直人の思いをダイレクトに受け止め、背後から再び襲いかかろうとするマーベリックに向き直った。

そして、クールに一言。

「……やりすぎんなよ！」

何かのスイッチが入ったかのように、悠太の動きが素早くなった。悠太は次々とマーベリックをなぎ倒していく。水の力と、人間の拳を上手く組み合わせ、次々と効率良く、立ちほだかる敵を倒していった。

状況は変わって直人も、何かが吹っ切れたかのように、悠然と敵に向かつていった。

電撃を近くのマーベリックに浴びせ、仰け反ったそのマーベリックを吹き飛ばして他のマーベリックを襲わせる。そして攻撃の手は休まることなく、次々と直人の手の平はマーベリックに向けられていった。一秒間に何十発と放たれる電撃は、まるで龍が暴れ狂っているかのようだった。

陽は悔しさで歯ぎしりした。わずかな期間で世界を巻き込んで成長した『見放された愛国者達』が、いとも簡単に壊滅させられているからだ。しかもたった四人の、二つの別々の勢力によって。

「北門の奴らはどうだ！」

陽がロックに叫びかけると、ロックは力なく首を振った。

「……ダメ……だそうです……勢力は半減しています」

クソ！と陽は叫び、近くの壁を殴った。余りの力に、壁が一瞬にして吹き飛ぶ。

「南は！」

今度はアイスに目を向ける。その目は、人間とは思えないほど充血していた。

アイスはわれ関せずといった風に首をふる。

「ダメですね。もう壊滅状態・・・足止めがやっと」

ここまでとは、予想だにしていなかった。二大の元素は、急速に力の発展を遂げている。総数五百といるマーベリック達を、こんなに早く、容易く壊滅へと追い込んでいるのだから。

「北へ南に向かっていているやつらを百人派遣しろ！」

「そ、それをしたら」

「黙れ！」

アイスが反論しかけたが、陽はそれを大声で制止した。そして、小さくため息をする。

「・・・アイス、お前が行け」

反論の余地はないと踏んだのだろう、アイスは小さくうめきながらうなずいた。

「おうせのとおり」

そして陽はその勢いのまま、ロツクに顔を向けた。

「お前もだ！」

ロツクも反論はしなかった。小さく「ウウイ」と言い捨て、その場を後にする。

陽は頭をクシャクシャと掻いた。

「クソ！こんなはずじゃなかった！」

ただの十四、五歳のガキだ。そんなガキに、ここまでやられるなんて。

友の力なのか？友を助けよう、また再び共に居ようとする志の、併発だというのだろうか？何がそんなに友への思いを駆り立てるといふんだ！

「アンノ！」

陽は部屋の端っこでうずくまるアンノを呼びつけた。

アンノはすぐに立ち上がり、肩をすくめながら陽に近づいた。

「・・・何ですか」

「人質を連れて来い！今すぐにだ！拘束は今解いておいた！」

そう叫び、アンノの頭を小突く。

アンノは小さく頷き、人質のいる部屋へと小走りで向かった。

「・・・クソがあ！」

陽の叫びには、激しい憎悪があった。

最初の苦戦の山を越え、悠太と新海の戦況は良化した。向かってくる敵の勢いも、弱まっている。もう百人ほどの敵の敵を倒したのだから、当たり前なのかもしれない。

ほっと一息着けるのも、もう少しだ。敵は残すところ、あと三人ほどだ。

そう気を緩めた刹那、

「ウギヤアアアア！」

直人の悲鳴が響き渡った。悠太はその声に驚きながらも、体をひねって直人の居る場所を見た。

直人は顔を抑えてうずくまっていた。

最悪のウィークポイントである顔に、攻撃を受けたのだ。

「新海！」

新海の名を呼ぶと、新海が悠太を見る代わりに、別の顔が悠太を見た。

悠太はその顔を見て、顔を引きつらせた。

「・・・ロック」

皮肉なものである。ロックによって作られたウィークポイントを、ロック自ら攻めているのだ。

「・・・ここまでだ・・・」

「うう・・・うああああああ！」

悠太は怒りに身を任せ、ロツクに飛び掛った。

悠太が放った水の塊は、ロツクの顔面に鈍い音を立てて直撃した。尚も悠太は空中で身を翻し、ロツクのわき腹に水の拳を喰らわせる。ロツクは苦痛の声を上げた。しかし、同時にその声は衝撃が弱いことを物語った。

ロツクの腕が瞬時に伸び、悠太の頭を掴んだ。巨体からは考えられない俊敏さだ。

「・・・まだまだ」

ロツクの左腕が振り上げられ、悠太が防御をする時間も与えられず、その腕は振り下ろされた。拳は悠太のわき腹に矢のように直撃する。

骨が折れる音がした。悠太は苦痛に喘ぎ、そのまま天を仰ぐ。

死ぬかもしれない。

悠太の心に、初めてそんな思いが浮かんた。

そしてそんな悠太に、無情にも二回目の殴打が加えられる。

次は顔だ。

枯葉のように生気を失った悠太の体は、地面に放り棄てられた。

「・・・さようなら・・・」

ロツクは足を振り上げた。悠太はその光景を見ていたにも関わらず、動けなかった。ゆっくりと、死を待つしか、今の自分に能はない。

空を斬る音。それがまるで天国の階段を上るベルのように聞こえて、悠太は笑うしかなかった。

その瞬間、天国へのベル音に、不協和音が重なった。まるで耳の奥を震わせるような、耳障りな音・・・。

それは、電撃の音だった。

気が付くと悠太の目の前で、ロツクが崩れ落ちていた。巨体が崩れ落ちるさまは、中々見事だ。本当にスローモーションに見えるものなのだ。

ロツクが地面に倒れこむと、代わりに、直人の姿が視界に入った。直人は足がフラつく中、なんとか立っている。よくぞアレで電撃発射の衝撃に耐えられたものだ。しかも、メガネをしていない。照準もよく合わせた。

「・・・へへへ、酷い顔してんな、お前」

久しぶりに直人のメガネ着脱姿を見たが、顔が腫れていてよく分からない顔になっている。

「お互い様だ」

その言葉で、悠太は自分の顔が腫れていることに気づいた。会社の腫れ物としては十分な見てくれである。社

「・・・はあ、俺のイケメン顔がなあ」

「うるせえ」

そして、直人は突然電撃を放つ。

電撃は悠太の頭の上まで向かってきた、マーベリックの胸に直撃した。

「・・・サンクス」

「礼はあとでな」

特大の炎が一閃した。翔馬はそれを身をよじて回避し、小さく呟く。

「まつさん！あぶねえって！」

「はは、スマン」

南門から侵略して瞬時に現れた敵の総数は二百。数から見ても、実力から見ても苦戦は目に見えているというのに、政貴と翔馬は戦いを楽しんでいた。

翔馬は自慢の二本の日本刀を振り回し、広い攻撃範囲で敵をなぎ倒していく。時々武器を持ったマーベリックも居たが、翔馬のパワーに到底敵うはずもなく、無残に斬られていった。

政貴は翔馬と違い、戦闘開始時から五歩ほどしか移動していない。

めんどくさそうに、向かってくる敵に火の玉をぶつけている。王者の風格、とでも言うのだろうか。政貴の実力の凄さを感じさせた。

二人の力は、一ヶ月間で格段に向上していた。翔馬は俊敏な移動を究め、政貴は確実性の高い命中率を究めた。一ヶ月という時の流れと、一つの使命感が、彼らをここまで成長させたのだ。

翔馬は近くの敵に刀を振り下ろすと、ひとけ 人気を感じて、上を見上げた。

「・・・おいでなすったな
アイス。」

戦友の中込宏太を拉致した、『見放された愛国者達』の幹部。恐らくあれが、このマーベリック達の首領だろう。

「まっさん！」
「分かつてる！」

翔馬が政貴を呼ぶころにはもう、政貴は空中へと飛び上がっていた。今まで一切移動していなかった政貴だが、今度はやや本気である。

空中で、アイスと政貴の攻撃が激突した。互いの元素の力を収縮した塊がぶつかり合う。

ガラスが割れるような音が響き渡り、空中にプワツと、まるで花火のように、キラキラとしたガラスの破片が噴出する。

「違う・・・氷？」

翔馬はガラスの破片であろうその物体を掴み、小さく呟いた。間違いなく、氷だった。翔馬の手を、懐かしいあの冷たさが襲う。

政貴は地面に降り立つと、尚もアイスに炎の球を放ち続けた。

しかし、アイスはそれを軽々と避け、徐々に政貴との間合いを詰めていく。

「まっさ」

加勢しようとして翔馬は一步踏み出すが、新手のマーベリックの大群によって、阻まれてしまった。

「クソッ！」

翔馬は悔しさをこめて日本刀をなぎ払った。目の前の友が苦戦を強いられているのに、自分は助けることもできない。

「川口！こっちは大丈夫だ！」

政貴はそう叫び、炎の球を放った。

アイスはその炎の球を避け、更に政貴との間合いを詰めた。

そして、

ついにアイスと政貴の距離が、一メートルほどになった。

「終わりだ！」

アイスが勝利宣言をして、右手を振り払う。

政貴は来るべき攻撃に備え、右手に炎を宿す。

ついに、アイスの特大の氷球が、政貴を襲った。しかも背後から。

意表を突かれた政貴は、迅速な対応が出来ずに、特大の氷をまともにくらった。

「うあああああ！」

全身を激痛が走り、政貴は力なく転がった。遠くから、アイスの笑い声が聞こえてくる。

「まつさあああん！」

それでも、翔馬は駆け寄ることが出来ない。無数のマーベリックが、翔馬を絶えず襲うからだ。

しかし、

その瞬間だった。

アイスは翔馬の眼前にて、火ダルマと化した。ゴオオオオオオオという音を発しながら、その場をのたうちまわる。

「氷は・・・熱によって溶ける。つまり俺の炎で。そして、氷は水になる」

そして、政貴はアイスの頭を踏みつける。

「あいにくだが、水は大嫌いだね」

政貴の踏みつける力が段々強くなる。アイスの頭蓋骨がきしみ始めたのは、すぐだった。

「・・・アイツを・・・思いだすんだよ！」

生きる。

I want meet my mother

ある歌の一節だ。野中高亮はそれを口ずさみながら、目の前の親を見つめる。その親とは血が繋がっているわけではないが、彼女は能力的な母親である。

「何それ？何の歌？」

「黒人霊歌だよ」

高亮の返事を聞いて、明はフフツと笑う。

「何？あなたは奴隷なの？」

高亮は、ポケットに手をつっ込んだ。

「ああ。この世という呪縛から開放されない、開放したくないというジレンマの、奴隷だよ」

「皮肉ね。なら、死ねばいいのに」

「あいにく自分で自分を殺めるのは気が引けるんでね」

明は紅茶をすすする。

「勇気の無い男」

「そうかもしれない」

明は紅茶のカップを机に置くと、まるで息を吐き出すかのように言った。

「それに比べて、あの人達は勇気があるわ。自ら敵の本陣に突っ込んで行つた。雄雄しい・・・」

高亮はため息をつくとき、ポケットから手を出し、グーパーと何回も握りなおす。

「いや・・・俺も、勇気があると思う」

「どついつこと？」

電灯という灯りによって創造された野中高亮の影が、微かに歪んだ。

高亮は、真つ直ぐと明を見つめた。

「自分自身を指針とした」

壁が勢い良く破壊され、一気に光が降り注いだ。思わずその光に、義明と宏太は目をつむる。

「よお・・・待たせたな」

夜ではあるものの、外界のライトの光によつて、政貴は光り輝いていた。その姿に、二人は思わず感激の声を漏らす。

「ま・・・まつさん」

「お？敵側もいんのか・・・まあいい」

政貴は義明を縛り付ける縄に手をかけ。
外れない。

「・・・なんだこれは・・・」

「俺の力の断片だ。簡単には外せない」

政貴が顔を上げて振り向くと、陽が立っていた。全身を黒尽くめの服をまとうっており、正にそれは『闇』そのものを擬人化したようだった。

「・・・テメエが親玉か」

翔馬が日本刀を引き抜いた。今にも飛び掛りそうだ。

「待て、やめろ」

政貴はそれを、慌てて制止する。

「・・・お前か。早く解いてもらおうか」

「却下させてもらおう。・・・私の依頼を聞かない限りはな」

「・・・世界の崩壊を喰い止める気は無い。俺たちは、摂理には反さない」

陽は小さく笑みを浮かべ、肩をすくめた。

「つくづく面白くない人間だな・・・独占欲の欠如か」

「そうかもな。お前は、倫理的思考を忘れていているようだ」

政貴と陽は、互いに笑みを浮かべた。

陽はさらに言った。

「忘れたんじゃない。消したんだ。アレは、今の世界に必要ないかならな。」

見ただろ？世界中で、ルールの崩壊が起きている。今も世界中で、『生き延びるため』という名目にかこつけて、犯罪行為が繰り返されている。全部、「マーベリック」のおかげだ」

「散り際に花は美しく散るものだ。段々、人間は本能に戻るものだ」「随分醜いことで」

「最初だけな。いずれ、共生を考え出すだろうよ。人間は単体だと脆弱だからな。集団で固まって、世界の滅亡を待つ」

陽の目つきが変わった。

「そうかい。そういうことなら分かった」

そして、拳を作る。

「・・・武力の行使をするしかないな」

政貴は陽の殺気を浴びるが、小さく笑みを浮かべるだけだった。

「・・・できたらな」

その刹那、二つの影が、勢いよく衝突した。

黒と赤の球体が辺りを旋回する。やがてその二つの球体は衝突し、音と波を発する。

しばらく二つの影は戦いを続けていたがやがて、漆黒の球体が政貴を直撃した。

わずかな時間だった。

政貴が倒れるのは。

「威勢だけは良いなあ・・・元素さんよ。やはり力が大きすぎて、コントロールが出来ていない」

口元をゆがめながら、政貴の胸ぐらを掴む。

「じきに、もう一つの大元素がやってくる・・・その元素様に、無様な姿を晒すこつたな」

陽はそのまま政貴を空中に放り投げ、漆黒の闇の球体を機関銃のように何発も当てた。

「まつさん！」

宏太と翔馬の悲痛な叫びも届かず、静かに政貴の肉体は固いコンクリートへと落下していった。

悠太と直人が満身創痍の体を引きずりながらその場に来ると、目の前には地獄絵図が広がっていた。

口から血を流し、地面に倒れている翔馬。そして、天を仰ぎ、胸を上下させて必死に呼吸をする政貴。ゾンビの用に生気を失った、義明と宏太。

そしてその惨状の中心に、堂々と立つ者が一人。

鬼塚陽である。

「てめえ！」

悠太は痛む右手を必死に耐えながら、陽目がけて水の球体を飛ばした。

陽はその球体を、まるでキャッチボールのボールを捕球するかのように手で受け止め、軽く押しつぶした。途端、水風船のようにそれは破裂し、地面におびただしい量の液体を垂らす。

「・・・無駄というものだ。今のお前に、俺は倒せない。この男と同じようにな」

そう言って、陽は政貴を指差す。炎の能力を身に宿した、雄雄しい男の姿を。

「……そんなわけが……」

「やってみるか？こんな風に、ボロ雑巾になりたければ、すぐにしてやる」

直人が悠太の肩を掴んだ。

「……濱田、やめる。……今やったら、死ぬぞ」

くそ、と悪態をつき、悠太は舌打ちをする。悠太の体は正にボロボロの雑巾のようであった。大量の血とホコリを浴び、カジュアルな服装は迷彩服のようになっていた。

体中の力が抜けた。悠太は両膝を地面に着け、ダラリと肩を落とす。

陽はそんな悠太を見て、大きく高笑いを上げた。

「無様なものだな！今まさに、この世を創造し二大元素様が、自然発生したしがない『闇』によって、満身創痍になっている！これほど嬉しいことはないよ」

陽はゆっくりと歩き出し、続けた。

「……まあいい。お前たちは敗者だ。敗者には、勝者に服従する権利がある」

「お前の言いなりにはならない！」

悠太は反射的に答えた。思わず両拳に力が入る。

陽は小さくため息を著くばかりだった。

「……馬鹿なヤツだ……火の元素様とは違い、お前とは派閥が同じだと思っただが……」

世界の滅亡を阻止する派閥、『抵抗派』。まさに陽は、その『抵抗派』にとって、心強い味方のはずだった。権力があり、カリスマ性があり、何よりも、現時点での悠太を超える力を持っている。

しかし、悠太はそれを、拒否した。数少ない中の、世界を救う可能性を、放棄した。

「何故だ？」

陽は首をかしげる。

悠太は首をかしげ、呟いた。

「お前とは合わない」

殴打音。破壊音。小さな悲鳴。

悠太の傷だらけの脆い体が、棒のようにその場に存在する。

「・・・馬鹿なやつだ」

陽は唾を吐くと、部屋の端でうずくまる人影に目をやった。

「アンノ」

先ほどから、ずっと地獄絵図を見せ付けられていた幼い子供だ。精神的ダメージは計り知れないはずだ。

「こいつらを片付けておけ」

アンノはただうなずいただけで、静かに立ち上がった。何と惨いことをするんだ。

その場にいた全員が思った。最悪的なバイオレンスを子供に見せ付けておいたうえに、後始末までさせる。片付ける、というのは恐らく「殺める」ことではないだろうが、それでも、やっていることの酷さはしみ出てくる。

「・・・お前・・・最悪だな・・・」

政貴は力なく呟いた。

陽はゴミを見るように政貴を見ると、肩をすくめた。

「何がだ？」

「・・・へ、お前・・・最高だな」

翔馬が血を吐きながら言う。

陽は笑みを浮かべた。

「・・・崖っぷちの人間とは、面白いものだな。背水の陣のくせに、まだ強がる。それが例え、死に直結したとしても」

「・・・おれたちが？崖っぷち？ハッ、笑わせるな」

政貴は小さく吐き出した。

「・・・準備期間だよ。ただのな」

「詰まらん虚勢だ」

『闇は失せる。これからは、光の時代だ』

それは、一瞬だった。

全てを覆す驚愕が、その場を包み込んだ。

そして、死の臭いはすぐに蔓延する。

陽の胸に、ぼっかりと開いた穴。その穴からは、小さな手が飛び出している。

「……どういう……ことだ……」

「聞こえなかったか？失せるってんだ」

陽は白目を剥き、口から血を吐き出した。体中が小刻みに震える。

「お前……は……」

陽は余力を使って頭を動かし、その正体を垣間見た。

「アンノ？」

アンノはニヤリと笑った。

「お前の功績は称えよう、闇よ。だから、失せな」

陽はただ震えるだけしかできなかった。

「・・・どういことだ？何が・・・一体何が・・・」

アンノは小さくため息を着き、陽の体から手を引き抜いた。血液が地面を赤に染め、赤に染まった絨毯に、力なく陽の体は崩れ落ちる。

「冥土の土産だ。教えてやる・・・俺はお前が求めるあと二つの」

「俺が、時間と空間の能力者だ」

生きる。(後書き)

なあ、驚愕の展開！

明日への咆哮

推定まだ十一歳ほどの幼い子供の顔は、大人びていた。異常なほどに落ち着いており、口調は大人そのものである。

その名を、アンノという。

「……大丈夫かい　まあ、その見た目じゃ大丈夫ではないだろうが」

アンノは陽の横たわる体を見下ろしながら、小さな声で言った。全員が驚きを隠せないでいた。『抵抗派』『保守派』それぞれ両派のリーダーが簡単に敗れた相手を、まだ幼い子供が殺害したのだ。簡単に、右手一本で。

それを察したのか、アンノは小さく笑みを浮かべた。

「驚かないでくれよ。今まで隠し通してきたんだから、驚かれるのも仕方ないかもしれないけど。でも、俺は君達との同志だ」

アンノは先ほど宣した。

『俺が、空間と時間の能力者だ』

その言葉が、全員の脳内にコダマする。未だに、信じられないでいる。

「……君が……俺たちとの同志……」

悠太はいつのまにか起き上がっていた。体中は他人の血ではなく、自らの血で真っ赤に染まっている。

「うん。俺が、残りの四大元素を有する者だ」

アンノはそう言い、目を細める。

「……二つの元素を……何故持っている？」

政貴は顔をしかめがなら質問した。

アンノの声は澄んでいた。

「吸収したんだよ。俺は元々、空間の能力者だ。でも、あることが起きて、『時間の能力者』が死んでしまった。俺が殺したも同然なんだけど。で、俺は取り込むことに成功した。時間の元素を。元

々それが、空間の能力者の突出した能力だったみたいだ」

そして更に、アンノは続けた。

「でも、時間や空間の元素は、世界創造の後、ほとんど骸と化した。力を持たなかったんだ。でも、その代わりに『空間』は、元素を取り込むことが出来る。

俺はそのおかげで、様々な力が使える。世界中でこれまでに死んでいった人間から開放された元素を、沢山吸ったからね」

アンノは一呼吸つくと、火と水の二大元素を見た。

「まだ信じられないようだね？ でもいいや。次期に分かるさ」

「あ・・・アンノ・・・」

動揺する、義明の声だった。アンノは義明のほうを見ると、ペコリと頭を下げた。

「ごめんなさい。俺、あなたを騙していた・・・許して」

そして頭を上げ、

「でも・・・お詫びに良いことを教えます」

アンノは二大元素者に近づくと、二人に同時に二本の手を差し伸べた。

「あなたたちはまだ、真の力を解放できてません 僕もだけど。でも、この場に四大の元素が集結しました・・・だから・・・」

アンノは、小さく息を吐き出した。

「俺達の力は解放されます。世界の終末のために。さあ」

アンノの両腕が、光り輝いた。

「手を掴んで」

まるでそれは、終末へのベルかのような声だった。

そして、世界を創造し四つの元素たちは、繋がった。

一つに。

三人を、輝かしい光が覆う。全てを包み込む、神々しい光だ。

光はやがて急速に膨張し、義明や直人達を巻き込んで巨大化した。

光に包まれて、直人はこう思った。

まるで、あの時みたいだな。

『光が降り注いだ日』である。あれから全ては変わり、世界は終末へと向かいだした。

だとしたら、この光によってまた再び、全てが変わるのだろうか。世界の終末は喰い止められるのだろうか。

気が付くと、光は消滅していた。いつものように薄暗い世界が目の前に広がる。

しかし目の前には、いつもとは違う三人がいた。

「濱田……」

思わず義明はそう呟き、立ち上がった。陽が死んだので、闇の力による拘束はない。

悠太は自分の手の平を見つめ、驚いたように目を見開いている。

「何だろう……この感じ……」

力が泉の如く湧き出る感じだ。今なら、何でも出来そうな気がする。

まるでスーパーサイヤ人だな、と政貴は苦笑する。まさか自分にもこんな感覚が訪れるとは、夢にも思ってた。なかつた。

アンノはそんな二人を一瞥すると、嬉しそうに口を開いた。

「さあ。終末の起源へと行きましょう」

政貴はうなずくが、悠太のリアクションがない。

アンノは首をかしげた。

「……どうしたんですか？」

悠太は背後を振り返り、義明と直人を見た。二人の表情はどちらも、真剣そのものだ。

悠太は、小さく下手なウインクをした。そして、向き直る。

「・・・悪いが俺は・・・お前達の敵だ。今の世界を、残したい。たとえそれが、摂理や法則に逆らうことでも」

政貴は平常だったが、アンノは案の定、目を丸くした。当然のことである。

悠太はアンノに背を向けた。

「次に会うときは、敵同士だ」

「・・・そうですか。残念です・・・でも、仕方が無いこと。人間というデバイスが成せるんですからね・・・」

アンノは悠太の背中を見つめた。

「・・・でも、俺にも使命がある。俺は世に従属している。だから・・・あなたの言うとおり。次からは、敵同士です」

さようなら。

アンノの声が響いた。

「いや、濱田・・・決着は、俺とつける」

「もちろんだ」

悠太は片手を上げて応えた。

そして悠太は、視線を二人の同胞に向ける。

「行こうか」

義明と直人は、小さくうなずいた。

最期の時は近い。

高亮は小さく笑みを浮かべながら、目の前に転がる死体を見下ろした。

「……これが、俺の意思だ……悪いな」
そういつて、口の中の血を吐き捨てる。

本来歯車でしかなかった影。

しかしその影が、運命に逆らった。彼は、戦士となったのだ。

明日への咆哮（後書き）

第二章がこれで終わりです。

次回から、最終章です。

満身創痍の『抵抗派』三人だったが、重く傷ついた体を引きずり、明宅へと着いた時にもう一つの、

もう一つの絶望が、三人を待ち望んでいた。

ただ三人は、そこに立っているしかなかった。そして、見下ろすしかない。

力を失った者の体を。

「・・・明・・・さん」

明の体は冷たくなっていた。心臓は動いておらず、顔色は蒼白しており、それはまるでいや、死体そのものだった。

「・・・なんで・・・なんで明・・・さん・・・」

悠太は崩れ落ちた。心が黒に染まっていくのが分かる。

直人は明の脈を確認すると、ため息をついた。

「駄目だな・・・死んでる」

「誰がこんなこと」

「もう見当はついてるだろ」

直人は悠太に目を向けた。

義明も、大体の見当がついていた。しかし、その見当は、三人が最も考えたくないものだった。

「ま・・・まさか」

悠太はその答えを探り当て、絶望した。

野中高亮。

「あいつが・・・あいつが殺したということか・・・」

信じたくなかった。彼は同級生だ。悠太は彼の笑顔を今まで見せてきて、共に喜び、戦いあった仲だったのを覚えている。

直人は明の遺体に近づき、その冷たい首もとに触れた。

「・・・見たところ、骨が折れている・・・こんなことができるのは・・・」

「野中だけ？」

ああ、と直人は答える。外傷がないのだから、死因は首の骨の骨折としか考えられない。それができるのは、『影』の能力を持つ、高亮だけだ。彼は、人の影の形を変えることができる。

「・・・信じられない。明さんは、野中の母親だろ」

義明はイスに座りながら、冷えた紅茶カップへ目を向けた。まだ紅茶が残っている。

「その母親を殺したなんて・・・アイツ、何があった」

直人は紅茶のカップを掴み、中を覗き込んだ。

「待てよ、アイツがやったとは限らないだろ？」

悠太が主張するが、義明は首を振る。

「残念だが、高亮が戦いに参加しなかったのなら、そちらのほうがつじつまが合う」

「・・・そんな」

直人は紅茶のカップを置くと、ため息をついた。

「・・・どうしようか」

明の冷たくなった体は、若干輝きを放っているように見えた。それは『光』の能力者が成せる奇跡なのか、それとも三人の視神経に損傷があるのか。

「・・・このままにしておこう。警察が来るのは厄介だ」

直人は言い放って明の体を抱き上げ、ソファの上に乗せた。

「ゴメン、明さん。我慢してくれ」

どうせあと少しで世界は終わるんだからな、と付け足し、そのまま出口のドアまで歩み寄る。

「新海、どこへ行くんだ？」

「他の部屋を使わせてもらおう・・・俺らにも休息が必要だ」

そう言っただけで直人はゾンビのように歩き、別室へと向かっていった。義明と悠太はお互いを見合わせた。

「俺たちも・・・寝るか」

「そうだな」

この日三人は、極度の疲労によって、瞬時に寝ることができた。

焚き火を浴びる四人の前に、それは突然現れた。

四人は驚きもしなかった。それが何であれ、脅威になるはずがないからだ。この場には、世界最強が二人も存在する。

「何の用だ・・・スキアー」

スキアーは笑みを浮かべ、焚き火のそばにしゃがみ込んだ。

「・・・役目を果たしてきた。これからは、自分の生きたいように生きる」

スキアーは顔を上げ、その場にいる全員を見渡した。

『火』の能力者、新海政貴。『剛』の能力者、川口翔馬。『地』の能力者、中込宏太。そして、

「お前が、『空間』能力者か？随分・・・小さいな」
アンノは肩を上げて首をすくめた。

「悪かったね。ちなみに、俺は『時間』の元素も継承している」

「ああ、そうかい・・・すまないが、お前に頼みがある」

スキアーはアンノの小さな顔に顔を寄せた。別に『時間』の能力を継承していること事態には、驚く必要もない。

「・・・お前は能力が吸収できるはずだ」

「ああ」

「それなら・・・一つ頼みがある」

アンノは高亮の目をのぞきこむと、笑みを浮かべた。高亮の瞳の奥に、純粹な『影』が渦巻いているからだ。純粹な『影』。なん

という皮肉だろうか。

「なんだい？」

「今日・・・『光』の元素を吸収しなかったか？」

アンノは下を向き、しばらく考え込み、やがて顔を上げた。

「・・・毎日いろんな元素を吸収しているからね・・・はい、分かった・・・吸収したよ。確かにね」

「そうか・・・なら、俺にその能力をくれ。吸収できるなら、与えることもできるはずだ」

「ええ・・・結構『光』って重要なポジなんだよねえ・・・」

アンノはかなり落ち着いていたが、その声色は嫌がっている。

「頼む。俺にその元素をくれ・・・頼む」

「でもなあ・・・なんで君のような小さな元素者にそんなものを・・・」

「頼む！」

唐突に叫び、そして、土下座する。

「そいつが・・・欲しいんだ・・・そばに置きたいんだ・・・あいつは・・・あいつは・・・」

声も震えてきたので、アンノは仕方なく高亮の頭の上に手を乗せた。

「・・・わかったよ。どうせ君が死ねば、また俺に還元されるし」

高亮はようやく頭を上げた。その表情は、恍惚としていた。

三人の体がようやく通常へと戻ったのは、戦いから二週間後だった。それまでは満足に動くことも出来ず、炊事や便など大変なものであった。戦いなどとてもない。よくぞ帰宅できたと三人は密か

に思っていた。それでも病院に通わず、睡眠だけで全ての傷を感知させたのは、やはり元素の力の恩恵だとしか考えられない。

「・・・おはよう」

悠太は眠い目をこすり、リビングに入った。リビングにあった明の死体は、別室の倉庫に収納してある。

明の死体はなぜか腐敗せず、死亡から十五日経った今でも、全く変わらない。死後硬直も見られない。

「おはようって、お前今日歩けてるじゃんねえか！」

義明がツッコむと、悠太はグツと親指を出した。

「ああ。完治したらしい。あとは、お前らだな」

さすが四大元素の一つだ。直人と義明は未だに満足に歩行できない。三、四歩でへばってしまう。

悠太は点灯するテレビ画面へ目を向けた。

「・・・やっぱり今日もか」

「ああ・・・ひでえもんだ」

義明は紅茶をすすりながら、悲しげにつぶやいた。

「終末は近い、ってことだな」

「明の言う『アナザー』まで、残り五日だぞ・・・どうするんだ」

『アナザー』。それは、終末を引き起こす『ビック・バン』のことだ。生命の大爆発によって、もう一つの世界の『怪物』が流れ込み、世界は終末を迎える。

「それについては・・・考えがある」

悠太はイスに座り、二人の顔を見た。

「決戦は・・・崩壊当日にしようかと思う」

「俺もそれは考えていた」

直人は賛同した。無論、義明も。

世界終末発動阻止の条件。それは、『アナザー』の阻止である。

明の話だと、『アナザー』は発動の前に、大きなエネルギー体が現れるらしい。『光の降り注いだ日』と同様に。そのエネルギー体を破壊することが、勝利の条件である。

「だから・・・決行は当日しかない。新海やアンノと戦う必要があるけど」

「多勢に無勢だな。・・・数も力も違いすぎる」
まさに絶望的な状況だった。

三対四（恐らく五になる可能性もある）・・・勝ち目があるように思えない。

「悠太・・・俺たち・・・」

義明が言いかけたのを、悠太は阻止した。

「いや、言うな。・・・俺がどうにかする」

それが虚勢なのは、二人から見ても分かった。でも、頼もしいことは頼もしい。

「フフ・・・頼むぞ」

直人と義明は、同時にティーカップに手を伸ばす。

勝ち目の無い戦いでも、挑まなければならぬ。それが自分の理想であり、世界中が望むハッピーエンドなのだから。

悠太はテレビの画面を凝視する。

テレビの中では、様々な地獄が映し出されている。近頃は、BPOのお咎め無しに残虐映像が垂れ流しだ。それほど、世界は今激動している。

「俺達が、世界を救う。」

悠太は静かに拳を握った。

ファカルティ

『マーベリック』の問題はついに世界規模の大問題へ発展した。対マーベリックとの戦争で、一国が壊滅するほどであった。この大問題に、日本は大幅に改憲し、国連は軍力を使って世界中を駆けずり回った。

日本国内では、マーベリックが『国会議事堂』を襲撃する事件があったり、テレビ局を襲撃する事件があったりで、日本国内は二十キロおきに自衛隊が配備されることとなった。

世界中はまさに大混乱であった。アメリカ合衆国サンフランシス

コでは大規模なマーベリックの暴動によって数万人規模の死者が出、アメリカ軍が総動員される事態になった。スイスではマーベリックの集団との戦争が勃発し、国連軍が加勢するも、あっけなく敗戦。スイスの一部は荒廃した大地と化し、今でもマーベリックによる侵略を続けている。

正に『終末』にふさわしい世界といっても過言ではなかった。

その世界を救うのは、あの三人しかいなかった。

三人は大地を踏みしめた。自然と、体中に力がみなぎるのを感じる。

今日三人は猛スピードで始まりの地 小淵沢に向かう予定だ。

『アナザー』 予定日は、翌日だった。

悠太は靴のヒモを結び終わると、ゆっくりと立ち上がった。

肺いっぱい酸素が入ってくる感じがする。まるで、義明の『空気』の元素が応援しているかのように。

「さて」

悠太は振り返って二人を見た。二人とも、まだ顔に傷が残るが、それでも戦場に向かう戦士の雄雄しい顔をしている。

「行こうか」

世界を救うために。

Y o u c a n ' t m a k e o m e l e t w i t h o u t b r e a k :

ついに局面です。最期の戦いは、どうなるのでしょうか。ちぎれた絆達は再び、一つになる日が来るのでしょうか。

題名は、フランスのことわざです、。

Whatever you do will be insignificant

たあ、がんばるぞー！

荒れ果てた東京の地を離れ、それでも尚三人は全速力で山梨を目指していた。三人の総力は格段に向上していた。特に悠太。彼の走力は廃工場での一件後、格段に上がっていた。走り始めてから数時間後、直人と義明は現在、悠太の肩を借りて走り続けている。時速は五十キロほどであろうか。人並みの速さでないことは確かだった。

「濱田・・・お前・・・疲れないのか」

息も絶え絶えになりながら、義明は言う。もはや直人と義明は、引きずられていると言っても過言ではない。

「なんか、スゲエ力が湧いて来るんだよ・・・本当はもつと走れるけど・・・」

「やめてくれ」

わかったよ、と悠太は少し笑う。これ以上速度が上がれば、二人は置いていかれざるをえないだろう。しかし、すぐに現地に行つて世界を救ってくれるのも、一つの手である。

二人は小さなジレンマを背負っていた。

しかし、黙々と一行は進む。山を越え、森を越え、ひたすら目的地を目指す。

これも全て、交通網が全て遮断されたからだ。

マーベリックの暴虐による歴史的最大規模の未曾有の危機に、珍しく日本政府は迅速な対応を見せ、国民全員を一時自宅待機とさせた。その恩恵かしわ寄せなのか、日本国全土は静まりかえる事となった。

「俺・・・もう駄目だ・・・飛ぶ」

義明が悠太の肩を離し、立ち止まって肩で息をし始めた。

悠太と直人は仕方なく止まり、ため息を着いた。

「仕方ない・・・俺らも休もう。小田、飛んでいってもいいよ」

「マジか？」

「ああ」

悠太と共に行こうと飛行を我慢していたが、もう限界だ。馬鹿げていると思うが、それが義明なのだ。それに、ウズウズしていた。体が飛びたいと、大空を欲していた。

悠太は手の平に水を出現させ、義明に飲ませた。義明はそれを、一瞬で飲み干す。

「但し、アイツらに見つからないでくれよ。出来るだけ目的地から遠くに向かってくれ」

義明は何とか呼吸を整え、顔を上げた。

「分かった・・・じゃあ、県庁所在地で会おうぜ」

回りくどい言い方をしたが、悠太はそれがどこか分かった。

そして発射体制になった義明に、悠太は最期に声をかける。

「空飛ぶのも体力いらないか？」

「いや、一回高いところまで行けば、すぐに空気の流れに乗れる」

悠太は小さくうなずいた。

「分かった・・・じゃあ 死なないでくれよ」

俺が見てないところで。

悠太はそう言い加えた。仲間を失いたくない。少なくとも、俺が死ぬまでは生きていてくれ。

そのメッセージが、義明に伝わったのか分からない。しかし、義明は悠太に最期まで付き合おうとしているのは確かだった。

義明はすぐに飛び去った。

その姿が、どんどん小さくなっていく。

この能力を持つてから、自分は大地と一体になった気がする。プレートプレートの小さな動きを感じるようになったし、何よりも大地の悲鳴を。

大地が、終末の時を嘆いている。しかし同時に、仕方ないと飲み込んでいる。

だとしたら、自分はどうしたら良いのだろうか。

従うのは、新海政貴だ。自分は、あの人を選んで生きている。崇高な理念を掲げる、あの人物を選んで。

中込宏太はビルの上から都会を見つめる。日本中の人間が謹慎を余儀なくされている今、街は灯りでいっぱいだ。

これほどまでに、人間が集まることはもうこれ以上、無いのだろう。仕事に追われた父や母、そして塾に忙しい息子。そんな家族が同じ屋根の下で、共に何十時間も過ごすということは。

「早くこねえかなあ・・・」

アンの助言によつて、宏太はここで先鋒隊を叩くという使命を持ってここに来た。先方隊とはつまり、義明のことだ。空気空気の能力を用いて飛来するはずである彼は、必ずここを通ると言われている。しかし仮に来たとして、ここで暴れるのは気が引ける。一家団欒一家団欒を汚す趣味は無い。

「さみい・・・」

空を見上げると、夕日が沈み始めていた。真っ赤な空が、宏太の目の保養になる。

さて、

宏太はため息を着いた。

戦いは気が退ける。仮にも旧友だし、何よりも人間だし、ピース

ウォーカーを返してもらっていない。

しかし、戦わなければならぬ。全ては崇高なる理想のため。世界の終末が理想とは、シユールなものだが。

丁度百メートル先に、飛翔体を確認した。

義明は身を翻し、宏太と十メートルほどの間合いを取って着地した。

「ふわっ、あつぶねえな」

宏太の姿が見えたと思った瞬間の、地柱による襲撃だ。慌てて身を翻したが間に合わず、敢え無く義明は空気の力に頼ることとなった。

「よお、小田」

「何でお前がここにいるんだよ・・・邪魔だっつの」
スマン、と素直に詫びるのだが、その声色に反省の色は見られない。

「まっさんの指示だ。幾ら最強とはいえ、やはりお前ら『抵抗派』が怖いんだよ」

「それで？まず俺が先にここに来ると踏んで、ここで待ち伏せってことか」

「そういうこと」

完全に日は落ちた。いよいよ街中の煌きは栄え始め、義明と宏太は輝かしい光に包まれる。

「濱田達が来る前に・・・お前を始末しておく必要があるな」

「それに、決着もつけたいしな」

「そうだな」

義明は宏太の顔を見つめる。ここ一ヶ月で、宏太の顔は豹変した。戦場に送り込まれた人間の表情が豹変して帰還してくるのは、第二次大戦中には良くあったことだ。

「濱田のために・・・俺は、お前を始末する必要がある」

「そうか。こっちはまっさんの・・・新海政貴のためだ」

双方とも部下という呼び名がふさわしい。正に二人はそれぞれの王にひざまずいた「親衛隊」であり、良き「親友」でもある。

「お前は絶対・・・俺の手で始末する」

義明は両手を前に出して構えた。宏太も身構え、互いに火花を飛ばし合う。

「俺が勝ったらピーセウオーカー返してもらおうからな」

「いいよ」

お前が生きていたらな。

実際、義明は強大な敵になった宏太に容易く勝てるとは、思っていないかった。

しかし、勝てなくても、負けるつもりはない。必ず役目は果たす。

例え命を捨ててでも。

「さあ・・・最高の三分間にしよう！」

「こっちのセリフだ！」

空気と大地、二つの力が真っ向から衝突した。

二つの大きな力は相殺され、辺りには砂埃が舞い上がった。二人の視界は、一気に狭まる。

そんな中、最初に攻撃を当てたのは、宏太だった。

義明は頬ほおに拳をモロに喰らった。一瞬体を反らすのが、すぐに体勢を立て直 再び、拳をモロに喰らった。

義明は飛び退き、宏太から十メートルほど離れた。再び体勢を立て直し、頬をさする。

「くっそ・・・いてえ」

「どうした？貧弱になったか？お互い拷問に耐え切った仲間のはずだが」

「へ・・・あれにくらべちゃ、お前のなんて・・・」

義明は飛び上がり、瞬時に空気エアの刃を飛ばした。しかし、それは

すぐに宏太の地柱によって遮断される。義明は再度宏太に攻撃を加えようとしたが、それを宏太は地柱の襲撃によって妨害する。

義明は次々と襲ってくる地柱を避けるのに必死だった。アスファルトという防壁もものともせず、宏太はピンポイントで義明を狙う。明らかに、宏太は一ヶ月の前より強くなっていた。

「どうしたあ！避けるので精一杯か？」

宏太のハツラツとした声に、義明は歯を喰いしぼる。口の中が苦い。

「そんなわけ ねえだろお！」

義明は身を翻し、一回転して自分の周りの地柱を破壊した。そして更に体勢を整え、真っ直ぐ猛スピードで宏太に向かう。

初めてまともに、義明の攻撃がヒットした。宏太は殴られた右頬を押さえ、ゆっくりと倒れる。かなりのダメージだろう。空気という付加効力も着いていることだ。宏太の右頬はパツクリと避けていた。空気の力のおかげである。

「いってえ……くそお……」

宏太だけではない、義明の力も向上しているのだ。

「宏太……最期に聞かせてくれ。何でお前……まっさんの味方したんだ？」

寝転んだまま、宏太は小さく首を傾げる。

「どういうことだ？」

「お前は、捨て駒にされているんだぞ……」

宏太はククク、と小さく笑い、ゆっくりと立ち上がった。

「そんなことは百も承知だよ」

知らなかったはずだ。無駄な虚勢を。馬鹿め。

しかし、宏太は自信満々に義明の肩に手を置く。

「捨て駒でもいい。俺は、世界のためにやる」

「終末の推進を？」

ああ、と宏太は自信満々にうなずく。

おかしい。

し折る。義明は痛みにも悲痛な叫びを上げたものの持ち堪え、宏太が蹴りをいれた足を掴み、ヒジを使って足の骨を叩き折った。

宏太は絶叫しながら、義明を殴り飛ばした。義明の体は宙を舞い、しかし、地面に華麗に降り立った。

「ちつくしよお・・・」

宏太は片足立ちして折れた右足を押さえる。すると一瞬後、宏太は元のように立ち上がってしまった。

「ハハ・・・お前、魔法まで使えるようになったのか」

「応急処置だ。骨に地面の力を埋め込んだ・・・長くはもたない。衝撃で内面から砕ければ、人体に影響が及ぶ」

「お前がそんな難しいことば使えるなんてなあ・・・一ヶ月前までは日本語もあやふやだったのに」

「うるせえよ！」

義明は余裕を持った言い方をしながら言った。しかし、本当はろつ骨の痛みにも耐えるための口調だった。宏太は応急処置できるような能力だが、あいにく義明の能力はそれに適していない。

お互い、良いハンディキャップを背負った。

義明と宏太は、お互い視線を合わせる。一瞬のような時が、何時間にも感じた。

宏太が地面の中より地柱を発生させ、義明を襲った。能力開放のようだ。義明は空気の渦で地柱を次々と砕いていき、やがて空中へと飛び上がった。

「逃がすかあ！」

宏太のよく伸びる地柱は尚も襲ってくる。義明はそれを瞬時に避け、エアーカッターを繰り出す。しかし繰り出した先に、宏太は存在していなかった。

消えた？いや、

「しまった！」

義明が振り返るころには、もう遅かった。

宏太は義明よりはるか上空へと地柱の力で飛び上がっており、巨大

な岩の塊を携えている。
「これで終わりだあああ！」

それは、絶望を知らせる衝突音だった。

スキアーは役目を持って生誕した。影という元素が、それを物語っている。光、栄光を浴びるものには、必ず影が存在していて、その影によって時代は語り継がれていく。

スキアーは、そうでなくてならならぬ。影なのだから。

影は『導く』役目を司った。そして、明との協力によって、スキアーは首尾よく『導く』ことができた。

しかし、スキアーはまだ、役目を終えてはいなかった。ある重大なことを、スキアーは明から教授していたのだ。

スキアーはそれを、皆に教えようとはしなかった。何故か。それは、人間というイレギュラー因子がさせるものであった。

スキアーは今、罪の意識に苛まれながら、自らの理想を叶えようとしていた。

『光と影』

二つの元素を秘めて。

スキアー！。またの名を野中高亮。世が『先導役』と定めた、『世』への反逆者である。

私は常に学んでいる。墓石が私の卒業証書だ。

何か自分が自分を包み込む。水だろうかいや、空気だ。

義明は空気に包まれていた。まるで水の中に入れられたようにヒンヤリとしていて、それでいって柔らかい。

一瞬考えて、義明は今の自分の立場を思い出す。自分は宿敵の宏太と戦い、敗れた。特大の岩を喰らって。ならここは、死後の世界なのだろうか。

嫌に気持ちのいい場所だな、と義明は苦笑する。現実の世界より、よほどいいじゃないか。

自分は空気になったのだ。元素に還ったのだ。完璧な元素なのだ。人間という外殻を捨て、真の自分へと還ったのだ。段々、記憶も薄れていくような気がする。

その瞬間、目の前に光の塊が出現した。まるで水の中へダイブしたかのように、光の周りには気泡がたくさん付着している。それは気泡ではなく、空気の塊だということは一瞬後分かる。

「明……さん？」

薄れ行く記憶の中で、義明はその名を呼ぶ。

違う。

「の……なか……？」

明であって、高亮である。その光は人間のような造形をしていた。どちらかという中性的で、男でも女でもないような造形だ。なぜか義明は、その造形から高亮と明を彷彿させたのだ。

光が義明を包み込んだ。義明は抗うことなく、その光を受け入れる。心地よい感覚だ。

しかしその瞬間、義明の頭に膨大な情報が流れ込んだ。

義明は叫んだ。あまりの情報の量に、脳が悲鳴を上げる。体中が痺れ出す。

「同期……せよ？」

この光はそう言った。ならば。

自分は今、世界中の空気と同期したのだ。

その刹那、義明は光から投げ出された。成す術もなく、義明は奈落へと落ちていく。

光が、遠ざかっていく。

「よしあきいいい！」

自分で自分の名を、読んでいた。

そのまま義明は、ゆっくりと意識を失っていった。

目を覚ますと、体中に激痛が走った。骨が所々折れていて、皮膚が所々が切れている。能力者であるにも関わらず、軽い脳震盪を起こしているようだ。

義明はゆっくりと起き上がった。周りを見渡してみると、自分を中心にして、放射するように攻撃の跡が残っている。すさまじい攻撃だったことが分かる。周辺のマンションは原型もとどめていない。道路のアスファルトは剥がされ、元の正常な大地を見せている。

家族団欒のところすみませんね と、義明は心の中で詫びる。そろそろ自衛隊が来てもいい頃なのだが。

「・・・生きていたか」

宏太の残念な声が聞こえた。しかしその声には同時に、喜びの気持ちも含まれているように感じる。

「悪かったな・・・俺も・・・まだ・・・死ねないんだよ」

そう言つて、義明は全力を出して立ち上がる。足の骨は幸いにも折れていないようだ。

最悪でも相打ち。

その目標が今や、最善策となっている。

「もう・・・最期にしよう。全部・・・これで」

「そうだな・・・」

義明は笑みを浮かべ、宏太を見た。宏太も笑みを浮かべる。二人の目は、静かに合った。

この笑みが何を意味するのか、それは二人にしか分からないだろう。友情か、諦めか、それとも憎しみか。

「最期だ・・・俺は全力を使う！」

「こつちもだ！」

義明は手の平を広げ、全神経を集中した。全ての空気を集め、渦を巻かせる。体中に激痛が走るが、今は構ってられない。血で目の前が真っ赤に染まり、赤色の死の世界になる。

二人は雄たけびを上げた。

宏太の地柱、義明の空気の塊が、勢い良く衝突する。半径五百メートルのもの全てを巻き込んで破壊していく様はまるで、台風の襲撃のようだった。

やがて力は相殺された。二人はそれぞれの攻撃を辞め、互いに向かつていく。

叫び声が、綺麗に重なった。

義明の拳と、宏太の拳が衝突した。再び攻撃は相殺され、尚も二人は攻撃を続ける。

何回も成される能力を駆使した殴り合いは、まるで花火のように綺麗だった。地理際の花の美しさ、とでもいうのだろうか。互いに死線を乗り越えた両戦士のメンタルは、格段にたくましくなっていた。

やがて、一本の尖った地柱が、義明の腹部を捉えた。貫通こそしなかったものの、痛々しく、深くめり込んだ。

義明は血を吐いて倒れた。恐らく、五臓六腑の一つが破裂したのだろう。口からはとめどなく真っ赤な液体が流れ出る。

「これで終わりだ・・・すまなかつたな」

宏太が岩の塊を手の平の上に出現させた。目の前がボヤけるせいか、よく見えない。何よりも、痛みが酷かった。

「・・・じゃあな。また、どこかで会おう」

会えたらな、と義明は付け足す。宏太は悲しげな表情を見せた。これが、宏太が最期に見せた、人間らしい表情なのかもしれない。宏太が手を振り下ろした。

巨大な岩の塊が、グングン近づいてくる。轟音を放ち、猛スピードで。

「じゃあな・・・宏太」

義明は目をつむり、安らかに言った。これが、最期の言葉だ。

最期の鐘のように、その音は響いた。哀しげに。

宏太は倒れた。胸にはポツカリと穴が開き、そこからは大量の血を流している。心臓はもうそこに存在していなかった。

義明の放った空気エアの刃カッターは、瞬時に宏太の胸を貫いた。

宏太が攻撃をしようと振りかぶるその瞬間。それが、宏太の最大の隙だった。

宏太の放った岩が、義明のすぐ傍に落下する。まるで宏太が倒れるように。

義明はフラフラと、倒れている宏太に歩み寄った。

「良い・・・顔・・・してるじゃねえか」

なんと清しい顔だろうか。世に従い、世のために生き、世のために戦った男の 死相だ。

義明は宏太に最期の言葉を掛け、そのまま座り込んだ。立ってい

ると、気絶してしまいそうだからだ。

じゃあな、宏太。

義明は静かにピースサインを出した。

悠太と直人が甲府にたどり着いた時には、もう日の出が始まっていた。

つまり、終末の当日である。

「小田……」

悠太は義明の満身創痍な体を見て、悲痛な声を漏らした。

「ゴメン……一緒に行けねえわ」

傍に転がる宏太の死体。義明は、宏太に勝つたのだ。

しかしその体から、相当の死闘だったことが伺える。体中からはとめどなく血を流し、右手と左足はあらゆる方向に曲がっている。右目は潰れていた。

「小田……大丈夫か」

「見ての通り……駄目だよ。まさかここまで酷いとは、思わなんだ。気づいたら、体がこんなになってるなんてな」

直人はすぐさま、アドレナリンのことを思い出した。恐らく、義明は戦闘中アドレナリンがとめどなく多大な量で発生したのだろう。アドレナリンには痛みを和らげたり、止血をする力がある。常人の倍のアドレナリンが出たはずである。そうじゃないと、これほどの体で戦うことは不可能だ。

「ゴメン……濱田。お前とは一緒に行けない」

悠太はかぶりを振った。

「ああ・・・ゆっくり休んでくれ」

そう声をかけた瞬間、義明はゆっくりと寝転がった。

「もう使いもんにならねえな・・・多分、もう俺は死ぬ・・・目も開けられねえよ」

「お・・・おだあ・・・」

悠太の涙声が、義明に掛けられた。義明は、安らかな笑みを浮かべてそれを受け止める。

「早く先に行け・・・終末は・・・今日だろ？」

何かを言いかけた悠太を、直人は静かに立たせた。

「・・・行くぞ・・・小田、また会おう」

「へへ・・・あっちでな」

濱田、行くぞ。そう直人は言い、悠太の肩を掴んだ。

悠太は義明に背中を向けた。

「必ず・・・世界を救えよ！」

頼もしい声を、背に浴びながら。

「どこに行つたんだ？野中は」

「さあ、知らない。彼は放浪者だからねえ。まあ何処に行こうと、構わないよ」

全ての始まりの地。アンノと政責は『アナザー』の発生を待ちわびていた。同時に、『抵抗派』の襲来にも、備えていた。

「で？・・・小田が真つ先に来るって予想は、当たったのか？そろそろ能力を使ってくれよ」

「遠慮させてもらう。千里眼のような能力はあるけど、ギリギリまで何も知らない方が、楽しいってものだ」

アンノはもつたいぶるように言った。

「あいつは・・・俺の大切な仲間だ」

「もちろんそれは周知の事実。でも、友達と身分つてのは違うからね。所詮彼は下っ端」

「・・・そうだな」

政貴は静かに町を見渡す。

『光が降り注いだ日』以降、この土地は政府によって外界から遮断された。名義上は『放射能汚染の確認』であるが、実際は『怪物の生態調査』である。この地は、自衛隊によって守られていた。

しかしそんな自衛隊は、先ほどすぐに政貴とアンノと翔馬によってすぐに壊滅させられた。強大な軍事力も、元素の前では無力であった。

町はすっかり変わり果てた。ほとんどが怪物によって蹂躪され、一ヶ月前の平和な田舎町の観光名所ではなくなっている。終末後の世界は、まさにこうなるのだろう。

「・・・政貴、君は自覚する必要がある。君は完全な覚醒を遂げて四大元素の中で一番の力を手に入れたんだ。元々それが、火の役割なのだからね」

「破壊と創造」

アンノは微笑を浮かべたままうなずく。

「自覚出来ているようだね」

「しなきゃ、生きていけん」

そうかぁ、とアンノは小さく笑う。本性を見せる前のあのあどけない顔は、何処へ消えたのか。

その時、まるで雪のように、光の塊が降り注いだ。小さな太陽のようだ。

「・・・それは・・・」

「元素だよ」

まさか、と政貴は顔を引きつらせる。

アンノは当然のようにならずいた。

「・・・残念だったね これは、宏太君の元素だ」
それは、『宏太が死んだ』ことを意味していた。

「・・・宏太」

「残念だったね・・・でも、仕方ないさ」

義明の元素は来ていないということは、義明は死んでいないということだ。少なくとも、今は。

悲しむ政貴を横目に、アンノはその元素を飲み込んだ。空間の能力の恩恵である。

義明は悠太達の姿が見えなくなると、立ち上がった。

「ゴメン濱田・・・まだ俺には、やることがある」

満身創痍の体を引きずりながら、義明は呟く。飛べる力が残っているだろうか。

死の淵へと宏太によって叩き込まれたとき、義明は世界中を繋がる空気と同期した。

そして、信じられない事実を掴んだ。それは、恐らく『地面』の元素である宏太も、気付いていただろう。

義明は深呼吸をしてから、再び呟く。

「影め・・・」

野中高亮。
鍵はそれだった。

人生は戦うが故に美しい(前書き)

名言参照・ グリル・パルツァー「戯言と警句」

人生は戦うが故に美しい

一ヶ月ぶりに故郷へ帰還した。一ヶ月ぶりだというのに、何故か百年ぶりに来たかのように、郷愁の思いがこみ上げる。

悠太と直人は走り続け今、小学校の前に差し掛かった。懐かしの校舎だ。怪物達によって校舎はボロボロなもの、原型は留めていない。

「・・・小田・・・生きているのかな」

悠太は下を向きながら言う。置いてきた義明のことが気になるのだ。そのはずだ、義明の体は満身創痍で、とても生きていられる状況ではなかった。

直人はメガネの位置を修正すると、冷静に呟いた。

「長くは持たないよ。・・・あの出血の量からして、通常の間人ならばもう死んでいるはずだ。体の機能も所々失っているみたいだしな」

義明の傷だらけの体 右手と左足はあらゆる方向に折れ曲がり、片目は潰れていた。地面は真っ赤に染まるほど出血しており、その量は計り知れないだろう。

「自衛隊が来て救出してくれば話は別だ。でも、自衛隊なんて来てなかっただろ。あんだけ時間が経っても」

「何でだろう・・・」

直人はため息をついた。

「終末が近くなって、マーベリックの出現が頻繁になったことが予想できるな」

そう言いながらも直人は、悲しみを押しかかっているように見えた。友の死はやはり、辛いものなのだ。

「・・・みんな、死んでいくのか」

「それが宿命でもある。俺や小田は、お前を守るために生きているようなものだ」

「そ、そんな」

「良いんだ。俺も小田も、もう覚悟している。だから」
その時、すさまじい轟音が直人の声を掻き消した。

直人は瞬時に音のあった方を振り向くと、広範囲に電撃を放った。
小さく金属音が鳴り響いた。

「・・・俺にも来たようだな」

死ぬ時が。

目の前に現れたのは、日本刀を携えた翔馬だった。

「よお、濱田・・・それに、メガネ。久しぶりだな。会って早々、俺を攻撃するなんて」

「・・・濱田、行け」

直人は低く唸るように言った。

「なんだ新海、無視か？おじけづいたか？」

「・・・早く行け・・・」

悠太は困惑しながら小さく返答する。

「し、新海・・・」

これ以上仲間を失いたくない。そんな弱音を、今の直人に打ち明けられることは出来なかった。直人は決心している。鉄のように固い決心を。それを、悠太は崩してはいけない。失望させてはならない。

「そちらのリーダー様は勇気が無いんだとよ。いい加減に」

「行け！世界を救え！」

その言葉で、悠太は再び走り出した。二度と、直人の姿は振り返らない。ギリシア神話の琴奏者のように。

翔馬は悠太を追おうとはしなかった。

「・・・ようやく決着をつけられるな」

直人は冷静に応える。

「・・・いいのか？追わなくて」

「いいんだよ。俺はお前と決着を付けたい」

『保守派』の人間は全員こうだな、と直人は思う。政貴にしろ、翔馬にしろ、使命というよりは、戦いを愛しているようだ。戦いの

中から快樂を得ている。戦いからしか自分の生きる意味を見出せない。使命の元に確固たる意思を持つ『抵抗派』とは違って、彼ら『保守派』は軽々しい。

しかし、それが強さの秘訣かもしれない。

「そうか・・・なら」

直人は拳を鳴らした。電撃を手の平全体に通わせ、その感触を確かめる。そして、更に言う。

「やってやる。喜べ」

「そりやどうも・・・ヘッ・・・やっとだな」

もう振り返らない。そう決意した悠太は、『光が降り注いだ日』に光が降り注いだ駅を目指した。あの場所で恐らく、アナザーが開始された。

急に妙な動悸がして、悠太は立ち止まった。

体中に悪寒が走る。まるで体全体が闇に包まれそうな感じた。

悠太はゆっくりと上空を見上げる。

この感じは。

悠太は再び走り出した。

始まったのだ、アナザーが。

電撃と日本刀が重なった。直人はすさまじい力で押し返され、うめく暇もなく弾き飛ばされた。直人は地面を転がるが、すぐさま起き上がる。

「どうした、随分弱くなったなあ」

翔馬は齒を出して笑う。翔馬の力は一ヶ月前より格段に向上していた。修行の成果なのだろうか、刀さばきも力も以前とは全く違う。

クソ、と直人は悪態をつく。ついたところで、どうにもならないが。

翔馬が襲来してきた時、直人は死を覚悟していた。一ヶ月前闘ったときも、力の差は歴然だった。一ヶ月で相手が修行するのは当然だったし、力の差を一ヶ月で埋めることは出来ないと自負していた。自分には勝ち目が無い。そう考えていた。

だから、今この劣勢の状況は、予想通りということとなる。

勝てないのは当然だ。ならば。

直人は特攻を考えていた。力を最大限を超えるまでに膨張させ、翔馬共々自ら命を落とす。勝てなくてもいい。しかし、絶対に相手にも勝たせない。

しかしその作戦も、翔馬の風の如き早さの前に、実行出来ないでいた。翔馬は息を尽かせる暇も与えず、次々と攻撃をしかけてくる。それに、自分自身の死への恐怖もあった。

「うるせえ」

直人は一蹴し、再び翔馬に向かっていった。

直人の放った一筋の電撃が、翔馬の刀に巻き付く。翔馬はそれを斬ろうと刀を振り回すが、まわり憑いて離れない。直人はすかさず電撃を引き寄せた。

電撃は縄のように刀を引き寄せた。しかし、刀は翔馬の手から離れない。

「考えが、甘いんだよ」

翔馬がもう一本の日本刀を振り下ろし、電撃を断ち切った。電撃はガラスのように砕け、ピカピカと雷のように光る。

直人は舌打ちをし、更に電撃をけし掛けた。数十本の電撃の束が翔馬を襲う。翔馬は二本の日本刀を華麗に舞わせ、その束を瞬時に切り崩した。

翔馬は再び余裕の言葉を言おうとした時、目の前に直人の姿がないことに気づいた。

やられたか？

そう思った時にはもう、遅かった。

直人は翔馬の頭上に居た。すぐさま日本刀で防御しようとするがその日本刀は電撃で拘束されていた。

翔馬の顔が引きつり、直人は冷静に笑みを浮かべる。

特大の電撃 雷を、翔馬は浴びた。その威力に耐え切れず、翔馬は悲痛な叫びを上げ、倒れた。

尚も、直人は攻撃してくる。地面に倒れる翔馬に、電撃で絶え間なく攻撃を与える。

翔馬の目の前が揺らぐ。しかし、やられるだけの翔馬ではない。負けないという強い念が、翔馬を動かした。

「う、うぜえんだよおお！」

翔馬が起き上がり、二本の日本刀を舞わせ電撃を斬り、直人の腹部を切り裂いた。全て、一瞬の出来事。常人には到底できない所業だ、全て『剛』の元素が成せる。

断末魔の叫びが討ちあがり、二つの人影が地面に倒れこんだ。

翔馬と直人は、双方苦悶の表情を浮かべ、コンクリートの地面に血を吐いた。

「・・・クソツ・・・やりやがって・・・」

「お・・・お互い・・・さま・・・だ・・・グフツ」

直人の腹部からは大量の血が流れ出ていた。腸こそは外界にこぼれ出ていないが、今にもこぼれ出そうなほど、傷は深い。これが義明の状態なんだな、と直人は改めて思う。この世というものを投げ出したくなるような痛みだ。よほどの精神力がない限り、発狂してしまうだろう。義明の精神力は、あの拷問で鍛えられたのだ。

翔馬も口から血を流している。恐らく電撃のダメージで、内臓の一つが破裂したのだろう。体中にヤケドしたような跡が目立って、どこか原爆の被爆者を彷彿させる。

直人は心の中でガッツポーズをした。想定外だった。これほどまでダメージを与えられたのは。

「まだ・・・まだ・・・終わって・・・な・・・い」

ところが、翔馬が体を震わせながら立ち上がった。直人は成す術もなく、翔馬が立ち上がるのをジッと見ているしかなかった。

足元に転がる二本の日本刀を拾い上げ、翔馬は直人の目を見た。思わず直人は、小さく低い声で唸った。

翔馬の目には、猟奇的な何かが映っていた。

終末は始まっている。悠太はそう確信した。大気が、空間が、震えるのを肌で感じる。四大元素の一つだからだろうか。血が沸き、肉が切り刻まれるような、残酷な感覚。大きなエネルギーの集合体が近くで、引き寄せ合っているのだ。

そしてもう一つの元凶が今、悠太の目の前にいる。

アンノ。突然その正体を見せ、悠太を一瞬にして廃人へとさせた『闇』の元素者鬼塚陽を、一瞬にして絶命させた張本人。二つの大元素をその小さな体に秘める、ミステリアスな可愛らしい少年。

「・・・何の用だ・・・」

悠太は震える声で言う。不安は隠しきれなかった。

「心配しないでいいよ、別に君と戦いに来たわけではない」

アンノは可愛らしく、まだ声変わりも始まってないような声で言う。

「・・・元素の殺傷は、気が引けるんでね。『空間』の元素を持つが故の、悩みだよ」

「・・・退いてくれ・・・アナザーを止める」

アンノは笑みを浮かべた。

「そうか・・・君はそうしてしまうんだね・・・大元素なのに」

「ああ・・・俺は人間だ」

アンノの声が、一段と低くなった。

「・・・イレギュラー、としか考えられないね」

悠太は顔をしかめた。

「どういうことだ？」

「いいや、別になんでもない」

声は通常に戻るが、違和感はいつも通りだ。

アンノは両手を挙げた。

「僕はどちらにもつかないよ。大元素だから、一応『保守派』というヤツにつくけどね。これもイレギュラーさ」

「じゃあ・・・」

「最後に忠告をしにきたんだ。君に」

忠告？と悠太は首を傾げる。アンノは相変わらず冷たい表情で、悠太の顔を覗き込む。

「火、水、空間、時間の四大の元素は、それぞれ役割がある。その中でも、『火』と『水』は、物質的なものを担当している。

単刀直入に言おう。君は新海政貴に勝てることはありえない。彼は『火』の能力者であり、完璧な覚醒を遂げて、真の役割である『創造と破壊』を司った」

「・・・だから？俺は勝てないと」

「そうだ。君の役割は、『維持と記憶』。どちらかというところ、火をサポートするべき立場なんだ。でも、もちろん水も必要さ。『創造』すれば『維持』が必要だし、『破壊』すれば『記憶』も大切になる。水なしでは、火は役割を完璧にもたない」

「でも、戦いとなると、俺は勝てない」

そういうこと。とアンノは言った。その声には、軽い残虐なものを感じる。

「どうせ死んでも君は元素へと還る。でも、君は人類を守りたい」
「そうだ」

「諦めたほうが得だよ。人類は滅びる。法則なのだから」

やや沈黙が流れた。

やがて、悠太は小さく笑い出した。

「ちなみに聞きたい・・・アンノと俺だったら、どちらが強いんだ？」

アンノは目をパチクリさせたが、平静を保って口を開いた。

「元来、物質面を司る君が強いのは当然だ。でも、僕は『空間』の能力で」

「そうか・・・ハハツ、なら、お前は今死んだな」

アンノは思わず疑問の声を漏らす。そんなアンノの頭に、悠太は手を乗つける。『いい子いい子』というやつだ。

悠太の顔が豹変し、急に真面目な顔になった。

「俺は行く。勝ち目がなくても、世界が滅びそうでも」

アンノの頭から手を離し、悠太は走り出した。目指すはアナザーの発生源にいろであろう、新海政貴だ。

アンノは小さく笑い、悠太の背中を見つめた。

面白いものだな、人間は。

本日は晴天なり

翔馬が勢い良く振り下ろした日本刀を、直人は電撃のバリアを作って防いだ。

「まだ元気が・・・あんのか・・・」

日本刀の押し付ける力が強くなる。直人は当然バリアの出力を上げることとなり、その分体には負担が来た。

苦痛に直人は顔を歪ませた。まるで体液が滲み出ていくかのよう
に、体中から力が抜けていく。

「ほらあ！あきらめろお！」

その瞬間、直人は意を決して絶叫し、全力全開で電撃を発した。

そのすさまじいパワーで翔馬の日本刀は吹き飛び、空を舞った。

やがて、静かに地面に刺さる。

直人は血を吐きながら立ち上がった。

「まだまだ・・・まだ・・・終わってない！」

「その体でよく言えるなあ・・・もう駄目だな、お前」

翔馬が直人の下腹部に目を向ける。つられて、直人も目を向けた。骨がむき出しになっていた。普通なら腸がダラリと垂れ下がるが、その垂れ下がる腸も存在しない。まるでゾンビだ。常人の数百倍ものアドレナリンが、痛みと苦痛を何とか最大限まで和らげている。直人は何故か笑う。何故だろうか、天を仰ぐ。

空が綺麗だ。この青は、水のおかげだ。

「悠太、あとは頼んだ」

俺の役目は十分果たしたよ、と直人は更に付け足す。ゴメンな、あまり加勢できなくて。

「・・・諦めたのか」

翔馬の声に、直人は笑みを浮かべて反応する。

「ああ・・・もう駄目だな。最期にこの空を拝めただけ、幸運というものだ」

直人は数百という人間の命を殺めた。この一ヶ月間で。その数は、テロリストもビックリな数値だ。それにも関わらず、直人はこの綺麗な空を見上げていられる。なんと公平で、理不尽な世界だろう。

「そうか・・・なら 俺の勝ちだな」

翔馬が地面に突き刺さる日本刀を抜き、静かに堂々と構える。

「ああ・・・お前の勝ちだな」

そう言いながら、直人は翔馬の目を見つめる。

いつもと変わらぬ目をしているが、どこかが変だ。しかしその違和感に気づいただけで、死の近い直人にとってはどうでもよかった。

じゃあな

翔馬の声が響いた。どこか悲しげで、どこか嬉しそうだ。人間味があり、残虐性がある。

直人は目をつむり、両手を上げた。

これが、最期だ。

翔馬の地面を蹴る音がした。恐らく能力上、翔馬は瞬時に目の前に来るだろう。

そして、

冷たい感触が腹部を襲った。

目を開けると、腹を刀が貫通していた。血は出ない。血を出すには、もう直人は出血し過ぎていた。

アドレナリンの現象と共に、壮絶な痛みが体中を襲う。しかし、叫びを上げるような力は残っていない。

なぜなら、最期の役目を果たさねばならないからだ。

「……か……川口……」

直人は自分の腹部を貫通する日本刀を見つめたまま、息も絶え絶えになって言った。

「……なんだ？」

川口が首をかしげる。

直人は小さく笑みを浮かべた。

「……じゃあな」

その瞬間、日本刀を伝って、電撃が翔馬の体を襲った。翔馬は思わず絶叫する。

これが直人の最期の抵抗だ。体内に密かに蓄積させた電撃を一気に放出する。特攻隊とは、よく言ったものだ。

死に際の、最大の電撃攻撃だ。電撃は翔馬の皮膚を焼き焦がし、体内を縦横無尽に駆け巡り、五臓六腑をズタズタにする。

二人は折り重なって地面に倒れた。

二人の表情は、恍惚としていた。戦士の死に際のような、快活な表情。

そして、『抵抗派』を支えた『雷鳴の覇者』は、静かに息を引き取った。

青い空を見つめながら。

地面は乾いていた。駅が元々あった場所には大きなアリジゴクの巣のような穴が開いており、まるでブラックホールのような。政貴はその中心に立っている。エネルギー体と共に。

悠太は平然とそのアリジゴクを降りていく。ここがあの小淵沢とは思えないほど、大きく辺りの環境を変えたアリジゴクだ。

政貴は腕を組んで悠太を迎え入れた。笑みを浮かべながら。

「待っていたぞ」

そう言いながら、政貴は頭上に浮かぶドス黒い球体を指差す。まるで陽が放つような、漆黒の球体だ。地球が公転するかのようにギョルギョルと音を立てながら回っている。

「アナザーは始まった」

「その球体がか」

随分小さいんだな、と悠太は笑う。あまりにも滑稽で、拍子抜けする。

「これが巨大化して・・・世界と一つになる」

つまり、アナザーの種というわけだ。開花は近そうだ。こうやって話している間にも、アナザーの種は小さく膨張し続けている。

「世界は終わる・・・素晴らしい瞬間だ」

「よく言っぜ・・・正気を疑う」

悠太ははき捨てるように言ったが、むしろそれが政貴にとっては嬉しいようだ。

「俺は至って正気だよ。俺は、世の崩壊を支持するからな・・・」

「人間なのにか」

「いや、元素だからだ。元素ならば・・・従うのは当然だ」

人間の立場と、元素の立場。その二つの立場から見て総合的に判断すれば、政貴の言っていることは正解であり不正解だった。

悠太はため息をついた。

「俺は最後まで・・・人間の味方だ。・・・悪いが」

政貴は拳を固めた。

「そうか・・・ならば・・・」

戦うしかないな。

人類存亡を賭けた戦いだ。

『火』と『水』、『創造と破壊』・『維持と記憶』が遂に、
最終に衝突する。

影の手

四大元素はプログラムのようなものだった。そして、その四大元素も同じく。

唯の命令に従うことしか能が無い、というべきだろうか。元素は宇宙を、地球を創造した後は、ただ動き回る光の塊だった。しかし地球創造後、ある一つのイレギュラーが誕生した。人間である。

人間は他の生態系とは種類が違った。本能という基盤の上に、思想や言語や崇拜などの理念を持ち、他の生態系をかき分けて生態系の頂点に君臨した。まさに、元素とは対の性質である。プログラムに従うのではなく、プログラムを産み出す。

元素は不思議とそれにひかれた。プログラムを産み出す存在と、プログラムに従う存在。それが結合したら、どうなるのだろうか、と。

かくして、元素は人間となった。強いて言えば、人間という装甲を取り付けた元素である。

その人間は将来、『マーベリック』と呼ばれるようになった。最強にして、最悪の存在。たった一人で一国の脅威となる孤高にして恐怖の存在。

元素は人間を過信し過ぎた。人間は、とても脆いのだ。しかしそんな中でも、上手く元素を操る者たちが居た。

人類の命運を握る、『能力者』達である。

火と水、互いに正反対の性質が衝突した。赤と青が混じりあい、紫色のエネルギー体がガラスのように砕け散る。

二人の力は格段に向上していた。四つの元素が一同に介したあの

時からだ。

悠太の出す水の力は、通常の十数倍にも膨れ上がり、規模も拡大していた。今の悠太の能力ならば、世界の支配は容易だろう。

しかし今、悠太は世界を救うために戦っている。仲間を犠牲にして。

再び政貴の業火と、悠太の津波が衝突した。その威力はすさまじく、二人が戦うアリジゴク状の穴は、更に削られていく。

しかし、問題の『アナザー』の種であるエネルギー体は、破壊されないままだった。やはり、相当な威力が必要なのだろう。

「強くなつたなあ！」

政貴は笑みを浮かべながら叫ぶ。

「当たり前だよ！・・・お前に負けられるかよ！」

悠太は吐き捨てるように言う、再び津波を発生させた。

津波は政貴を襲うが、すぐに政貴の業火によって相殺されてしまふ。

一進一退の攻防だったが、ここで政貴が行動に出た。政貴は瞬時に炎の塊を連発させると、その体格からは想像も出来ないような俊敏さで、悠太に迫った。悠太は炎の塊の処理に追われ、易々と政貴に接近される。

身構えたところで、遅かった。政貴の燃える拳が悠太の腹に突き刺さる。悠太は喘ぎ、小さく悲鳴を漏らすしかなかった。

悠太の体は上空へと打ち揚げられた。数百メートルほどだろうか。政貴は更に追撃を加えようと、打ちあがる悠太に更に再接近した。

今度は、悠太は防御をすることが出来た。しかし、防御のみだ。悠太の作り出した青色のシールドが、烈火の拳によって打ち破られる。悠太はその衝撃で仰け反り、更に相手にスキを見せ付けた。

悠太の顔面に、業火の球が衝突した。その威力は、数百メートル下界にまで炎の先端が届くほどである。

悠太は絶叫しながら、威力に耐え切れず弾け飛んだ。

もの凄い落下速度で地面に落下し、いや、突き刺さる。幸いにも

土だったが、ダメージは激しかった。

「どうした？負けてられないんじゃないのか？」

悠々と言い放ちながら、政貴が地面に降り立った。悠太は思わず、痛みと憎しみで舌打ちをする。

悠太は痛みを堪えながら、フラフラと立ち上がった。さすが強大な実力者である。外傷は何一つ目立たない。

「まだ・・・負けてられねえよ」

ここで悠太は初めて、自分が立つ所が自分の母校の校庭であることに気付いた。夏貸しの母校だ。まさかこんな形で、再び母校の土を踏むとは思っていなかった。

政貴は校庭の土を見つめながら言う。

「俺らの故郷だ。俺らの、原点だ・・・さあ、土となれ！」

「こっちのセリフだ！海の藻屑もくずにしてくれらあ！」
再び、業火と津波が衝突し合った。

義明は満身創痍の体を引きずりながら、とある森へ来ていた。森というより、樹海だ。生い茂る木々は来る者の方向感覚を無へと引きずり込む。

そんな樹海の中で、義明はただひたすら歩き続けた。片目を失ったことで方向感覚を失い、左足が思うように動かず、右手はダラりと力なく垂れる。絶えず吐血しており、もはやいつ樹海の一部となってもおかしくない。しかし、義明は止めなければならなかったの

だ。彼の暴虐を。

やがて、義明は立ち止まった。

その虚ろな目で、目の前の者を睨む。

「・・・野中」

高亮は両手を広げて見せた。

「良く来たな・・・小田。まさかお前がここに来るとは」

「あいにくだな・・・俺は知っちまったんだから」

「そうだな・・・ハハ、全てが明るみになる時代とは言うが、その通りだな。始まりは光で、終わりも光に照らされる」

隠し事が出来るはずもなかった。世界の異変は、いち早く自然事態が察知する。だから義明 宏太も、気付いたのだ。悠太や政貴も気付けたはずだが、戦いに集中し過ぎて気付け無かった。

義明と宏太は、死線を乗り越えたことで、その重大な高亮の贖罪を知ることが出来た。

やはり、偉大なる自然界である。

「野中・・・いい加減隠すのは辞めたらどうだ。お前は役目を果たしていない。導きれていない」

「どうということだ？」

高亮は首を傾けてとぼけて見せた。恥じるべき姿だ。世が与えた役割を、拒絶した男の姿だ。

「分からないのか・・・お前は、何かを隠しているはずだ」

高亮はフフン、と鼻で笑った。

「穴だったな。・・・お前が知るとはな」

「俺は、空気だ」

あの時、あの死に掛けたとき、義明は全てを知った。

高亮の贖罪を。

「そうだ・・・俺は明から受け継いだ全てを、お前らに教えなかつた」

「最も大事なことをな。・・・最悪だ」

「最悪と呼ばれても構わない。俺もそれを自覚している だがな」

高亮の声が、一段と低くなる。

「俺は俺の理想がある。理想のためなら 役割など、知ったこつちやない」

「愚かだな」

「そうさ。人間とは・・・愚かな生き物さ。俺はある意味元素的で、人間的な答えを導き出した」

「何だ？」

「これだよ。この行為自体が、それなのだよ」

高亮は最大の罪を犯していた。

スキアー 影 野中高亮 の役割は、『導く』役割だ。彼は、その役割を持って、四大元素に『光』や『闇』と共に創生された。

高亮は致命的な事実を隠し通していた。

『アナザーの種』は、二つの地で同時発生する。

つまりそれは、現在世界を救おうとしている濱田悠太の苦勞を、水の泡にしようとしているということだ。種を二つ破壊しなければ、世界の終末は止められない。

「ふざけるな・・・お前・・・何が目的だ!」

「もちろん、世界の終末だよ」

義明は口に溜まった血を吐き出した。

「他にもあるはずだ・・・元々世界の終末が目的ならば、俺ら『抵抗派』に真実は教えないはずだ」

あれだけ高亮は三人に伝えてくれたのだ。それから考えてみると、今回の高亮の反逆は「中途半端」なものだ。高亮らしくもない。

高亮は静かに笑った。

義明はそれを凝視した。

「何がおかしい？」

「・・・そうだよ、俺には他にも目的がある」

「・・・なんだ？」

高亮は両手を広げた。

「俺が世界を支配する・・・この『種』と共に影を牛耳り、世界を牛耳り、世界の頂点に君臨する」

「そんなことが」

「出来るのだよ。俺は、『光』の元素を秘めた。そしてその『光』を、終末を告げる『アナザー』の光へと変換させる。そうすればエネルギーは俺のものだ・・・。弊害として、俺の元素『影』は、より強く色濃いものになる・・・」

「馬鹿な！」

つまり、野中は自らを、『光が降り注いだ日』と同様の強烈な力を持った『光』とさせるのだ。『アナザーの種』が持つエネルギーを、自らが取り込んだ『光』の元素に利用することによって。

高亮の目的は、世界の支配だった。鬼塚陽と同様の思想を、彼は秘めていたのだ。異常なまでの自己顕示欲。

闇と影は同義であり、影は光の産物。まさに高亮はそれを利用していた。

初めから、これが目的だったのだ。

『終末』が起きて、最期に死ぬのは人間ではなく、元素なのだ。何故なら、元素は力を持っている。故に怪物達は本能に従って後回しにする。

それは高亮によって、最も厄介なことだった。世界の終末が完全に成功する直前に、『種』の膨大なエネルギーを自らのエネルギーに変換し、怪物たちやマーベリックを一掃させ、残ったわずかな人類と共に再び世界を構築しようとしていたのだから。それに抗うであろう四大元素を始め元素達は、邪魔で仕方なかった。

そんな野中高亮に、あるイレギュラーが舞い込んだ。

「濱田悠太や、新海直人や、小田義明が、世界の終末に反対したん

だよ」

「・・・それが、イレギュラーなのか？」

「ああ、そうだ。恐らく世も考えていなかったようなイレギュラーさ」

本来、人間というイレギュラーな存在であろうとも終末が近づけば、世の原理によって、『帰属意識』という潜在意識が発せられるはずだった。世への帰属。つまり世への忠誠。

しかしその帰属意識が、人間という装甲の異変によって、発せられなかった。

理由は不明である。しかし、高亮はそれをチャンスとした。

高亮はスキアーと名乗り始め、二つの派閥つまり『抵抗派』と『保守派』を行き来し、情報を上手く渡らせ、両派を衝突させた。更に、敵意も植え込んで。

高亮の計略は大成功だった。

義明が異変に気付くまでは。

「しかし・・・もう遅い。俺はここでお前を殺し、計画を想定通りに実行する」

最大の罪だった。高亮は生まれた理由そのものを、拒絶したのだから。

全ては、高亮の手の平の上で行われていたのだ。

義明は怒りに体を震わせた。満身創痍じゃなければ、飛び掛っていたところだ。

「てめえ・・・許さない」

「別に許してもらうつもりはない。俺は、俺のやりたいことをやる」
世界を巻き込んだ自己中心的行為だ。思わず義明は齒軋りする。

義明の小さな声が響いた。

「なんだって？」

高亮は聞き取れず、聞き耳を立てた。

「・・・お前は・・・俺が止める・・・」

「ハハ、止められるならな」

義明は声を張り上げ、両手を前に突き出した。

「止めてやるさああああ！」

空気の元素、最大の抵抗だった。

力の差は歴然としていた。悠太の攻撃を政貴は楽々と跳ね返し、回避していく。

悠太はその間にも数発の攻撃を喰らい、体はボロボロだった。

「く・・・くそ・・・ま・・・まだだ・・・まだ・・・」

そんな悠太の姿を見て、政貴は首をかしげる。

「不思議なやつだな。もう世界は終わる寸前だというのに、まだ戦おうとしている。既にマーベリックの暴走で、世界は数億という

人口を亡くしているんだぞ？」

「まだ・・・まだ人間は・・・残っているさ」

「こうしている間にも、マーベリックの襲撃は何処かで行われている。終末が近いことの功を奏して、力も上がっているしな」

「うるせえよ！」

悠太の怒声を聞いて、政貴は呆れたように首をすくめた。

「・・・アレを見てみるよ」

悠太が顔を向けた先には、ドス黒い球体があった。先ほど見た時より、かなり肥大化している。半径三十メートルほどだろう。まるで、漆黒の太陽のようだ。

「世界の終末は刻々と近づいている」

近づく終末を、肌で感じた瞬間だった。

しかしそれでも、悠太は拳を再び固めた。

「俺は・・・死ねないんだ・・・」

「そうか、ならば・・・殺してやる」

諦めの言葉は、悠太の辞書から削除されていた。全ては世界のため、人々のため。

光

義明の放った空気の力は、高亮の前では無力に等しかった。全身全霊の力も、高亮は片手で防いでしまう。

「どうした・・・それで終わりか？」

満身創痍の義明は、満足に動けなかった。絶えず体が『諦める』と言い掛けてくる。自分自身で、死が近づいているのを感じた。

高亮は義明に歩み寄った。

「もう諦める。計画は大功だ」

そう言つて、ひざまずく義明の背中に手を置く。

「・・・何が目的だ・・・自己顕示欲の誇示か？それとも唯の目標か？」

「世界に飽き飽きしたんだよ。それに、大きな力も持った」

「くだらなねえ・・・くだらなさすぎる・・・ただの精神異常者じゃねえか」

「言われても構わない。自分でもそれは自覚している。自覚している上の行為だ」

高亮は義明の背中の上の手に力を込めた。

「じゃあな」

肉を貫くような、鈍い音が響いた。

義明は更に血を吐き、うめいた。義明の体の中心に、大きな穴が開けられたのだ。

「・・・ジワジワと苦しむんだな。俺が世界を支配するさまを、ジツクリと見るのだ」

「うるせえ」

高亮は高笑いしながら立ち上がり、背後を振り向いた。

「アナザーはもう局面を迎える！俺の世界が構築されるのだ！」

アナザーの種は驚くほど巨大化していた。依然、その不可思議な動きは続いている。

高亮はゆつくりとアナザーに近づき、片手を差し出した。ゆつくりと片手は光りだし、その光は漆黒のアナザーの種を包み始める。「や、やめるお！」

義明は全力を振り絞って叫ぶが、高亮の耳には届かない。高亮は尚も、アナザーとの一体化を続ける。

義明の悲鳴と、高亮の笑い声が重なった。まるでそれが、世界の終焉の鐘のように。

義明は、力尽きた。

義明はゆつくりとそのまま地面にひれ伏す。視界がボヤけ始め、それは死が近くに来ていることを物語っていた。

もう駄目だ。

すまなかつた、悠太。お前のために、何も出来なかつた。

義明の心は後悔の念に襲われたのだった。

そんな義明の視界に最期に映ったのは、

光だった。そこに存在するのは、影のほずであるのに。

義明は小さく笑った。神も見放しじゃない、と。

高亮の体は煌いていた。それは、アナザーの種との結合による光ではない。

清浄化の光だ。

高亮は悲鳴を上げていた。まさか、こんなはずではなかつた、と。「明・・・明かあああああああ！」

高亮を光で包んだのは、皮肉にも、アナザーとの結合に必要な不可欠だった高崎明の『光』の元素であった。理由は分からない。死後腐食しなかつた明の遺体同様の、奇跡である。

高亮は喘ぎ、苦しみ、天を仰いだ。光は体中に穴を開け、そこか

らまた光を放つ。

高崎明の、最後の『親の役割』である。暴虐の息子を止める、最後の力だった。

やがて高亮は、光となった。光の産物である影はやがて、光へとなったのだ。

高亮の笑い声が響いた。

同時に、光は瞬時に消え去った。

影と共に。

そこには、変わらぬ終末が繰り広げられていた。アナザーの種は、未だに不気味に動き続ける。

それが良かったかどうかは、分からない。しかし、義明はそれをどうすることもできない。義明は死に際である。

しかしその時、アナザーの種が消え去った。高亮と微かに結合していた種は、高亮の終息と共に、消え去ったのだ。

「明さん……」

『光』とは、奇跡だな。義明は小さく笑い、天を仰いだ。

空が青い。

「濱田……頼んだぞ」

義明は静かに目を閉じた。

それでも空は、青かった。大気が澄んでいるからである。

悠太は片ヒザをついた。体中はアザだらけだ。右手は悲鳴を上げ始めている。

「・・・クソ」

「・・・悠太・・・まだ、戦うつもりなのか」

ここまで力の差が見せ付けられているというのに、悠太は諦めなかった。

政貴は驚愕していた。悠太の底力に。大和魂、というべきだろうか。打たれても打たれてもダウンしないボクサーのようだ。

「当たり前だ・・・俺は・・・戦うと決めたんだ」

みんなのために。

悠太は叫び、自らを奮い立たせた。その声は町内に響き渡る。そして、フラフラと立ち上がる。

そんな悠太を、拍手が祝福した。

二人が音のあつた方を見ると、そこには、アンノが居た。

「いいね、君。最も人間らしい姿だよ。美しい」

アンノは心から拍手していた。鬼塚陽という異常な人間の中で生きていた彼にとって、人間味溢れる行動は微笑ましい以外の何ものでもなかった。

「な・・・何しに来た・・・」

悠太は身構えたが、アンノは小さく笑っただけだった。

「別に君と戦うつもりはないよ。結果はもう予想済みだ。そんなことより」

アンノは手の平を広げ、アンノに見せ付けた。

手の平には、二つの光が旋回していた。

「この光・・・誰のだと思う？」

悠太の顔が青ざめた。一気に冷や汗が飛び出す。

「・・・小田と新海？」

「そうさ」

それは元素だった。義明と直人の、真の姿。つまりそれは、二人の死を意味していた。

「新海・・・小田・・・」

「本当は取りこんでおきたかったんだけど、何が起きるか分からないからね。今、何か常識が覆されているみたいだし」

アンノは小さく笑う。そしてしばらく笑った後、悠太を見る。

「この元素・・・欲しいか？」

悠太はためらわず首を振った。

「遠慮しておく」

二人の元素を取り込むなど、二人に失礼だった。二人は悠太よりも命を張り、悠太のために余生を過ごした。だから、そんな二人を取り込んでしまうのは、二人の根底を否定するようで、悠太は消極的だった。

でも、

「その元素を・・・取り込まないで・・・自由にしてやってくれな
いか？」

せめて、最後まで自由にしたい。そして、戦いを見て欲しい。

悠太は二つの光に顔を向けると、ガッツポーズを見せた。

「新海・・・小田・・・俺、やるからな。お前らの思い、無駄には
しないからな」

僅かに、光がうなずいた様な気がした。プログラムと化した元素
にとつて、それは有り得ないのだが。

悠太は、政貴に向き直った。

そして、拳を固める。

「まっさん……いや、政貴……これで、最後にしてやる」

政貴は、鼻で笑う。

「望むところだよ」

悠太は力を込めた。僅かに大地が震える。友情と怒りの力によって、彼の力は膨大に増加したのだ。それは、人間というイレギュラー因子が成せる奇跡であった。ただの元素には、到底真似することも出来ない。

火と水が、互いに光り輝いた。真に力を解放したのだ。

『創造と破壊』

『維持と記憶』

二つの相反する力が、互いの存在を消し去るために、衝突するのだ。

「これで……終わりだああああ！」

水は絶叫した。

光（後書き）

次回・・・最終章『終末編』。

終末

価値観とは、人それぞれである。見る人間の立場によって、それが陳腐であるか、豪華であるかが分かれる。

基本、元素達はこの地球へ寄せる思いは軽薄なものであった。全ては世に従うのみななのだから。それが『帰属意識』の成せる芸当である。

しかし、『抵抗派』に帰属意識の発生はなかった。彼らの価値観は、人類という立場においての価値観を未だ保ち続けていた。原因は不明である。強いて言えば、これも世の考えなのかもしれない。そして、抵抗派の他にも、帰属意識の発生しない者が一人。アンノである。

彼はどちらかというところ、行動を起こさず、派にも定義されない者だった。全ては流されるままに。それがアンノのモチベーションだった。

アンノは二人の戦いを、微笑みを浮かべて見ていた。

どっちが勝つかなあ、と。

彼にして見れば、どうでも良かったのだ。世界の命運など。

世界の命運が懸かった火と水の戦いは正に、『人類』と『世』の代理戦争であった。親と子、師範と弟子、將軍と足輕。様々な呼び名に変換することができる。

火は自らの親を守るため。

水は自らを守るため。

双方は世の創生に欠かせない重要な元素だった。どちらかが欠けただけで、今この世の宇宙の法則は存在することはないだろう。

何度も言うようだが、そんな二大の元素が衝突したのは、あるイレギュラー因子が原因したためである。

無力な生物達が繁栄する地球。その中の無力な生物の一つが、やがて世界を変えることになったのだ。

今、人類は戦っている。

偉大なる最強の存在と。

ファカルティ

最終章

半径十メートルを超えるであろう火球を、悠太は右手に水の盾を張って受け止めた。その衝撃に耐えきり、悠太は水の『刃』を政貴の胴体に向かわせた。

火による防御。互いの攻撃は相殺され、大きな爆発を生み出す。

悠太は完璧なる覚醒を遂げた。今や宇宙の法則を超えて、『創造と破壊』の化身である新海政貴と、対等に戦っているのだ。威力や身のこなしも格段に向上した。これも全て、人間という存在が成せる業だ。人間が、宇宙の法則を凌駕するのだ。

悠太は爆発の中、再び水球で政貴を襲った。爆発の中で相手の姿が見えないが、大きな衝突音で、相手が防いだということが分かる。互いの視界が開けた。二人は再び身構え、互いの表情を認識した。政貴は多少の疲れの色は見せているものの、余裕の表情だった。代わって悠太は、ダメージと慣れない戦闘方法によってゲツソリと痩せこけていた。

一瞬の認識合戦はすぐに戦闘へと移行した。

二人は互いの元素を生み出し、ぶつけ合い、互いを傷つけあった。赤と青の閃光が空間を飛び回る。衝突音や破壊音は空気を伝わり、今や三キロという広範囲に渡ってその激戦の音は鳴り響いていた。

悠太の右手が政貴の顔面に直撃し、政貴の左手が悠太の顔面に直撃した。

二人は痛みに思わず声を上げ、互いに間合いをあけた。まるで地

面が体を引きずり込むかのように、二人はバタンと倒れこむ。

空は未だに青い。空の青は、空気と水のコンビネーションによって栄えているが、現実には、空気を司る者はもう存在しない。ならば水を司る悠太は、綺麗に澄んで見えているのだろうか。

世界は今、空の青さより、血の真紅に包まれている。

先に立ち上がったのは政貴だった。体をフラフラとさせながら、倒れる悠太を見下ろす。

「ふ……フハハ、無様だな」

政貴は悠太の襟首を掴み、空中に打ち上げた。思わず悠太は絶叫する。

瞬間、政貴は地面を蹴って飛び上がった。政貴の体は砂埃よりも早く空中へと投げ出される。

悠太はとつさに水の球体を出現させ、腹部に当てられる火球を防御した。しかし、火球の威力は凄まじく、盾越しでもその威力は絶大だった。

悠太はさらに上空へと打ち上げられた。

まずい。

悠太は瞬時に全神経を振り絞り、体中で水の力を集めた。

案の定、政貴が悠太の遙か上空まで飛び上がっていた。大きな火球付きで。

「これで終わりだああああ！」

政貴が絶叫し、同時に半径二百メートルはあろう巨大な火球が振り下ろされた。

悠太は叫び、落下しながら両手を前に突き出した。

太陽と月が衝突した。

二つの相反する物質は互いに引き寄せあった。衝突点は化学反応と破壊が展開され、双方が消しあおうと攻防を続ける。

しかし、ダメージを負った悠太は、やはり政貴の力には勝てな

かった。

遙か上空から、急激に悠太は地面へと叩き落された。太陽が大地に衝突し、大陸全土を揺るがすような轟音と爆発を発生させる。

あまりの衝撃に、悠太は一瞬意識を失った。

目を覚ますと、そこは破壊の世界だった。

焼け野原。という言葉がふさわしいと感じられるほど、その場所には何もなかった。

校舎も、森も、町並みも、全て。地面は真っ赤に変色し、辺り一面死の臭いが漂っていた。そこに『生』は存在しない。あるのは、『死』と『破壊』のみだ。

悠太は自分の周りを百八十度見渡し、啞然とした。

本当に、何も無くなっていったのだ。

『アナザーの種』を残して。

「本当に種は頑丈だなあ。一瞬心配してしまったよ」「政貴の声だ。今となつては、死神の囁きのように聞こえる。

悠太は背後を振り向き、死神の顔を見た。死神の顔は、自信に満ち溢れている。

思わずため息が漏れた。コイツは、人間じゃない。死神だ。

焼け野原を見渡して、悠太は唇を噛んだ。

これが、雷の望んだことだろうか。

破壊の無い死の世界に、雷は必要がなくなる。雷鳴が落ちる場所もない。照らし出す闇もない。

これが、空気が望んだことなのだろうか。

焼け焦げ、死の臭いを蔓延させる空気。こんな空気になることを、誰が所望したというのだ。生を保たせる生命体もいなければ、風化

させる残骸もない。

これが、俺の望んだ結末なのか。

こんな死の世界じゃ、俺が生み出す『生』も『文明』もない。

これは、雷鳴の覇者が望んだことじゃない。

これは、大気の守護者が望んだことじゃない。

これは、水の継承者が望んだことじゃない。

ましてや

これは、地上の代行者が望んだことじゃない。

これは、剛力の伝道者が望んだことじゃない。

そして

火の継承者も、望んでいないはずだ。

悠太は拳を握り締めた。自然と力が沸く。しかしこの力が、悲しみからなのか怒りからなのか、全く分からなかった。

ただ、目の前の者を、排除するのみ。

不意に視界の中へ、アンノの姿が映った。あれほどの破壊を簡単に防いだのだろう。アンノは無傷に近かった。

もう、人類の存亡や、世への反逆など、どうでも良かった。少な

くとも、ここには悠太の望んだ世界はない。

「お前を殺す」

心の声が破調となって出現した。

政貴は笑みを浮かべた。ただ、それだけだった。

「無理だ。これを見て、そう思わないのか？」

「思わない」

政貴は元素そのものだ。覚醒し、元素の究極の姿だ。人間という装甲を完全に超越している。

しかし悠太は、あくまでも人間だった。彼は覚醒し、元素の究極体になり、そして人間という装甲と上手く手を結んでいた。

つまり悠太にはまだ、可能性があるということだ。人間というちっぽけな容器が持つ、莫大な可能性を。

「・・・これで最後にしよう。全身全霊の力をもって、お前を倒す」
「いいだろう・・・本気でかかってやるよ」

政貴は拳を鳴らし、ゆっくりと目を閉じた。

悠太はそんな政貴を一瞥し、空を見上げた。

小田、新海。

そう心の中で呟き、悠太は目を閉じる。

この青い空を守る。みんなのために。

もうこの世に、悠太を支えてきた存在は無い。しかし、世界には未だ、互いを支え合って生きている者達が、大勢いる。

それを、守らねばならない。

不思議と力が沸いた。恐らく使命感によるものではなく、愛なのだろう。

悠太は全力で力を溜め込んだ。

勝つ。救う。

悠太の頭の中は、それでいっぱいだった。

大地が震えだした。当然だ。二大の元素が全ての力を振り絞っているのだから。

これで最後だ。

悠太は雄叫びを上げた。
政貴は雄叫びを上げた。

悠太を『青』が覆った。
政貴を『赤』が覆った。

「これで終わりだ」

「あたりまえだ……これで……」
俺は勝つ。

二人は全速力で走り出した。互いの体が帯びた力を、互いに衝突させるためだ。

水は叫んだ。

次の瞬間、

火と水が、衝突した。

一ヶ月に及ぶ『世』と『人類』の代理戦争は、これで終わるのだ。十五歳の幼い少年達が傷つけあい、互いの思想や理念を守ろうと必死に戦ったこの戦争が、終わるのだ。

彼らは人類の命運を背負わされた、異能の者達だ。

ファカルティ

彼らの総称に相応しかった。

そして、終末を迎えた。

H a l l e l u j a h ! !

僕の名は濱田悠太。今やその名前も、僕の脳内から薄れつつある。僕は元々元素だ。濱田悠太という名は、人間界で互いを区別するための、ただの文字に過ぎない。名前が本質というわけでは、ないのだ。

僕は今、『無』という世界の中にいる。何もない。目の前には広がるのは、漆黒の世界であって、光輝の世界でもある。時間という概念も、空間という概念も存在しない。物質という概念もだ。じゃあ、僕はなんだろうって考える。でも、それさえも『無』は教えてくれない。

僕は光だった。でも、この世界のルールじゃ、『光』ではない。とにかく、僕の薄れつつある記憶の中で考えられるのは、『光』という呼称だった。

光は僕の他に、二つあった。

僕の目の前だ。でも、これは僕の背後かもしれないし、僕の右側かもしれない。

僕の薄れつつ記憶の中でも、この二人の光には、名前があった。

『新海政貴』

『アンノ』

という名だ。可笑しな名前だ。僕の名もそうだが、人間というのは意味の不明な名前を付けたがる生き物だ。『濱田悠太』『新海政貴』『アンノ』。法則も何も見出せない、ただの文字の羅列。でもそれが、人間にとっては意味を持つ。

僕は政貴とアンノに、過去を覚えてもらった。この過去も、一秒前の過去かもしれないし、数億年と前の過去かもしれない。

かつてこの無という世界は、存在していなかったらしい。『世』というものが存在していたらしい。どこか懐かしい感じだ。

政貴は僕に、いろんなことを教えてくれた。政貴自身も、記憶を段々失っていくというのにも関わらず。

その『世』は、僕と政貴の衝突によって消滅したらしい。

僕の力と、政貴の力。その二つに共鳴した『種』が、反応を起こして、瞬間的に爆発的で膨大な途方もない力を発生させたらしい。

それが、『世』を消滅させた。

聞いた話だが、僕は『世』の終末を止めようと政貴と戦ったらしい。おかしな話だ。同じ元素同士で殺しあうなど。

殺すことは、『存在を消す』ことだそうだ。この世界には、『存在』という概念もないから、それもよく分からない。じゃあぼくは何なのだろう、って考えても、実は考えていないし、頭が痛くなるように、痛くならない。

そんな力オスな世界で僕は突然、あるビジョンを見た。

小田義明。

新海直人。

中込宏太。

川口翔馬。

高崎明。

鬼塚陽。

野中高亮。

この文字達は、僕が戦った『仲間』だと気付いた。そして、僕はある衝動に駆られた。

『世界を創生しないか』

元来、元素に欲は存在しない。しかし、人間という存在が僕の元

素に、ある欲を刻み付けたのだと思う。そうでないと、僕はこんな行動を起こすはずもない。

政貴とアンノは最初は驚いていたが、やがて行動を起こす気になった。彼らの元素にも、何かか刻み付けられていたのだろう。

そして僕は、刻み付けられた『欲』に従い、計画を立てた。

『幸せ』というものに、みんなをさせるらしい。僕と共に戦った『仲間達』を、幸せにさせるらしい。みんなが『笑い』というものを常に持ち続ける世界にするらしい。『人間』という存在らしく生涯を生き抜かせるらしい。

『幸せ』という定義は難しいものがあつた。でも、僕はその『欲』に従うことで、なんとか『幸せ』にする計画が立つたと思う。その『幸せ』でも、不十分なのかもしれない。

そして最後に一つ、ある『ルール』を付け足した。これは、『欲』によるものではない。アンノの願望だ。アンノは何故か、最後の最後まで記憶を保っていた。

そして完全に、僕は記憶を失った。いや、これから失うのだろう。他の『光』もだ。

三つの光が結合した。三つの光は多大なる力を発生させ、瞬間的に高密度の大爆発を引き起こした。

こうして、世界に『空間』と『時間』、そして『火』と『水』が誕生した。

世は、創生された。

ファカルティ

俺の名は、小田義明。

小さな地球の、小さな国の、小さな県の、小さな町に住む中学三年生。

中学三年生は、やはり受験に追われる。勉強という壁が押し寄せ、どうしても俺は逃げ出したくなる。

今、季節は秋だ。肌寒くなってきたから、恐らくもうそろそろ冬だ。十一月なのだから、当然のことだが。

今日も終業のチャイムが鳴った。俺はすぐに身支度を整え、帰りの準備をする。誰かと会話したいが、今日は帰る気の方が大きい。なんだろうか。

いつもは親友の中込宏太と帰るが、今日はその予定をすっ飛ばした。何故だろう、理由は分からない。しかし、宏太も川口翔馬と遊ぶ予定だったらしいので、ちょうど良かった。

俺は玄関に出ると、いつものように新海直人に「さよなら」と告げ、玄関に立つ二人の先生に別れを告げた。二人の先生の名は鬼塚陽、高崎明という。二人は学校でも評判の仲の良い夫婦だ。結婚十年目なのに、未だ新婚気分という可笑しさだ。学校での姿は、微笑ましすぎて見ていられない。

俺はいつものように自転車を引きながら、坂道を登って家を目指す。何故かその行動が、定められていたかのようだった。

そんな俺を、誰かが引きとめた。

振り返ると、野中高亮がそこにいた。いつもは下から帰るのに、何故か今日は上からだという。

「話がある」

おいおい、決闘かよ。受験の前に喧嘩は

高亮は真つ先に否定した。思いつめた表情で、

「頼むから聞いてくれ」

と言う。なにかあるらしい。恋の相談は、受け付けてないよ。

高亮が突然話し出したのは、とんでもない話だった。

世界が『終末』を迎える危機を救うため、俺や、新海直人や、『濱田悠太』という少年が、中込宏太、川口翔馬、『新海政貴』という少年と戦うらしい。なんだそれ。しかも俺は空気の能力者。馬鹿らしい。

そう、普通に聞けば、馬鹿らしい話だった。そもそも、『濱田悠太』、『新海政貴』って誰だよ。聞いたことがない。

しかもこの話は全て、生まれてからいつも見ている夢なんだそう。こんな可笑しな夢を見させられている高亮は、病院に行ったほうがいいのかもれない。

でも、その話には俺は魅了された。何故だから分からないが、体ごと引き入れられるような感じだ。

そんな俺に高亮は、

「この夢で、小説を書いてくれ」と言った。

俺は小説を書くことができる。小説を書くのが、俺の生きがいだ。最近では勉強そつちのので、小説を書いている。それが俺の長所でもあり、特技だった。

俺は二つ返事で承諾した。面白そうだからだ。

そして俺は、高亮から夢の詳細を聞きだし、メモして、小説を書くことにした。

メモの時点で、その話は魅力的だったし、可能性をも感じさせた。

今から俺は、その話を書くと思う。だからこうやって、パソコン

の前に座っているのだ。

俺は上を見上げた。もちろん、上には無機質なゴツゴツとした天井があるだけだ。

でも、青空が見えるような気がした。高亮の夢の中の『濱田悠太』という少年は、青空をしきりに見ていたらしい。それも分かる気がする。母なる海というが、母なる空でも、十分その壮大さを感じる。

『濱田悠太』

『新海政貴』

良い名前だ。何故か、心の奥がポカポカと温まる。

俺はパソコンを起動させ、wordソフトを開いた。

リズムよくキーボードを叩き、俺はその真っ白な世界にもう一つの『世界』を構築していく。小説とは、世界の構築だからだ。

題名はもう、考えてある。語呂も良いし、夢の中の戦士にはピッタリだ。

ファカルティ。

素晴らしい名だ。

この物語を、夢の中の『元素』達に、贈ろう。

命捨てて戦った、戦士達のために。

ファカルティ（後書き）

みなさん、ご愛読ありがとうございました。

これは、最初、中二妄想でした。しかし、皆さんのお力添えで、具現化することができました。ありがとうございました。

見ての通り、ただの中二病の小説です。

ところでみなさん、この世界が、「ファカルティ」の様な世界だったら、どう思いますか？ 僕らの知らないところで、『濱田悠太』や『新海政貴』のような人々たちが、世界を創生したのかもしれない。

そんなことを考えたら、案外この世界も面白いなあ、なんて考えるものです。

最後に、したならばのごく一部のみなさん、ご協力、ご参加、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4377o/>

ファカルティ

2011年1月26日01時40分発行